
PHILIA Another ～災厄ノ箱～

結城蒼汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PHILIA Another 〜災厄ノ箱〜

【Nコード】

N9754U

【作者名】

結城蒼汰

【あらすじ】

典型的なミリタリズム国家としてその名を馳せる、世界最大の軍事大国パンドラ。

かの国は、建国時から国家二大方針として平和と平等を掲げているが、度を越えた軍拡や、広がり続ける貧富の差から、現在は理想と大きくかけ離れた国へと変貌していた。

主人公の青年は、軍人という立場よりも己の理想を重視し、国の大規模改革の必要性を示唆してきた。だが、何年経っても国状は変わらず、落胆を募らせる日々を送っていた――。

しかし、一つの事件を切っ掛けに、事態は大きく変化することになる。これは反逆から始まる物語。

基本的に一話分の文字数が一万以内になることはありません。

プロローグ

世界は進歩を、ヒトは繁栄を求め生き続ける。

世界創成期から存在すると言われている武器《起源宝器》オーバーパスの発見

により、人々の生活は急速に発展した。人が生まれながらにして体内に持つ生命力をエネルギーに変換する能力が、遂に生活面にも転用されたのだ。

それにより、火を付けるまでに苦勞することも、水を遠くまで汲みに行く必要もなくなった。

《生命力》ライフエナジーを注入したひし形の物体を一家に数個置くだけで、生活環境は一変する。家具や設備も大幅に改善され、時代は異常な早さで先取りされていった。

軍事大国パンドラも、その影響を受けた一国家だ。

軍国と称されるだけあって、最も変化した点は戦闘である。重々しい鎧や武器に莫大な資金を注ぎ込んだこれまでとは異なり、簡素な服装での白兵戦が現在の戦だ。重量感たっぷりの鎧は脱ぎ捨てられ、《生命力》ライフエナジーを纏った片手剣によるハイスピード戦法は勝利の鍵とも言われている。

パンドラはその時代変化に素早く適応し、現在の地位を維持し続けることができていく数少ない国であり、適応に間に合わなかった小さな国々が大国に吞まれる中でも生き残った国だ。

そして、その変化に何ら動じることなく適応してみせたのが――。

「――人は平等である！」

楕円形の机に乗せられた右手を大きく掲げ、パンドラ現総統はいつもの口癖を高々と言い放った。ステージ上に立つ長身痩躯の男から発せられたその台詞に、集まった軍人たちが真剣な眼差しを返す。

無論、僕――アトラス・フェールも表情だけは他の者たちと同じ。緋色の髪から覗く目付きも、周りに気取られるほどの変化はない筈だ。

真つ黒な軍服に身を包んだ者たちと決定的に違う点があるとするならば、それは台詞を聞いた瞬間に抱いた感情であろう。平等を謳うパンドラが、世界で最も軍隊を保有している。しかもそれは抑止力としてではなく、領土拡大——表現を変えれば戦争を目的としている。

矛盾にも取れるこの事実を掻き消すような一言、僕はそんな彼の口癖が大嫌いだった

プロローグ（後書き）

初めまして、結城蒼汰です。この度、FC2で執筆中の小説を此方でも書くことにしました。理由はただの気紛れなので追求しないでください（笑）。

あらすじを書いてて思ったのですが、FC2と同じく六百文字ほどで書いたらもの凄く見辛かった……。なので、かなり簡略化しました、許してください。

正直、もっと長ったらしく書きたかった……。

反逆の兆し

国軍本部。それは首都に存在するパンドラの国家中枢機関である。四方を高い城壁に覆われ、内部には数百以上の軍人が常駐している。仮にそこに足を踏み入れれば、黒の礼服に血のラインが入ったような軍服を身に纏った連中と否が応でもすれ違うことになる。だからだろうか、軍人以外は本部は疎か支部にすら顔を出そうとしない――いや、もしかしたら軍人に会う会わないの問題ではないのかもしれない。

パンドラは総統を国王とする絶対君主制の国だ。とはいっても、軍事力によって中央集権を初めとする全ての統治体制を確立しているので、軍事国家と大して変わりはない。

中央集権で形成されたピラミッド型の階層によって、パンドラは意図的に格差を発生させた。貧富の差は広がる一方で、それは地方に行くほど酷くなっていた。

裕福な者だけが得をし、貧乏な者はそれに縋ることしかできない国。軍事大国パンドラはそんな典型例だった。

貧困の中で育った僕も、その苦い経験を味わった一市民だった。幼少期から生活難に見舞われ、生きるのに必死だったあの頃にとつて唯一の救いだったのは、貧民街で出会った他の子たちと身を寄せ合って生活してきたことだ。通常では味わえないであろう状況が皮肉にも明日を生きる原動力となり、十五歳で軍に入るまでの期間を生き抜くことができたのは否定しようのない事実だ。

それから数年の時が流れたある日。本部の屋上でやり取りした僅かな会話が、今でも鮮明に思い出される。

「この国は、変革を求めてるんだよ」

少女は屋上からの景色を見下ろすことはせず、ただ寂しげに空を見上げていた。

両手を背に回した姿は華奢で弱々しく感じるが、実際の彼女は包

容力に溢れ、不思議と一国を支えるには十分だと思わせるところがある。背中まで伸びた金髪はよく手入れされており、重力に反発しないほど癖がない。

僕は彼女の後ろ姿を追うように近付き、真横まで行ったところで問い掛けた。

「貴方もそれを求めているのですか？」

「……分らない。でも、皆が平等に暮らせる国にするには、今のままじゃ駄目……だとは思う」

それは素直に同意できた。パンドラの軍人としても、今の統治体制には納得できないものがあつたからだ。

「だって、アトラスもよく言ってるじゃない？」

不意に出た自分の名前が注意を引き、僕は彼女の表情を窺うように首を動かした。

パンドラ現總統の娘、シェリー・デモンズスピードはまだ幼い顔立ちに喜色を浮かべ、目線を合わせながら覚えての言葉を自慢げに口にした。

「《ワンフォーオール・オールフォーワン》……でしょ？」

無邪気に笑う彼女。その純粋な願いを叶えたいと思つたのは、きつとこの時からなのだろう。

1

この国は腐っている。

目前の光景を目の当たりにした瞬間、アトラスの口から飛び出したのは何てことのないただの事実だった。

ビブリオーテは東部中心都市であるが故に比率的には貴族が多い。国軍第二支部駐屯地であり治安は良好なほうだが、それでも平民と貴族の歴然とした差異から生まれる格差は一向に変わらず、貴族に真正面から逆らった平民がどのような仕打ちを受けてきたかは口にしたくもない。

その光景が眼前で行われようとしているのを知れば、軍人としても元平民としてもそれを止めずにはいられない。それがアトラスの性分でもあった。

切っ掛けはほんの些細な出来事だったのだろう。状況を一瞥した限りでは路地裏の狭いスペースを行き来した両者がぶつかり、その片方の中年が貴族で、そしてもう片方の青年が平民だったのが事の始まりだと感じ取れた。

金糸刺繍を施した服に艶やかな革靴と、明らかに高価な物で身を包んだ貴族の両隣りには従者が一人ずつおり、アトラスが現場を目撃した時には既に腰の剣帯に吊るされている筈の剣は抜かれていた。対して、飾り気のない簡素な服装で身を整えた青年は武器すら持つておらず、攻防しようにも道が狭過ぎて対処に困っているようだった。

そして、硬直した時間は貴族の口から放たれた冷酷な言葉で突き動かされる。

「――殺せ」

空気が一変した。激しい戦慄がアトラスの肉体を襲う。咄嗟に見開いた両目には驚きと焦りが投影されているだろう。

アトラスは瞬時に判断を下した。舌打ちをしながら地面を蹴り、目標との距離を急速に縮め始める。腰に携帯した剣の柄を右手で握り締め、間合いを正確に確認しながら抜くタイミングを計る。対象まで約十メートル。相手はまだ此方の存在に気付いていない。

しかし従者が剣を振り上げるまでに掛かった時間は、アトラスの予想を僅かに上回っていた。

目前に映るであろう予想外の光景からか、青年は脱力して尻餅を付いた。無理もない。傷一つ負わせていない筈の男からの命で真剣制裁が下されるなど、理解に苦しんで当然だ。

アトラスは眉間にシワを寄せながらさらに加速した。対象まで後五メートル。途中で貴族に気付かれて視線が交差するが、構わず無視する。

天に掲げられた二つの剣は青年の体を捉えるように刃を向けた。途端に白銀の刀身が彼の頭上で煌めき、容赦なき鉄槌として振り下るされ――

激しい衝撃音が響き渡った。

「間一髪、といったところでしょうか」

アトラスは水平に構えた剣で二つの剣を一度に受け止め、口元に余裕の笑みを浮かべた。想定外の事態を前に従者の二人が一時的に距離を取る。

軍人とはいえ、この状況下で本当に余裕があるわけではない。頭数では不利な上に、従者の実力は姿形だけで把握しようとしても不可能。しかも背後には武器も持たない一般人がいる。

現状が劣勢なのは明確だったが、虚栄もハツタリも使い方次第。優劣が一目瞭然な時ほど、優勢を装う演技は重要性を占めている。

――とはいえ、それが可能になるのは、敵が少人数の時に限るが。相手が離れたのを確認した後で身構えを解き、背後に目を向ける。問題の青年は掠り傷一つなく五体満足で、アトラスは胸を撫で下ろした。気持ちを切り替えながら視線を正面の貴族に戻す。

酌量の余地すら無視して、平民に殺意を向ける貴族。身分の差を利用して、まるで自分たちが正義だと主張しているかのように見える、傲岸不遜な振る舞い。相変わらず気に入らない。肅清の必要があるかもしれない。

剣の柄を握る手に力が籠る。視線が従者を押し退けて貴族を捉え、心底から混じり気のない殺意が湧き上がってくる。

貴族の中年はアトラスの顔を見るなり数歩後ろに退き、震える声で言った。

「フエ、フェール卿!？」

トリニティバレット
《三銃士》のリーダーが何故ここに……

!？」

昔なら自分の名前が他者に広まることは毛嫌っただろうが、今となってはそれが都合良く作用することもある。今回のようなケースには尚更だ。軍人なら今の有名性は誇るべき代物なのかもしれない。

第二支部で文字通り最強の座を有する《三銃士》。世界初となる回転式拳銃の試作型を所持することが許された三人の剣士、それが名の由来だ。構成員が第二支部の人間だけになったのは偶発的な出来事だが、おかげで東部での知名度は馬鹿みたいに高い。現に先ほどまで横暴な振る舞いを見せていた貴族は豪く恐縮した態度に一変している。

「刹那的な感情に左右されるのは僕の主義に反しますが……」
それでも、目前の現実を虚構とすり替えるよりは正当な判断に違いない。

地面に接するほどに下げていた剣を中段に半身状態で構え、相手を威嚇する。この場合、相手の対応次第では斬り合う他に方法は無いが、この男が一般的に知られる貴族なら……。

「ま、待つて下さいフェール卿！ 私に貴方と戦う意思是……！」
「なら、選択権がある内に僕の視界から消えて下さい」

有無を言わさぬアトラスの言動に、貴族は得体の知れない生き物でも見たように恐れおののいた。途端、従者に納剣を命じてアトラスに背を向け、貴族たちは逃げるように路地裏から去って行った。

「……」

思った通りか――。

どうやら彼はアトラスより身分的に劣る準貴族のようだ。本来、準貴族は貴族ではないのだが、平民より身分が高いのは事実なので貴族として扱われることが多い。そしてそういった輩ほど身分に溺れ、行き当たりばつたりの事件を巻き起こす。

実際問題、本物の貴族なら幾ら人通りが少ない路地裏とはいえ真昼間から人を殺そうとしたりはしない。遺体の処分に困るし、何より軍人の目に触れれば大問題となって最悪の場合は爵位を剥奪されるという危険を伴うからだ。

「全く、無益な殺生ほどナンセンスものはありませんね」

左手で後頭部を掻きながら、アトラスは溜息を付いた。反対の手に握った剣を鞘に納める。

通常なら在り得ない出来事が平然と起きる、それがパンドラという腐敗した一国家。

今件がその一端に過ぎないと思うと実に不愉快だが、貴族が一概に悪と言い切れないのも悲しい現実だろう。《ノブレス・オブリージ》を重んじる貴族は社会に有益な存在でもあるし、中には雇傭者の衣食住を世話する物好きもいるという噂には慟哭しそうにもなる。

この世に絶対悪は存在しない。それは価値観の相違によって発生した善悪、その境界線の曖昧さが証明してくれるだろう。所詮、人が持つ善悪の定義など、過去に与えられた先入観が八割を占めていると言っても過言ではない。現にこの国では他国の当たり前が通用しない時だってあるのだ。

――だが。

貴族が善であろうが悪であろうが、国の大規模改革の必要性は変わらない筈だ。そうでなければ大見得を切って入軍した意味が失われるし、媚まで売って伯爵に成り上がった実績も水の泡になる。あの時の誓いも――。

「お前、アトラスか……？」

不意に背後から投げ掛けられた言葉にアトラスは仰天した。

声に覚えは無かったが、方向的に先ほど助けた青年が発信源だろう。アトラスは反射的に振り向いて彼の姿を双眼に捉えた。

外見を一見した感想としては、珍奇な男だと思った。ここまで威圧的な雰囲気を持つ人間は少ないだろう。年は二十前後だろうか。大人しめの茶髪、顔は博学と真逆の印象を持ち、吊り上がった大きな眼を中心とした威勢のいいものだ。痩せた長身をセピア色の薄手のコートで包み、地面を踏むための両足には黒のレザーブーツを履いている。

見覚えは無かった。正直なところ記憶力には多少の自信があるのだが、ここ最近で彼の姿を見た記憶は無い。軍内にも、知り合いの貴族にも、彼と一致する人間はいない筈だ。

「……何処かでお会いしましたかね？」

疑問から思わず問い返してしまうと、彼は数秒ほど真顔で沈黙した後で無遠慮に哄笑した。その意外な行動に、アトラスは意味も分からず呆然と立ち尽くすしかなかった。

やがて笑い終えた彼が謝りながら、アトラスとの関係性を示すであろう自分の名を口にした。

「シャルルだよ、シャルル・イーグルス。お前と同じ村で育った利かん坊のな」

今度は聞き覚えのある名前だった。そして後の同じ村というキーワードから、アトラスは彼が何処の誰なのかを特定するに至った。

そうだ。彼は僕が入軍する前日まで生活を共にしていた男だ。昔から融通の利かない堅物で、一度決めたら誰の忠告も受け入れない頑固者。それでいて行動力だけは無駄にあり、喧嘩では一回も勝てないまま別れた、僕の……生まれて初めてできた無二の親友。

「ど、どうしてここに……、君はまだ村にいる筈じゃあ……」

不覚にも、再会の歓喜よりも先に驚愕が零れた。それもその筈。

何せシャルルは村のガキ大將的なポジションにいたし、村長の息子でもあつて将来的には後を継ぐ予定だったのだ。そんな彼が十年経った今になって村を離れ、わざわざこの地を訪れたという出来事は意外なんてレベルじゃなかった。

「ちよつと用事があつてな……。それにしても、感動の再会を前に喜ばないとは、相変わらず冷淡な奴だな」

言葉を濁すような彼の物言いは、その後に述べた違つ話題によって差し替えられた。

——だが、この地を訪ねた理由はどうあれ、昔から大して変わっていない親友の姿をこの目で見たのは収穫だった。それだけで息苦しい軍で生きてきた甲斐があつたとすら思える。

「……フツ。君も相変わらず悪運は強いようだな」

「言ってくれるな。さっきのはあからさまに相手が自分から衝突してきたんだ。——とんだ難癖を付けられたよ、全く」

変わらない日々ほど無意味で詰まらないと思うが、変わらない友人の存在というのは実に有り難いものだ。

目前の懐かしい男が不意に手を差し出してきた。どうやら再会の握手を求めているらしい。その意図をくみ取ったアトラスは無意識に口元に笑みを浮かべながら迷うことなく右手を出し、彼の手を取った。

「久しぶりだな、シャルル」

この時、二人はまだ知らなかった。今日の再会が偶発的なものではなく、必然的なものであったことを。

街中をぶらついた後、二人は居住区を少し離れた所にある草原の地に腰を下ろしていた。

生粋の田舎っ子であるシャルルは人口や商店数などといった、自村と中心都市の違いに驚愕すると同時に興味を持ったようで、気付けば彼があちらこちらと指差す方向にアトラスが案内する羽目になっていた。

まず食品店に始まり、衣服や雑貨類、武器屋や図書館に至るまで、何と三時間で約十五件ほど回って歩いた。今更ながら馬車を使うべきだったと後悔している。

「いやービブリーオーテは初めて来たが、やっぱり凄いな。人間も建物も驚くほど多い。店の品揃えも豊富だし、市街探索で数ヶ月は暇を潰せそうだ」

陽気な口振りでそう言いながら、シャルルは雑草の茂る地面に体を寝かせ、枕替わりに頭の後ろで手を組んだ。

どうやら昔の体力馬鹿なところは十年経っても変わっていないらしく、相変わらず彼は疲れるということを知らないみたいだった。アトラスは軍という職に名を連ねているため体力はそこそこあるほうだが、それでもシャルル同様に全く疲れないという振る舞いを見せるほどの余裕はなかった。幾ら見慣れた道でも何度も右往左往

して長時間連れ回されては身が持たないというものだ。

自分の右側に寝そべる親友の姿を見下ろしながら、アトラスは皮肉交じりに言った。

「欲しい物があつたなら、今度は相応の金額を用意しておくんだなじゃないと、今回のように手ぶらで帰る始末になる」

「ハハハツ、違うない！」

非番だったアトラスは散歩感覚で出歩いていたので、今回は運悪く金銭を所持しておらず、買い物は道案内というかたちで終わってしまった。

シャルルに至っては……まあ何をしに来たのか知らないが、滞在期間と同じ日数の宿代・食事代しか持ち合わせていなかった。中心都市で過ごすには流石に乏し過ぎる。

「それにしても、まさかお前が爵位持ちのエリート軍人で、しかも堅苦しい敬語キャラになつてるなんてな。時の流れとは本当に恐ろしい」

唐突に体を起こし、うんうんと首を縦に振りながら話すシャルルに、アトラスは思わず苦笑した。

「それは君も同じだろう？ 中身は全く変わっていないようだが、正直外見的な要素だけでは君だと分からなかったよ」

昔は我が強くても見た目は普通だったので、今ならまだ可愛らしさがあつたようにも思えるが、成長した目のシャルルはどこからどう見ても柄の悪い少年にしか見えない。少し前に遠征で地方に行った時に兵刃を交えた山賊の若頭にも負けず劣らないというか……。

完全な悪役キャラに成り下がってるな……。

内心を打ち明けると大変なことになりそうなので口には出さず、とりあえず今思つたことは墓場まで持つていくことにした。

淡々とそんなことを考えていると、隣のシャルルが思い出したように口を開いて尋ねてきた。

「そつえば、トリニティバレット《三銃士》のお前なら回転式拳銃の試作型を使った

ことあるんだろ？ その…… どうだった、使ってみた感想としては？」

回転式拳銃の開発は現在パンドラのトップニュースであり、物好きは国立研究所の研究チームを訪ねたりするほどらしい。一般常識ではあるが、流行に疎いシャルルがそれを語ると何だか彼がミイハ―に見えてくる。

回転式拳銃の使用を認可されている三銃士はデータ収集の一環として射撃訓練などを義務付けられているため、拳銃は比較的触る機会が多い——というより、よく触る。

アトラスに関しては他の二人と違い常に携行しており、今も懷に忍ばせている。理由として、表向きには『万が一の護身と自宅訓練での情報収集』といって半ば強引に許可を取ったが、本当の理由は口が裂けても言うわけにはいかない。

それはいいとして……… 使用後の感想、か。

「そうだな……、装弾にはまだ時間が掛かるが、弾は基本的に直進だから慣れれば当たるようになる。ワンハンド射撃と六発の装弾数という強みから、訓練次第では連射も夢じゃない。性能面では今までの拳銃と雲泥の差だ。とはいえ、一発の威力はマスケット銃のほうが上だな」

「……へえ。なら、剣が築き上げた時代はもう終わって、これから銃がそれを引き継ぐことになるのか？」

数秒の沈黙。

「……これは仮定の話になるが……。銃弾を全自動で、尚且つ高速で連射できる銃が生まれれば、剣の時代は確実に終わるだろうな」

だが、そんなものが戦線に投入されるようになれば、戦場はただの処刑場に一変してしまうだろう。

目的を勝利という理想的なかたちに集約し、そのために手段を選ばず圧倒的な兵器で敵軍を瞬時に殲滅する。そんな戦争は……虐殺でしかない。そう考えると、白兵戦だ一騎打ちだと言っている今はまだ良いほうなのかもしれない。

剣の時代。それは剣タイプの《起源宝器》^{オーバーバックス}が築いたもの。槍や斧などが生まれる中でも主要武器としての地位を保ち続けてきたのは圧巻だ。軍人で帯剣を認められているアトラスにとっては体の一部と思えないこともない。

その存在が他ならぬ銃によって脅かされているというのは、剣と銃、その両方を所持しているアトラスを少し複雑な心境にさせる。

《起源宝器》^{オーバーバックス}だけでも戦局が左右されるというのに、剣と銃による主要武器の奪い合いが……。

どこか釈然としない思いを抱え、アトラスは予想する。

「剣か銃、あるいはそれ以外の何かなのか。どちらにせよ、近い未来に戦争はその姿を変えてしまうのかもしれない……」

「戦争、か。平民の意見としては無くなって欲しいもんだな。……

まあ、それはそれとして、一先ず礼を言うておくよ。やつぱり持つべきものは友達だ。パンドラでも屈指の戦闘力を持つと謳われる部隊にお前がいるっていうのは、俺としても鼻が高い」

「だとしても、君の自慢話には入らないよ、きつと。それに……」
どれだけ上を目指したところで、この国は……。

苦笑いでの言葉。声に出さなかったそれはシャルルではなく、自分に対しての苦々しさを表したものだった。

変わらない国への不満、変えられない自分への不満。どちらもアトラスを苛立たせる要因の一つ。現実を知る瞬間であった。

「なあ、シャルル。君はこの国の現状をどう思う？ 貧富の拡大から在り得ない出来事が平然と起き、軍拡しか取り得のない国軍を」

——その不満が友人を前に零れてしまったのは、信賴故の不覚なのかもしれない。

アトラスの突然の問い掛けにシャルルは愕然と目を見開いて沈黙した。だが無言の時間は僅か数秒で終わり、シャルルは言った。

「——随分と悲觀的に見てるんだな」

「十年も軍にいれば、嫌でも思うことがあるさ。内側からの改変を夢見て昇進を続け、爵位にまで手を出した愚か者の末路は、何一つ

変わらないこの国が証明してくれる……」

トリニティバレット

村を出て十年。あの人の護衛を辞め、《三銃士》に抜擢されて二年。結果としてこの国は十年前と何一つ変わっていない。根本的には昔のままだ。

どれだけ地位が高くなっても、自分が求めた結果は得られない。十年の月日を費やして得た経験の末、アトラスは自らの理想を諦めるしかないという結論を導き出していた。

「……確かに平民と貴族の落差は広がるばかりで、スラムの住民は今も増え続けている。パンドラは国家二大方針の一つである平和を目的とした軍拡に資金を注ぎ込むあまり、片割れの平等を蔑ろにしているからな」

「ミリタリズム国家の典型例だ。三権を軍で纏めて掌握するから権力の濫用が起きている。それをどうにかするには、軍内から権力を分断させるしかない」

しかし幾ら軍人でも、絶対君主制の軍国にそんな夢物語が実現できるわけがない。仮にそれが可能だったなら、この国はアトラスの手によってとうの昔に変わっている筈なのだから。

「あんな、アトラス。そのことなんだが、実は俺も……」

その時だった。背後から馬の足音が聞こえ始め、その音が次第に近づいてきたのは。

「フェール卿！」

アトラスたちが振り返るとほぼ同時に、大きな呼び声が聞こえた。二十メートルほど先にいる馬に乗った人間からだ。目を凝らして見ると軍人で、おそらく伝令役として派遣された後、アトラスを探し回っていたのだろう。

アトラスと同じ軍服姿で現れた男性は、馬を下りるなり慌てた様子で言った。

「トレヴィル少将から召還命令です、至急第二支部にお戻り下さい！」

余程のことがあったのだろう。慌てふためく彼の姿を目の当たり

にしたアトラスはそう直感した。嫌な予感が的中しなければいいが……。

男の話をさらに聞くと、既に馬車の手配は済ませているようで、それに乗って早急に支部に戻って欲しいとのことだった。

アトラスはゆっくりと腰を上げ、仕事モードにスイッチを切り替えて淡々と告げる。

「分かりました、すぐに行きます」

返答を聞いた男は予約した馬車をここに呼んだ後で本部に向かうと言って馬に跨り、二人のもとを去って行った。

あの急ぎ様……、まさか支部内で何かが起こっているのか……？

しかし街の様子を見る限りその感じはない。異常時には軍内も市街もこった返しているため、東部の中心である第二支部で何かあれば必然的に市街は穏やかでなくなるのだが、ここから眺めた印象としては特に変わった様子は見られない。

戻って確かめるしかない。アトラスは呆然と此方を見詰めているシャルルに向け、哀別の意を込めて微笑んだ。

「悪いな、話はまた後日になりそうだ」

「休日でも呼び出しか。——軍人は忙しいな」

数分後、伝令役の男が呼んだ馬車がやって来た。

腰の剣と懐の銃を視認。ブーツの踵をトンツと鳴らして景気付ける。その動作を終えてから振り向き、眼前の少年に言葉を掛ける。

「用があれば軍に顔を出してくれ。会えるように手を打っておく」

アトラスの言葉に対し、シャルルは同意しながら片手を上げ微笑んだ。

出会いと別れの間の短さを嘆きながらも、アトラスは自分に言い聞かせるように割り切った。馬の後ろの真っ黒な箱の扉を開き、中に入る。奥にガラス窓、左右に長椅子が一つずつという簡素な空間に身を入れ、扉を閉める。片方の椅子に座り、出発を促す。

揺れる馬車の中で、アトラスは召還命令の理由と発生しているであろう何かを予想しながら考えを巡らせた。その途中、不意に言葉

が零れる。

「腐った国を守るなどナンセンスだが……いや、これは軍人の立場からすれば禁句だったな」

思わず苦笑し、アトラスは頬杖を突いて窓の向こうを見詰めた。

2

第二支部に到着したアトラスは平常通りといってもいいその風景に愕然とした。

支部長室に辿り着くまでの間に何人もの軍人とすれ違ったが、皆特に慌てる様子もなく、普段と変わらぬ精神状態であるように見えた。てつきり支部内は混乱状態に陥っているものとばかり思っていたので、これには流石に面喰らってしまった。

しかし見方を変えれば、それだけ機密レベルが高いということなのかもしれない。

だとすれば、目の前の支部長室の扉を開けば少なくとも真偽は確かめられるだろう。アトラスは褐色の扉をノックした後でドアノブを掴み、返答を聞く前に開け放った。

「失礼します」

部屋は横長い長方形で、色合いは先ほどのドアよりも薄い。正面の長机の向こう、この部屋の唯一の窓は真紅のカーテンで覆われており、五メートルほど上にある天井の中心には小型のシャンデリアが備え付けられている。

早速その空間に足を踏み入れると、右側にある小さな円形の机の周りに四人の軍人が屹立しており、その内の一人はアトラスに召還命令を出したトレヴィル支部長であった。

トレヴィルは年齢的には退職間近なのだが、若者には負けないくらい元氣ある人で、度量が広く部下からの信頼は厚い。着用している軍服も意外と似合っているのが不思議というか、憎たらしいというか。田舎の出身である彼とアトラスは話が合うほうで、

トリニティバレット
《三銃士》

『の残り二人を含めた計四人で頻繁に食事をする仲だ。』

とはいえ、職務中に仲の良し悪しは関係なく、アトラスは支部長に対してキチンと一礼してから彼らの輪に加わった。

「やっと来たか、アトラス。あまりにも遅いから、ワシはてっきり死んだと思ったがのう」

喜色満面の笑みで不吉なことを言うトレヴィルに対し、アトラスは笑みを浮かべながら、

「お言葉ですが少将、生憎僕は危機探知能力の高い男でしてね。そう簡単には死にませんよ。——それで、何かあったのですか？」

彼の冗談を軽くあしらひ、緊急召還の理由を尋ねた。

するとトレヴィルは笑顔から一瞬で真剣な面構えに変わり、空気も一変した。やはり何かある。確信を得たアトラスの耳に、トレヴィルの重厚とした声が届く。

「——数時間前、研究所からの報告で、軍の新型兵器である『バンドラボックス』バンドラが強奪された」

聞いたことのない名称だった。アトラスは地位的には第二支部でもトップクラスの筈なのだが、『バンドラボックス』バンドラなる物の存在どころか名前すら耳にした記憶がない。

つまり、軍はその得体の知れない兵器を上層部の極一部の人間にしか話さず、口外を禁止していたのだらう。アトラスは自分が信用されていないという事実に辟易した。

一方のトレヴィルは間髪を容れずに、資料を手に持った横の部下に指示を出していた。資料を捲りながら、部下が言う。

「では、早馬から届いた情報を簡潔に伝えます。強奪犯は一人。隣町ムーセウムにある第三研究所から問題の物を奪取し逃走。現在追跡中です。逃走手段は馬で、迂回してはいますが目的地は南にある小国かと」

続いて強盗犯の特徴や研究所の被害状況などが話され、それらを一通り聞き終えたアトラスは口元に指を持っていき、思考を巡らせた。

「成程。逃走は陸路ですか……」

話を要約すると、大罪を犯した人物が馬に乗って必死で逃走し、軍の手が届かない異国まで逃げている、ということだろう。

しかし、頭の悪い強奪犯だ。ムーセウムから陸路で異国に逃走する場合、最低でも五箇所の関所を通らなければならない。故にこの行動はあまりにも無謀と言えるだろう。突発的な犯行ならまだしも、極刑級の犯罪を実行するのならある程度の下準備期間があつた筈だ。陸路ではなく海路で逃げる方法を選ぶほうがよっぽど賢い。生命力で推進する小型舟艇なら小回りも利くし、速度的には十分な数値が出せる。隠す場所によつては停泊も容易だ。

——だが、それは犯人が《異国に逃げる場合の最良手》でしかない。

「ここから一番近い関所は何処だ？」

不意に、隣に立つ軍人が言った。両眼で姿を捉えると、確かつい最近になって第二支部に赴任してきた男だ。

肩より少し長めの銀髪、シャルルにも匹敵する吊り上がった細い眉、凶相な三白眼、薄い唇。残忍な雰囲気、腰の剣をより一層物騒に感じさせるが、彼の本質はどこか謎めいている気がしてならない。年はアトラスより数歳上といったところだろう。

男の言葉によつて丸机に地図が広げられ、それに指を差しながら確認が行われる。作業は三十秒ほどで終了した。

「では少将、私は先に行かせて頂きますので」

言つて、男はトレヴィルに一礼して足早に部屋を出て行った。

流れるようにスムーズな彼の行動を見たトレヴィルは感心した様子で賛美の言葉を口にした。

「流石はロシユフォール伯爵、手際が良い。ではアトラス、ワシらも……」

「——待つて下さい」

右手を上げてトレヴィルを制止する。予想外のその行動に驚く彼のことは一時的に無視し、隣の部下に要望した。

「僕にも一度地図を見せてもらえますか？」

「——え、ああ、どうぞ」

部下は机上の地図を手に取ってアトラスに手渡した。対応からして彼も同様に驚いているようだ。

アトラスはすぐに問題の第三研究所を確認するため地図に焦点を絞った。まず位置を確かめ、次に周辺の情報、強盗犯の逃走ルート、五箇所の関所の所在地まで隈なく調べ上げる。

「……フツ。やはり、そういうことですか」

そして、その作業によって全てを理解したアトラスは、口元に不敵な笑みを浮かべた。

支部を出たアトラスたちは第一の関所に最も近い街で立ち止まり、裏路地に入って地面のブロックを動かして地下へと入り込んだ。

トレヴィルと共に声を掛けた、そこそこ信頼できる八人の軍人を従えて南に向かって数分歩き続け、十字路に出くわしたところで三方向に分かれる。アトラスは二名の軍人と真ん中の道を進む。

地下水道は思っているよりも暗く、右手に持つ光源体^{ラング}だけでは少し心許ないが、今はそんな贅沢など言っていない。道の幅は人間換算で約二人分ほどの狭さ。水道ということもあり、左手には水が流れている。

アトラスの推理が正しければ、強奪犯は先ほどの三つの内、どれか一つの道を通る筈だ。関所とは明らかに反対方向に進んでくることになるので、退路を自らの手で絶っているように思えるだろうが、それこそが犯人の目的で、自分が安全に逃げられる最良手段でもある。

直角の道が見えた所で消灯して身を隠す。壁に背中を引っ付け、意識を集中。武器を確認した後で、部下二人にも息を殺すように命じる。

——さて、この道はアタリか、それともハズレか。

身を潜めてから数分後。地下道内にコツ、コツという律動的な音が響き始めた。聞き間違えようもなくそれは人の歩行音で、数は一つ。音は関所のある方向から聞こえてくる。

「——どうやら、僕らがアタリの方ですね」

予想が的中したことで生まれた高揚感を、冷笑を浮かべながら手短に味わう。その笑みには、何も疑うことなく関所に向かったあの男を蔑む要素も含まれているだろう。

暗闇の空間で足音が徐々に接近する中、部下の一人が小声で尋ねてきた。

「……どうしますか、すぐに取り押さえますか？」

「功を焦って逃げられては元も子ありません。ここは可能な限り接近させ、確実に捕らえます」

この極秘任務で最重要とされるのは犯人の逮捕でなく、《災厄ノ箱^{クス}》の確保にあるのだろう。ここでこれから接触する人物が箱を持つていなければ、関所に向かった男の有用性が高まるのだが、不思議とアトラスにはそうならない自信があった。

万が一に備えてアトラスは回転式拳銃を取り出し、装弾限度数である六発の銃弾を装填した。親指でハンマーをコッキングし、懐ではなくズボンの左ポケットに突っ込む。

足音が着実に迫る。音の聞こえる感覚的に距離は約十メートル。

九……七……五……。

「——行きましょう」

満を持して、遂にアトラスたちは動いた。

アトラスは腰の剣帯に吊るした、護拳付きで両刃の片手剣、広刃^{ブロード}剣^{ソード}を右手で抜き、相手の進路を阻んだ。動作の過程で部下に明かりを灯させ、辺りを照らす。

「捜しましたよ、強奪犯さん」

問題の人物は光のぎりぎり届く範囲でアトラスたちに気付き立ち止まった。アトラスはすぐに顔を窺うように犯人と思われる人物を凝視する。

強奪犯らしき人物は鼻から足までをグレーの大きな布で覆っており、頭には白いターバンを巻いている。

「……何故ここが分かった？」

不意に、その人物が胸中で浮かんだ疑問を投げかけてきた。

声は中性的。囁いていて、男か女の判別はできない。ターバンからは金色の髪が伸びており、碧眼ときめ細かな白肌は端麗に思えるが、それだけで男女区別を行うのは難しい。

とりあえず探りを入れてみるしかない。アトラスは饒舌な喋り口調で相手の質問に答えた。

「馬で逃走しながら五箇所の関所を通過することは不可能です。強行突破を試みたところで切り抜けられるほど甘くはありません。――ですが、貴方の行動はそれを臭わせるばかり。これはどう考えてもおかしいと思いませんか？」

無論、問い掛けに相手は答えない。それでもアトラスは語り続ける。

「仮に犯人の逃走場所が他国でなかったとしたら……、そう考えれば答えは容易に出ました。そして地図を目にした時、この地下水道の存在を確認して網を張った。――まあ、こうして僕と貴方が直接出会えたのは偶発的な出来事ですぐね」

言葉終わりに嘲笑してみるが、相手は動じるどころか一歩たりとも動こうとしない。完璧に静止している。

中々ぼろを出さない相手に少しだけ感心しながら、アトラスは尚も口を動かす。

「犯罪者は他国に逃亡する、そんな固定観念を利用した素晴らしい心理トリックでしたが、今回はスケールが大き過ぎましたね。単独犯が陸路で逃走中と聞いた時から、怪しいと思っていましたよ」

アトラスが一方的に喋る中、二人の視線は互いを確実に捉え、睨み合っていた。考えることはおそらく同じで、向こうも此方をどう始末するかという方法を探しているに違いない。

「……言いたいことはそれだけか？」

文章を淡々と読み上げるような口振りで、強奪犯と思われる人物は言った。

アトラスは相手の確認の台詞に同意した。すると相手は「そうか……」と呟き、途端に右手を左胸に持つていく素振りを見せた。その素早い動作に対して、アトラスは咄嗟に左ポケットに入れた拳銃を抜く。

相手が布の内側から取り出したのは、アトラスと同じ形状の回転式拳銃だった。手慣れた動作でハンマーをコッキング。回転弾倉シリンダーが動き、銃弾が装填される。

相手は拳銃をアトラスに向けて構えた。それと同時にアトラスも装填作業を終えていた拳銃を水平に構え、射線上に相手を捉える。二つの銃口が鋭く睨み合う。交差する視線。引き金を絞る指に力が加わる。

次の瞬間、轟音が反響し、銃口を飛び出した弾丸が一つの拳銃を弾き落とした。硝煙が立ち上る。

「回転式拳銃とは……驚きましたね、何処でそんな物を手に入れたんですか？」

コンマ一秒ほどの時間差で銃撃戦を制したのはアトラスのほうだった。弾かれた相手の銃は水路に落ち、ぽちゃりといった儚い音を立てた。

それを横目で確認したアトラスは、勝利を確信して冷笑を浮かべた。

相手が回転式拳銃を持っていた、その事実が与えた情報は大きい。はつきり言つて、自分で自分の正体を教えたようなものだ。この時点で既に男女区別など不要な状態だった。

相手の表情が歪んだのが分かった。銃を取り出す瞬間に布が開いた。その中を窺うことができたのだが、どうやら武器は先ほどの拳銃一つのように、剣は携えていなかった。つまり表情の変化は、状況が劣勢に変わったことによる焦りが生んだのだろう。

「拘束してください」

アトラスの指示により、二名の部下が素早い動きで相手の背後を取った。二人は腰のロープに手を伸ばし、ゆっくりと対象に接近する。

逃走を試みようとし、横目で四方を確認し始めた相手を制止するため、アトラスは銃をコッキングした。動けば撃つ、という無言の意思を示して相手に銃口を向ける。

ロープで自由を封じようとして部下が相手の両腕を押さえようとした瞬間、相手は頑なに抵抗した。――が、アトラスが銃の存在を強調すると、相手はやむを得ず逃走を諦めた。その過程でアトラスを鋭い形相で睨み返す様は実に滑稽で、思わず嘲笑しかけたのだが、どうにかその衝動を堪える。

部下が相手の両手を掴んだその時、相手は脇に抱えていたと思われる箱のような物を地面に落とした。銃を取り難そうに抜いたと思ったらそういう理由があつたのか。

落下した箱に反応して反射的に視線を移そうとする部下たちに対し、アトラスは犬を躡けるように、銃を握ったままの左手で『待て』を表した。次いで、拘束を続けるように命じる。

アトラスは剣と銃をそれぞれ納め、四角い形をした箱まで歩を進めて近付いた。到達と同時に部下が言う。

「フェール卿。一先ずトレヴィル少将に報告致しましょう」

「――いえ、中身を確認するほうが先です」

そう返答し、アトラスは目下の黒箱を見下ろした。

おそらく、これがトレヴィルの言っていた《バンドラボックス災厄ノ箱》だろう。

事前に聞かされた外見的特徴は一致している。しかし――。

「予想していたより随分小さいですね……」

箱は横長だがそこまで大きなものではなく、馬を捨てた後で抱えて逃げるのも納得できる範疇の大きさだった。端から端まで真っ黒な色に塗り潰された箱は直方体で、正面に押しボタンが存在するだけの簡素な物だが、それだけに異質な空気を放っている気がしてならなかった。

軍の最重要機密らしく、アトラスでさえ中身のことは詳しく聞かされていないが、おそらく新型の《変換器》ラディウスだろう。けれど、手のひらサイズであるそれが入った箱としては少し大き過ぎるかもしれない。だとすれば、考えられる残りの可能性は……………。

何はともあれ、この目で確かめるのが一番だろう。膝を折り曲げて屈んだアトラスは箱の開け方を確かめ、正面のボタンを押しながら上にスライドさせた。開かれた箱の中身を慌てることなく確認する。

「これは……………」

中に入っていたのは《変換器》ラディウスではなく、何と拳銃だった。予想外の物が出てきたことにより、アトラスも流石に驚きは隠せず目を丸くした。

カラーリングは艶やかで力強い黒色。《三銃士》トリニティバレットが持つ回転式拳銃の開発時に基盤となった、異国で発見された世界初の銃タイプ《起源宝器》オーバースとよく似ており、大きさもほぼ同じ。

銃身の太さや、回転弾倉シリンダーが存在しないという形状的な差異はあるものの、この特徴的な色合いと金属……………間違いない、これは《起源宝器》オーバースだ。

未知の兵器との遭遇による歓喜からか、アトラスはプライオリティーなどすっかり忘れ、潜在意識に突き動かされるように銃を手にとった。初見なので射撃方法は当然分からないが、異国の起源宝器と同じ仕組みなら、生命力を注ぎ込めば銃弾が生成される。ライフエナジー

《変換器》ラディウスにも行う手慣れたその作業を銃に対して行う。すると、銃は生命力を吸収し、膜を纏ったように薄赤く輝き始めた。どうやら資料で見たやり方に間違いはないらしく、少なくともこれで一発は生成された筈だ。

試してみる価値はあるか……………。

一種の好奇心に触発され、アトラスは腰を上げた。銃口を一人の人間に向ける。それは強奪犯ではなく、その隣に立つ軍人を標的として捉えた。啞然とする彼に構うことなく引き金を引く。

怪物の咆哮を思わせる銃声が大地を揺らした。反動が体を襲う。

銃口から射出されたのは銃弾とは思えない代物だった。起源宝器の銃弾は赤いエネルギーの集合体なのだが、放たれた銃弾は拳サイズと異常な大きさを持ち、軌道上の地面を削り取って跡を残しながら直進していった。それはまるで一筋の光のように見えた。

銃弾は狙い通り一人の軍人の心臓を貫いた。——いや、表現的にはくり貫いたといったほうが正しいのかもしれない。撃ち抜かれた軍人の左胸は拳サイズの銃弾によって抉り取られ、何と風穴が開いていたのだ。

比喻表現のつもりが、どうやらこの兵器は本当に怪物のようだった……。

何が起こったかを考える暇すら与えず、即座に力を失って崩れ落ちる軍人。それを見たもう一人の軍人が喚く。

「フェ、フェール卿、何をなさるのです!？」

「フツッ。決まっているでしょう。目撃者の排除ですよ」

もう後には引けない。起源宝器を手にしたことを、誰にも知られる訳にもいかない。目撃者は一人残らず始末するべきだ。

自分でも冷静過ぎる思考状態に驚きつつ、アトラスは蔑視の眼差しと共に言葉を放った。

「安心して下さい。御家族の今後は保障してあげますよ」

銃に再び生命力を注入。輝きを纏ったのを確認したと同時に銃を構えトリガーを絞る。世界が震える。

「さようなら」

鉄拳を思わす大きな銃弾が空を駆け抜け、今度は軍人の頭を食い千切った。正直なところ、撃ち抜いたというよりは焼き切ったというのが一見した感想だ。

頭部を失った亡骸が無造作に倒れ込む。だがアトラスはそれに目もくれず、右手の銃をまじまじと見詰めた。

命の終わりを感ずる余裕すら与えない、あまりにも非人道的過ぎる兵器。それがこの《起源宝器^{オーバー}》だ。発射までの時間で無上の戦慄

を味わわせ、轟音を合図に飛び出した銃弾が体を、心を、命さえも、一瞬で消し去る悪魔の兵器。これを虐殺と言わずに何と言っのだからうか。

「フ、フフフッ……」

圧倒的な兵器を前に、優越感に浸らずにはいらなかった。左手で顔を覆いながら視線を落とし、薄気味悪い笑い声を発する。武器に対する畏怖の念は不思議と感しない。

今までは軍内から国を変えることばかり考えていたが……、何も内側から変える必要はないじゃないか。軍部からの変革は莫大な時間を要する、それは嫌と言うほど思い知らされてきた。結局のところ、この国を変えたいのなら、国家元首である総統に自らの意見を採用させる以外に方法はない。

——しかし、その主張がまかり通る相手でないことも、十二分に理解している。

総統はこれまでの思想を全否定して軍拡を推進し、他国との積極的な戦争を繰り返して手に入れた領土を財産のように語ってきた。終いには格差社会の隠蔽工作と言わんばかりの、人類平等宣言。国家二大方針を蔑ろにし軍国を形作った愚者に、アトラスの理想が届くことなど有り得ない。赤子に軍法を説くようなものだ。

なら諦めるしかないのか？ ……いいや、まだ手はある。この時点で多くの手段が実現不可能の刻印を押されているだろうが、最大の手が残っている。勝てば英雄、負ければ罪人として歴史に名を刻むことになる、一世一代のギャンブルが。

それは実に単純。国を内側から変える、という観念を捨てればいい。表ではなく裏、内ではなく外。変えるのではなく、一度滅ぼす。国軍との正面衝突に打ち勝ち、パンドラを解体。そこに新たな国を建てることに成功すれば、全ての支配権はアトラスに譲渡され、何もかもが思い通りになる。内部変革と比較して、時間も大幅に短縮できる。

とはいえ、その選択肢は自殺願望でもない限り、誰も選ばないだ

ろう。不用意に手を出せば間違いなく敗北の二文字が刻まれる。歴然とした兵力差に抗う術すらなく処刑されてしまうのがオチだろう。だが、勝算があるとしたらどうだ？ 可能性は限りなく無に近いが、ゼロではなかったとしたら……。

アトラスは自らの手に握られた物を再び凝視する。そこにあるのは、理想を実現させる光明、回転式拳銃など目じゃない絶対的な力。時代を築き上げてきた伝説の兵器、《起源宝器^{オーバーバツ}》。

この力を駆使して戦局を変え、ある程度揃えた兵員で勝負を仕掛ける。戦略と戦術、その両方を自在に扱えば勝利を収めるのも夢じゃない。そして、自分ならそれができる——いや、やってみせる。不図、昔の記憶が頭を過ぎった。

第二支部に勤め始める少し前。一時的だが本部に勤務していた時に、護衛役として仕えていた女性と本部の屋上で理想を分かち合った時の場景が鮮明に思い返される。

これでやつと……………。

視線を地から空へと移したアトラスは、自らの決意を宣言する。

「——このナンセンスな国を変える」

他の誰でもない、この僕が変わえてみせる。これから殺すであろう数多の軍人が当初に望んだ国へと……。

今に見ている。この腐り切った国を完膚なきまでに潰し、パンドラが唱える国家二大方針の平和と平等の真の意味を教え、勝ち取ってみせる。

「さあ、玉座を賭けた戦争^{ゲーム}の始まりだ……………！」

賽は投げられた。未来に待ち受けるのは、希望と絶望の二択。

現状を打破し理想を実現させるために、今こそ盛大な椅子取り合戦を始めよう……………。

反逆の兆し（後書き）

どうも、結城蒼汰です。せっかくなので暇な時に一話分だけでも載せておこうと思い、夜中にキーボードを叩きまくってます。

二話はF C 2でもまだ途中なので、書き終わってから載せます。けど、最近は多忙＋遅筆という二つの悪い点が作用して執筆速度が異常に遅いので、二話を掲載するのがいつになるかはまだ謎です…。

ですが、今は夏休み。普段学校生活に時間を取られてる身としては有難い休暇なので、これを有効活用して書いていきたいと思えます。

救世主誕生

3

トレヴィルに虚偽の報告をした後、アトラスは資料室で書物を読み漁っていた。

部屋の広さは支部長室の約二倍。縦長の空間には本棚が等間隔に横並びしており、中心には長机が数個設置されている。

資料室にこもって三十分。アトラスは漸く探し求めた物を見つけ出した。長机の手前の椅子に座り、頁をすらすらと捲りながら問題の項目を探す。

「——なるほど、あれはルムガントという名称なのか」

捲り作業を終え、アトラスは開いた頁の一番上に書かれた文字を読み上げた。

この書物が書かれた明確な時期は不明だが、見た目のボロさからかなりの年代物だと推測される。前に眼を通した時にも同じ感想を抱いた。一見した内容は昔の武器図鑑のようなもので、軍人ならわざわざ閲覧する必要性は感じないように思える。だが頁ごとに載っている、模写された武器の絵画を見た時、アトラスの頭を疑念が過ぎった。

年代物であるにも関わらず、武器が所々で現代的過ぎるのだ。気になって調べてみると、その武器が起源宝器オーバーパスであり、その記述だけ周到に暗号化されていることが判明した。アトラスが異国の起源宝器の使い方を知っていたのも、これを事前に解読していたからである。

さて、資料を黙読した限り、アトラスが入手したあの起源宝器の名はルムガントというらしい。記載されている全三個の銃タイプの内の一つだ。読み進めると、《三銃の中で最も破壊力に優れた銃》と記されていた。しかしその代償として装弾数が一発に制限され、

射撃の間隔は五秒ほどの時間が必要されるみたいだ。

資料室を訪れる前、予め銃を使用してみたので、この記述に嘘偽りがないことは既に把握できていた。使用時に注意する点としては、不必要な発砲を控えることが絶対条件とされるだろう。撃つ度に五秒間の待ち時間が存在するため、その間は隙ができる。それを重々承知しておかなくてはならない。

「これで、もう回転式拳銃は必要ないな……」

強引に携行許可を取った意味がここにきて薄れてきたが、それを上回る兵器を手に入れたのだから、許容範囲内だろう。

起源宝器の存在。それはアトラスが前々から感じていた疑惑を解消してくれた。

とはいえ、最初からおかしいとは思っていた。

世界で初めて銃タイプの起源宝器が発見されたのは二年前。三銃士トリニティバレットの創設と、回転式拳銃の試作型が完成したのはその半年後。この

対応の早さはどう考えても異常だと思っていたが、パンドラがその時点で起源宝器を所有していたとなれば話は別だ。寧ろ、異国での発見のほうを偶発的な出来事だと言わざるを得ない。

回転式拳銃を開発したのは、ルムガントの構造上、弾の生成と射出の方法を知る術がなかったから。分解するにも、この未知の金属ご自慢の強度が邪魔をしている。

その最大の問題を解決したのが、異国のリボルバータイプの起源宝器だ。あれによって得た情報をもとに試作型を完成に漕ぎ着けたまでは良かったが、まさかそのタイミングで起源宝器を盗まれるとは思ってもいなかっただろう。

アトラスは口元を綻ばせ、不敵に微笑んだ。

運命的な巡り合わせ、もしくはただの偶然。どちらにしても、起源宝器は巡り巡ってアトラスの手中に落ちた。これは人生の転機といっても過言ではないのかもしれない。

「……さて、そろそろ居候の様子を見に行くでしょう」

言って、アトラスは本を棚に戻してから資料室を出て、そのまま

支部を抜けて私宅へと足を進めた。

広大な庭園を抜け両開きの扉を通過し、アトラスは帰宅した。

帰着を出迎えたのは、フェール家の執事を務める初老だった。家の中に入った瞬間、慇懃な挨拶と共に深々と頭を下げる小柄な男性に、アトラスは右手を軽く上げて応えた。主人に絶対服従といった姿勢は嫌いじゃないが、毎日のように反復されると流石に厭きてしまう。当初こそ立ち止まって笑顔で対応していたが、今となっては顔色一つ変えず淡々と済ませる始末。自分が偉いという実感を失ったアトラスにとって、最早身分などあつてないようなものだった。

執事と数回会話を交え、客人がまだ部屋にいることを確認。時刻は窓から覗く橙色の空が辺りを照らし始める頃。アトラスは二階へと続く階段を上り、数歩先の扉の前で立ち止まった。暗褐色のそれを暫く見詰めた後、ドアノブを回転させ中へと踏み入る。

自室は白を基調とした飾り気のないもの。過度な装飾は控えており、家具は最低限しか設置していない。ドアと同色の木製の丸机と長椅子、執務用の長机、残りは書棚とベッドだけだ。食事は時間になつたら一階に呼ばれるため作る必要はないし、服の用意も使用人が行う。しかもアトラスは滅多に仕事を持ち帰らないので、部屋に置く物はほとんどなかったのだ。

無駄に広く感じる自室を一瞥し、アトラスは丸机の前の椅子に腰を下ろした。卓上に置かれたバスケットに手を伸ばし、豊富な果物類の中から林檎を一つ掴む。そのまま口元まで運んでいき、一齧り含んだ林檎を飲み込んだ後、アトラスは憐憫な物言いで尋ねた。

「君も食べるかい？」

「……遠慮しておく」

囁れたその声の主はアトラスの位置から見て正面、その数メートル先に座っていた。といっても、手足は縄で拘束され、自由に歩き回することは儘ならない。一見した身形は数時間前と同じグレーの布

とターバン姿。言うまでもなく、地下水道で捕縛した強奪犯だ。

あの時とは異なり、現在は顔の全体を窺うことができる状態で、波立つ金髪、ゆったりとした双眸、細く尖った鼻梁、不平不満を全面的に押し出した表情は不快感を丸出しにしているが、滑らかな白肌を中心とした美麗な容姿はかなりの好青年を思わせる。それだけで多くの女性を引き寄せるだろうが、これが《男ではない》と知つたらさぞかし驚くことだろう。——そう、この人物は歴つとした女なのだ。

彼女の名はルネ・デルブーレ。パンドラ独立戦闘部隊三銃士の一員、アトラスと同じ部隊の構成員である。勿論、回転式拳銃の使用を許可されている人物で、それをあの場で見せた行いは非常に軽率であつたといえよう。パンドラに三丁しかない回転式拳銃がそう簡単に奪われるなど有り得ないというのに……。

ルネは唇を尖らせた表情を保つたまま矢継ぎ早に喚いた。

「どういふつもりだ。味方を平然と殺しておいて、私を生かした理由は何だ。私に何をさせる気にいる!？」

「状況を理解しろ。今の君は捕虜と同じだ。軽薄な言動は控えてもらいたい」

対して、アトラスは林檎を机上に置き、両手の十指を組み合わせ毅然とした振る舞いで応じる。そこには場を制す支配力が溢れ、鋭い舌鋒と睥睨でそれを強調する。

「その物言い……軍での謙虚さは偽りか」

「礼節を弁えている、と言って欲しいな。物事を円滑に行う術としては常識の域だよ」

敢えて見下すのも話術の一種。《淑やかな敬語キャラ》という印象を植え付けられている軍内の人間にとって、この変わり様は相当なインパクトがある筈だ。手足を縛られることによって本能的な恐怖も多少なりに抱いているだろう。己の優位を示すには、今回ばかりはこの口調のほうが御し易い。傲岸不遜とはこういう時に使うのだろうか。

——しかし、完全な支配を確立するには、まだ一手足りないのかもしれない。

アトラスは椅子から起立し、ゆっくりとルネに近付いた。ルネは反射的に遠ざかろうとするが、背後の壁にそれを阻まれている。彼女の行為を双眼で捉えながら距離を詰め、立ち止まったアトラスは、右手を腰の剣帯に伸ばし剣の柄を握った。迷わずそれを抜き放ち、白銀の刀身を相手の視界に入れる。

剣を握った手をただ真っ直ぐ伸ばし、切っ先をルネの喉元まで持つていくと、アトラスは不敵な笑みを浮かべて冷やかに言い放った。「ここからは質問——いや、尋問のほうが悪いか。オーバー……まず最初に、君は何のために起源宝器を盗んだ？ 自分が使用する以外にも、ちゃんとした理由があるんだろう？」

「そ、それは……………」

ルネは暫しの間沈黙した。表情を隠すように視線を逸らしたその姿からは、言葉を選ぶというよりは探している気がしてならない。数十秒後、どうにか言葉を見つけたらしい彼女は、目線を合わせぬまま自信なさ気に話した。

「……起源宝器を失えば、パンドラは致命的な打撃を受ける。戦力面でも、技術面でも。そうなれば、いつかは……………」

そこで言葉を失ってしまったルネに、アトラスは容赦なく追及する。

「いつかは他の大国がパンドラを占領してくれる、とでも？」

この瞬間、ルネが寸前までどうか保っていたであろう平静を完全に失い、歴然として取り乱したのが分かった。途端に横向けの顔が此方を向き直し視線が交差するが、それに構うことなくアトラスは言葉を繋げる。

「——偽善だな。君の考えはただの押し付けに過ぎない。考えてもみる。他国がパンドラに攻め込むまでに、一体何年の月日が流れると思っている。自分で事を起こしておきながら、結局は人任せに終わるのか？」

辛辣なその言葉の終わりに見たルネの体はぶるぶると震えていた。しかし、言い負けたから泣いている——という一種の女性らしさを見せたわけではなかった。歯を食い縛り、眉間に八の字を作って此方を睨み返すその形相は寧ろ怒りに満ちており、今すぐにでも不満が噴き出されてもおかしくない。

そしてその予想は見事に的中し、ルネは目前の剣に感じる恐怖を吹き飛ばすように叫んだ。

「お前こそ、何を知って物を言っている！ 相手はあのパンドラだぞ！？ 世界屈指の兵力を有する大国相手に真正面から敵対して勝てるわけがないだろう！——それこそ、奇跡でも起きない限り不可能だ！！」

彼女の真剣な眼差しと遮二無二な台詞に、アトラスは思わず目を丸くした。

第二支部で一緒に働くようになって数年経つが、彼女がこれほどまでに声を荒らげた瞬間は今まで見たことがなかったのだ。

けれど、ルネの言い分も一理ある。軍国相手に自分たちだけで挑むというのはあまりにも無鉄砲な行動だ。叱責はされても、称賛を浴びることはないだろう。

本来なら、パンドラと他国を戦わせるという彼女の選択のほうが正しい。世界最大の軍事力という長所にはそれだけの力が秘められており、迂闊な戦争は自滅を招く危険性が高い。——だが、それを恐れて何になる。此方はその戦力差を承知の上で、それでもパンドラに反抗の意志を示そうとしているのだ、今更怖気付いてなどいられるか。

何より、他国に頼って万が一にでも勝利されれば、それこそパンドラは終わりだ。統治体制は大きく塗り替えられるだろうが、それがアトラスの望んだものになる確証もない。そうなれば、選択肢は自ずと絞られてくる——。

「——なら、僕が起こしてあげますよ、その奇跡とやらをね」

アトラスは軍内で着け慣れた仮面を被り、大胆不敵な言葉を述べ

た。

誰かがそれを望むのなら、自分が救世主となって変革する。この仮面の上に新たな仮面を被ってやるうじゃないか。シャルルを含む多くの平民のためにも、あの人のためにも、この国は変わらなければならぬのだ。

アトラスはルネに向けていた剣を鞘に仕舞った。その意外な行いに動揺している彼女に対し、今度は手を差し出す。

「僕と共に、パンドラを……………」

国のために国と戦う、そんな矛盾した信念を胸中に抱えながら、この日、一人の救世主が誕生した。その名はまだ無名に等しいが、心に燃え滾る野望は不思議と勝利の美酒を味わう気である。何よりも、時に重荷にもなりかねない厄介な役柄を自分で選んだのだ、最後まで演じ切らなくては男が廃るというものだ。

《ワンフォーオール・オールフォーワン》。全ては真の平和と平等を掴み取るために……………。

翌日。

天辺の位置まで移動した太陽が日差しを燦々と降り注ぐ頃。二人はいつもの休憩場所を訪れ、近くの木製ベンチに腰を下ろした。

トリニティバレット

第二支部東門付近にある広場、そこが三銃士の好んで居座る場所だった。広場は中央にアワングラスのような形の噴水が装飾的設備として置かれ、隅角に腰掛けが並べられた円形の空間である。噴水には、生命力を蓄えられるひし形の物体《変換器》ラディウスが埋め込まれており、それが内部で生命力を変換することで水が噴出している。

生命力とは、世俗的には《四大元素に変換できる万能エネルギー》として認知されているが、それは正確には生活用の変換器の機能であり、厳密に言えば間違いである。実際は生命の体内に存在する《生命維持に直結するエネルギー》だ。ついでに言うなら、戦闘用の変換器はエネルギーを高密度に凝縮することで薄い膜を作り出し、

それにより武具の強度を上昇させる性能を持っている。

生命力の生成箇所は心臓で、拍動時に血液を伝って体全体に行き渡る。出生から死去までに生み出されるエネルギーの総量は定まっており、それは人によって個人差が出るものの、一義的には有限である。

人間は、空気中に含まれる生命力も吸い込むことで自分のものに交換できる機能を備えているらしいが、変換時にエネルギー量の増減が発生し、空気中の生命力では細胞維持に必要な数値に達しないことが判明している。

ちなみに変換器や起源宝器はこのエネルギーを消費して銃弾などを生成するため、事実上《命を削る行為》を取っていることになる。かといって、大気中の生命力で代用できるかというと、生物のとは微妙な差異があるらしく代用は不可能とされている。

この事実は医学に精通する者たちから長年問題視され続けているが、生命力に取って代わるエネルギー源が未だに発見されない点と、既に生活必需品として定着してしまった変換器の利便性から、世界は未だに生命力への依存から抜け出せずにいる。

閑話休題。

あの後、アトラスは数時間に及ぶ対話の末、どうにかルネを引き入れることに成功した。秘密主義で警戒心の強いルネを説得するのは非常に苦勞を要したが、最終的には三銃士で培った友情が物を言った。《切っても離れぬ三銃士》、ルネにとって今回はこの絆が枷になったようだ。

しかし、アトラスにとってもこの結果はどこか納得のいかないものがあった。自分の力量ではなく、積み重ねた友情を利用して成し遂げた勧誘には素直に喜べなかったのである。《切っても離れぬ三銃士》という睦まじい関係性が空言でないように、アトラス本人もまた、他の二人に寄せる情愛は本物だったのだから。

——大業を実現するためとはいえ、友情も愛情も踏み躪らなければならぬとは……、現実は無慈悲で残酷だな。

既に一個人の意見は通用しないところまで来ている。感傷に流されてはいけない。利用できるものは全て有効活用しなければならぬ。例えそれが全ての者に疎まれる結末を導き出したとしても……。自分を強引に納得させて逡巡する心情を振り払い、平常を装ったアトラスは横に座るルネに向けて尋ねた。

「用心深い君のことだ、ある程度の人員は集めているんだろう？」

「ざっと百人といったところだ。足りないのは重々承知だが、私の力では……」

「いや、今はそれだけあれば十分だ。寧ろ、その数は君だからこそ出せた結果だ」

流石、聖職者になりたいと常々言っているだけがあり、軍以外での人望も厚いようだ。秘密裏に行動していたにも関わらず、それだけの数を集めた実績には感嘆の念を抱かずにいられない。

「褒めても何も出ないぞ。私はまだお前を完全に信用し切ったわけじゃないからな。……それに私の持つ神書には、時として神は下界に悪しき光を産み落とすと記されてある。そしてそれは災いの種を育て、芽吹く頃にはその輝きを一段と増している、と。仮に災いの種が起源宝器とするなら、悪しき光とはお前のことになるのかもしれない」

また神書の話か、と内心で辟易しながら、アトラスは皮相を織り交ぜ一笑に付した。

「フツ。褒めても何も出ないぞ」

「……褒めてはいないがな」

全く理解していないな、とでも言いたいかのように、ルネは目を瞑りながら息を零した。

ルネの持つ神書は自宅の床下から出てきたという、何とも曰く付きな臭いを盛大に発する物で、書いていることの真偽は定かでない。神書かどうかすらも怪しいところだ。にも拘わらず、彼女はそれを熟読し、しかも内容を丸暗記するまでに至っている。何でもかんでも神書に結び付けたがる彼女の宗教かぶれっぷりもここまでくると

少々うんざりするが、これは口が裂けても言えない。

直後、再び神書と言い張る書物の内容を語り始めたルネの話を、アトラスは右から左へと聞き流した。他者の創作物かもしれない文書に興味はないし、何よりアトラスは神を信仰していないので、聞くだけ無駄だ。

今後の方針を話し合おうと言ってわざわざ場所を選んだというのに、相変わらずこの女は……。

全く、自分の立場をもう少し理解してもらいたいところだ。時間には余裕がないわけではないが、能率的に事を進めるというのを知らないのだろうか。今更だが、この女は本当にパンドラを変える気があるのか不安になってきた。戦力的には文句ない人物だが、人格的には……。

とにかく、話を脱線させたままでは埒が明かない。饒舌な物言いでは延々と喋り続けるルネの話をどうにか断ち切り、アトラスは不満を吐露するように淡々と言った。

「とりあえず、だ。その人員との顔合わせは後日やるとして、暫くは手堅い方法で兵員を増やしていくのがベストだろう」

「……あ、ああ、そうだな」

世の中、中々思い通りにはいかない。アトラスは隣に座る、慣れ親しんだ筈の女との関係性が変化したことでそのことを思い知り、息を吐き出した。

大自然の生気を感じ取るように、シャルルは後頭部で組んでいた両手を大きく広げ息を吸い込んだ。

鼻腔を通り抜ける空気が自村と異なる匂いであることに少しだけ怪訝しながら、階段を一段ずつ上って行く。足元に時折映る枯れ葉が季節感を漂わせ、秋が終わりを告げ、冬が到来の準備を始めていることを再認識する。

国軍第二支部東門付近。それがシャルルの現在位置だ。石造りで幅広な階段が中央に敷かれ、左右には木々がアーチのようにそれぞれ等間隔に生えた様は花道にも化けられる可能性を秘めているように思える。樹木が葉を全て失い丸裸になっていなければ、見栄えはもつと良かっただろう。実に惜しい。

両足を交互に上下させる運動を続けながら、階段上りをマスターしたシャルルは同時進行で考えに没頭する作業を開始した。

昨日、アトラスが軍に呼び戻されてから、シャルルは覚束ない足取りで宿屋に向かい、そこで一晚を過ごした。

その日は暇を潰す術もなく、普段より夜が一段と長く感じた。途中で閑暇に我慢できずフロントまで下り、店主と酒を飲み明かして金を無駄に消費してしまったのは失態だった。おかげで滞在期間を一日短くする羽目になった。

本来なら、軍を訪ねるのは昨日の筈だったのだが、アトラスに緊急召還命令が下されるほど緊迫した状況だったようなので、その日は訪問を控えさせてもらった。かといって、昨日の今日で行くのもどうかと思ったのだが、此方もそう何日も予定をずらすだけの余裕はない。金銭面を含めた様々な事情から、早急に事を済ませる必要性がある。

今回の往訪の目的は、第二支部のトレヴィル支部長に面会すること。そこで自らの意志を告げ、可能ならば昨日の顛末を確認するつもりでいる。

トレヴィル支部長はシャルルと同郷の人物で、同じ村出身のアトラスともその縁で友好があると聞いている。とはいっても、シャルルは幼い頃に一度しか会った覚えはなく、元軍人であった父のほうが親しい間柄だろう。

父は村長に就任する前は軍人として国に貢献する職業に就いていた。旧友であるトレヴィル支部長とは偶然同じ部隊に配属され、そこで再会を果たしたと聞く。軍人としての父の姿はよく知らないが、暇を見つけて村に帰ってくる度、孤児院へ積極的に足を運び、資金

を食事という形で定期的に分け与えるほどの世話好きだったことは記憶している。

正直な話をする、孤児院にいたアトラスと友達になれたのも、父と一緒に院内まで訪れる切っ掛けがあったからだ。出会った当初は警戒心が強く、常に消極的な行動を取っていたアトラスに進んで声を掛け、シャルルと無理やり引き合わせた時のことは今でもよく覚えていいる。

その半ば強引なやり方があったからこそ、二人には接点が生まれた。勿論、最初は反りが合わずに何度も喧嘩したが、その都度父が仲を取り持つパイプ役を担ってくれていた。おかげで二人は時間を掛けながらも次第に心を通わせ、今では親密な関係を築くまでに至った。それは全て父の功績といってもいいくらいだ。

そんな父が、まさかあんなことになるなんて……………。

おそらく、トレヴィル支部長には対面時に全てを吐露することになるだろう。そうしなければ話は始まらないし、自らの意志を手っ取り早く理解させることも困難になる。

できることなら話したくもないし、相手側としても聞きたくない内容だろうが、そんな私情でうじうじと悩んでいる暇はない。自分が何のために軍を訪れたのかを考えれば、立ち止まってなどいられないのだ。

無論、全てがスムーズに進むとは思っていない。アポイントメントを取ってない以上、確実に面会できるとも限らない。昨日の出来事がまだ片付いておらず、支部に踏み入ることすら許可が下りない確率も低くはない。シャルルは軍人ではなく一般人なのだから。

だけど、だからといって素直に時が来るまで待機していられるほど、シャルルは我慢強くなかった。

段を八割ほど上り終えた所で、漸く出入口の門に差し掛かった。門は、逆U字型に積まれた石に覆われており、酸化で錆び付いているところからして金属製のようなだ。

門衛は一人。軍服を着用しているのもあって当然軍人だろう。性

別は男。見た目的には若いが、新米兵といった印象は受けない。刺々しく逆立った髪型、気性の塊とも取れる勇ましい目付きを中心とした顔立ちは、まるで突撃兵のようだ。

軍人は右手に掴む槍の石突きを地面に突き立て、腰には剣を携行している。どちらも鐔の辺りに戦闘用の変換器ラディウスが埋め込まれており、備えは万全といった感じた。

しかし、此方は門番と勝負するために来たわけではない。目的を過不足なく説明して頭を下げれば、通してもらえる筈だ。……そうであると信じたい。

「何用だ？」

門の数メートル手前まで接近した時、門衛は門を閉ざすように、槍を斜めに構え尋ねてきた。

面構えがより強張ったところを見ると、どうやらかなり警戒されているようだ。何もしていないのに。いや、相手の目にはこれから事を起こすように見えているのだろうか。だとすれば非常に心外なのだが、この場合は言っても無駄かもしれない。

アトラスにも再会時に散々言われたが、シャルルは目付きがあまり良くないらしい。穏当とは無縁とまで断言されたので、良し悪しで部類するなら間違いなく悪いほうに入るのだろう。当人としては至って普通にしているつもりなのだが……。

とりあえず、普段から表情を意識してさえいれば、目付きくらいはどうにかなる筈だ。シャルルはなるべく顔の力を抜いて柔らかくし、リラクゼーションに配慮ながら問い掛けに応答した。

「トレヴィル支部長に謁見するために来ました」

「許可証は持っているだろうな？ 捺印されている紙だ」

「……………持っています」

「支部に入るには許可証が軍人一名の同伴、そして支部長との拝謁は佐官以上の者が署名した証文が必要になる。証文はともかく、許可証がないのならここを通すわけにはいかないな」

どうやら、通行には軍人の許可が必須のようだ。順当といえばそ

うなのだが、それを知らなかったシャルルは愕然とせずにはいられなかった。何せ、通れないのだから。

目的を明確に通告しているというのに、融通の利かない堅物だ。いや、だからこそなのだろうか。トレヴィルは支部の旗頭を務める人物、言わば第二支部の大将。アトラスなら得意のチェスに例えて、絶対死守されるべきキング、とても表現するであろう存在。その名が出されれば、いつも以上に用心するのは当たり前前の処置――。

今回ばかりは明らかに此方に過失がある。本来なら事前に行う筈の調査を怠り、突発的な行動を取り相手に迷惑をかけているのは否めない。軍人以外の人間を通す条件として、何かしらの証明の提示を求められるのは自然な流れだ。容易に予想できることが、過日の出来事で生まれた焦心によって完全に頭の中から喪失してしまっていた。

焦燥感は抑えられなかった。会わなくてはならない人がいるのに、伝えなくてはならないことがあるのに、証明というたった一つの通行証が欠落してるために全ての計画が崩落する。理不尽に思えるこの実状も、立場が逆転すれば理解せざるを得ない。

シャルルは顰め面を作ったまま暫く立ち尽くしたが、次第に溢れる気持ちを制御できなくなり、目前の軍人に詰め寄って我武者羅に叫んだ。

「日を改めている余裕はないんだ。頼む、通してくれ！」

軍人は中々に肝が据わった人物のようで、シャルルの切実な熱願を前にしても驚く様子など一切見せず淡々と返答した。

「例外は一人たりとも出すわけにはいかない。それを守り抜くことが私の責務なのだ」

「どうしてもすぐに会いたいんだ！」

「分からない奴だな。駄目だと言ったら駄目だ。国家二大方針の一つでも破ることは罪、それは軍人にとっても変わらない。今回は大人しくお引き取り願おう！」

相手の言葉は、端から聞く耳を持っていないような言い振りだっ

た。

シャルルのような前例を何度も見てきたと言わんばかりの、嫌気に満ちた表情。都合良く国家二大方針を持ち出すところといい、会話を逸早く強制終了させたかった心情が窺える。

そう考えると癩に障るが、門衛の言動が全く理解できないわけでもない。

許可なしで通すことを禁じられているにも関わらず通行を許可をした場合、それは例外を一人出すということになり、市民の中から平等でない人物——特権者が生まれる結果になる。しかもそれは総統が市民に爵位を与え貴族を作り出すのとは異なり、一介の軍人が善意でやってしまった悪行として、世俗的には解釈されるだろう。

貴族の存在が既に平等とは言えないが、そんなことを言い始めたら本末転倒だし、既に認められているものを否定するにも、シャルルにはそれを変えるだけの権力がない。

現在の問題は、どのような手段で門を通過するかだ。強行突破は言うまでもなく無益に終わるので、ここはやはり眼前の軍人をどうにか説得して通してもらう以外に方法はないだろう。

だが、そんなに簡単にいくとも思えない。相手は場慣れしてそうだし、話も積極的に聞いてくれそうにない。せめて、アトラス並に会話を巧みに誘導できる技術があれば……………。

待てよ。確かあの時……………！

不図、昨日の別れ際に聞いた友の台詞が、シャルルの脳裏に蘇った。視線を落とし、唇に右手の人差し指を持つてくる。

——用があれば軍に顔を出してくれ。会えるように手を打っておく。

そうだ、アトラスだ。彼なら軍人にも顔が利くだろうから、通行は確実に許可される。それに三銃士は地位的には佐官に相当するので、彼の証文でも十分通用する。……可能だ。アトラスさえ呼び出せば、問題は全て解消される。

——悪いが、今回はお前の名前を利用してもらうぞ。

心中で友に謝罪し、視線を再び軍人に戻したシャルルは、起死回生となるであろう言葉を言い放った。

「ならアトラスを呼んでくれ。それで話は通る筈だ！」

その言葉で、場の空気は明白なまでに一変した。相手の顔付きがこれまでに最も険しく変化し、シャルルの心にも緊張が高まる。

軍人は眉間にシワを寄せた表情を保ったまま、先ほどの一言によって生まれた疑問を解決するかのように淡々と問い掛けた。

「……フェール卿と面識があるのか？」

「友人だ。シャルルという名前を告げれば、理解してもらえ！」

「そうか。あのフェール卿の……」

相手の口調と態度からは、刺々しさの中に真剣さを含んだような警戒心と好奇心がせめぎ合う心情を連想させた。先ほどまでと比べ様子が違い過ぎるのは一目瞭然だ。

流石の知名度と言わざるを得ない。結成から僅か二年で数多くの功績を残してきただけのことはある。第二支部では最早英雄に等しい存在といったところだろうか。何より、都市から離れた村で暮らしていたシャルルの耳に名が届くほどだ。パンドラ国内でも一・二を争う有名人に違いない。

都市に来て早々、何度も友人を当てにするのは気が引けるが、今は手段を選んでいる場合ではない。支部を訪ねた真意を考えれば、事を早く済ませるにこしたことはないのだから。

「さあ、分かったら早くアトラスを……」

「それは無理だ」

「……」

一瞬、相手の発した言葉の意味が理解できなかった。驚きの余り何度も瞬きをした後、双眼を見開いて相手の姿を再び捉える。

「……ふざけているのか？」

「ふ、ふざけてなどいない！ 考えてもみろ、第二支部で随一の有名人を簡単に呼び出せるわけがないだろう。佐官相当とはいえ、フェール卿は支部長の懐刀。私では呼び出すどころか対話さえも不可

能に近いんだ！」

何て使えない門衛なんだ……、と思わずにはいらなかった。

相手の対応に冷静さが失われかけているのを踏まえると、彼がシャルルを馬鹿にしているわけでないことは間違いない。寧ろ理に適った回答をどうにか探し出して口にしているようにすら見える。

支部で門衛を務めているのは決まって下っ端の筈。だとすれば、アトラスとは階級差があり過ぎて呼び出すのは難しいということなのだろう。

しかし、アトラスにも落度がないとは言いつれない。会えるように手を打つという台詞とは裏腹に、その言葉を耳に入れておくべき最重要人物はどうやら話すら聞かされていないようじゃないか。

「——随分と騒がしいですね」

先ほどまで絶える気満々だった人物を心中で批判し始めた時、いきなり門の奥から聞こえてきた声に反応し、シャルルは門の向こうに目を向けた。議論を上下していた二人の目線がそこに集中する。

声の主は若い男だった。支部側からやって来たので、考えるまでもなく軍人だろう。パンドラの国旗を左胸に刺繍された黒色の上着は、紛う方なき軍服だ。口調は落ち着きがあり、ゆったりとした音調を持っている。顔は門に上手い具合に隠れて垣間見ることは叶わない。

「どうかしましたか？」

男はまず門衛を務める軍人に声をかけた。すると、軍人は豪く恐縮した素振りを見せた後、男にこれまでの会話の内容を端的に語った。

数分もしない内に話が終わると、男はすぐ門を潜ってシャルルの目前まで歩み寄ってきた。

線の細い顔を包むように伸びた緋色の髪。切れ長な双眼から覗く淡褐色の虹彩が落ち着いた光を放ち、薄い唇には穏やかな微笑が縫い付けられたようにあり続けている。痩せた体に纏う軍服は一切の汚れが見られず、清潔感が滲み出ているようにすら思える。

十年前と比べて随分と相違点があるように思えるが、目前に立つ軍人は昨日再会したアトラス・フェール本人に間違いなかった。旧友とこんな形で邂逅するとは思ってもみなかったが、これは僥倖と言うべきなのかもしれない。

アトラスはシャルルの顔を見るなり、全てを理解したかのような笑みを浮かべた。相変わらず物分かりが良いらしく、会話も無しに意思疎通ができるのは手っ取り早くて助かる。自分より五年ほど長く生きてるだけのことはある。……とはいえ、そんな年齢差は全く感じないが。

「まさか、こんなにも早く訪ねて来るとは思ってたよ」

親しげな物言い言葉で言葉を言い終えた直後、アトラスは振り返り門の方へ歩き始めた。後ろに続くかたちで追行する。

どうやら先ほどの短いやり取りで既に話は済んでいたらしく、門衛に引き止められることもなく門を通過できた。階段を上りつつ、正面を向いたまま語り始めたアトラスの声に耳を澄ませる。

「君は普通の人間より一風変わった男だとは思ってたけど、まさか東門から入ってくるとはね。ここは軍人専用の出入り口として設けたもので、一般人はまず通らない。そこを君は通ろうとしたんだ、嫌でも不審がられるさ」

そのまま話を黙聴すると、アトラスは正門の門衛にはシャルルが通れるようにキチンと伝達していたらしく、落度があるのは彼ではなく自分であることを、風刺のきいた言い回しで再認識させられた。階段を上り終えたところで、円のだ真ん中に噴水が置かれた殺風景な場所に到着した。周囲に等間隔でベンチが置かれてることから考えれば、軽い休息スポットを兼ねていると思えないこともない。

人気はほとんどなかった。階段から最も近い位置のベンチに軍人が一人腰を下ろしているだけだった。遠目でもよく分かるほどの美形で、腕と脚をそれぞれで組んだ金髪のシルエットはどこか常人と懸け離れた異質さを感じる。

「……遅かったな」

「それでも急いだつもりだよ。それに、不手際はなかったと思うけどね」

軍人はアトラスに開口一番で愚痴を飛ばせるほどの間柄のようだ。となれば、支部でもトップクラスの人物と推測するのが順当だろう。アトラスの口調の変化からそれが言える。

挨拶を試みようとしたが、此方を敵視するような雰囲気が行為を遮断した。しかし、礼儀を欠くわけにもいかない。シャルルは咄嗟の判断でアトラスに声をかけた。

「アトラス、そちらの男性は？」

言葉を言い放った瞬間、軍人の表情が強張ったのが見なくても理解できた。何か不味いことでも言ったのだろうか。

瞬時に頭で色々と考え込む中、言葉を聞いたアトラスが片手で頭を押さえて嘲笑し、

「……まあ、初見の印象は誰でもそんなものだろう」

とわけの分からぬ台詞を返してきた。

だが、シャルルは本能的に彼の発言の意味を解していた。アトラスが頭を手で押さえながら浮かべる笑みは、大抵滑稽な言行が要因となっている。そして、それをやってしまったのは間違いなく自分だ。

恐る恐る軍人に目を向けると、ちょうどベンチから立ち上がったところだった。次いで、肩を落とす動きと同時に嘆息を漏らし、呆れ果てた様子で口を開く。

「——私は女だ」

時間が静止したように思えた。まるで一秒が十倍ほどの長さに変化したかのような感覚に陥り、言葉が脳へと行き届くまでに数秒ほどの時間が経過した。

「……え？」

その後に零れた台詞は、目前の現実を受け入れられないと言わんばかりの、シンプルなまでに簡略化された疑問だった……。

支部長室まで案内され、隣の応接室に通された時には既に日が沈み始めていた。

あの後、アトラスの紹介でルネ・デルブルー卿と挨拶を交わし、シャルルは性別を間違えるという極めて無礼な言動を謝罪した。

しかし、あの面貌で女性とは……、世の中にはまだまだ未知の領域が存在するようだ。

アトラスの仲介が作用したのか、ルネはシャルルの非礼を宥恕してくれた。それに話してみると普通に良い人で、親しくなるのにはアトラスほど時間を要さなかった。稀によく分からない神話を語り出すのが唯一の難点といったところか。

そんな二人に先導されて支部の中に足を踏み入れたわけだが……、すれ違う軍人たちの視線が気になって仕方がなかった。有名人と一緒に歩けば当然注目されるのは分かっていたが、期待と羨望が凝縮された軍人たちの眼差しは耐え忍ぶことさえ難しく、途中で我慢の限界に到達して視線を落としたほどだ。注目的というのはメリツトだらけだと考えていたが、どうやらそれは誤解だったらしい。

だが、三銃士が二人も同行してくれたことで、謁見の許可は呆気なく下りた。というより、三銃士は支部長と親密な仲を築いてるらしく、本来なら証文など必要ないのだそうだ。それは同時に、腹心の部下というのが名許りではないことを確信させられた瞬間でもあった。

現在、シャルルは応接室に設置されてるソファ―に座り込んで待機している。そして隣の部屋では二人が支部長に面会の要請を簡易的に行っている筈だ。

支部長室に繋がるドアが再び開くまでの時間は限りなく短かった。片開きの扉の向こうから現れたのは、短めに切り揃えられた白髪と体格の良さが印象的な老年の男だった。両脇にアトラスとルネがそれぞれ屹立する光景からして、おそらく彼がトレヴィル支部長なのだろう。そう考えると、どこことなく見覚えがある気がしないでもな

い。

「——では少将、僕らはこれで」

その言葉にトレヴィルは了解の意を持つ言葉で応答し、それを確認した後でアトラスはゆっくりと扉を閉めた。

扉の開閉音が鳴り止む前に立ち上がったシャルルは、トレヴィルと視線が合った瞬間に一礼した。

「君とこうして会うのは十数年振りか……。あの時と比べて随分と大きくなったのう」

顔を上げると、彼は歩み寄って来て片手を差し出していた。笑顔で握手を求める姿勢に緊張しつつも、微笑みながらそれに応じる。

どうやら、彼はシャルルと会った時のことをまだ覚えていて、ほぼ完全に忘れていた此方としては非常に申し訳ない気がしてならなかった。けれど、幼少の頃の記憶は誰でも曖昧だろうと勝手な解釈をし、自らの過失を水に流すかたちで気持ちを整理する。

着座を勧められてから腰を下ろし、シャルルはまず他愛のないことから話始めた。しかしそれはいきなり本題に入るのが好ましくなうと思ったからではない。単純に話す機会を探っていたからだ。この話題は必然的に場の雰囲気を変える力を持っているので、きっかけを得ずして語るにはそれなりの勇気が必要になる。——が、シャルルは後一步が踏み出せず仕舞いで、本題とは全く関係のない駄弁りを意味もなく繰り広げてしまった。

故郷のことから入った雑話はやがて親友のアトラスに関する話に移っていった。シャルルが過去に一杯食わされた時のことを語ると、トレヴィルはここ一番の高笑いを見せながら言った。

「ルネはともかく、アトラスは陰険な男だ。あの高潔さに惑わされたらいかん。ワシも奴の話術には何度もイニシアチブを握られ、これこれもう数十回は食事代を掠め取られたからのう！」

失敗談を暴露するにしておか嬉しそうだが、本人の口から彼との睦まじい関係性が事実であることを知れたのは一つの収益かもしれない。

そして、再び話題の切り替えが発生した時、シャルルの緊張はピークに達した。

「……ところで、父君は元気にしとるかね？」

その問い掛けは、シャルルが逃げ場を失った瞬間でもあった。彼がその言葉発するのを待つていなかったと言えは嘘になるが、心の何処かで機会が来なければ良いと思っていたことも否定できない。

——だけど、もう後には引けない。

次にシャルルが口を開いた時に全てが始まる。自らが目的を果たすための一步を確実に踏み出すことができるのだ。それは自分にとってメリットでしかないわけで、発言を躊躇う理由は本来なら存在しない。

必死に自分を説得しながら、意を決したシャルルは遂に重たい口を開き、支部を訪れた本当の目的に当たる話の冒頭を口にした。

「父は……、二年前に他界しました。貴族に村を制圧された後で……」

たったそれだけの言葉が部屋の空気をガラリと変え、一時の静寂が場を凍らせた。

シャルルを支部長室まで送り届けてから数十分後。アトラスたちは二人で足早に通路を歩き、資料室へと入り込んだ。

部屋に入るなり、アトラスは慌ただしく歩を進め目線を左右させた。棚に並べられた資料からめばしい物を取り出し、手当たり次第に中身をチェックしていく。

「落ち着け！ 何をそんなに焦っている！？」

一心不乱になって資料に目を通すアトラスを見兼ねたかのように、背後からルネが声を張り上げた。そしてその声が届いていないと知るや、今度は右肩を手で力強く掴んできた。

普段から冷戦沈着な人物がここまで平静を失うというのは、傍か

ら見ればかなりの異常事態なのだろう。だが、現状況下ですら悠然と構えていられるほど、アトラスは無情ではなかった。

「シャルルの話の真偽を確かめられるまでは、落ち着いてなどいれるか！」

右肩に乗る手を払い除け、アトラスは初めて声を荒げた。表情からは自然と笑みが消え、心は既に焦燥感によつて掻き立てられているのが自分でも理解できた。

シャルルが何の理由もなく支部を訪れるとは考えられなかった。だから応接室の扉を閉めた後もその場に留まり続け、不本意ながらも二人の会話に聞き耳を立てることにしたのだ。

だが、そこで耳にしたのは予想を絶する内容だった。

貴族が引き連れた集団による、村落の襲撃。それによりシャルルの父親だけでなく、孤児院の人間を含めた村人全員が命を落としたという。目的は不明。当時、用事で村を離れていたシャルルが帰り着いた時には、全焼した家々と村人の骸で溢れていたそうだ。

シャルルが支部を訪問した本来の目的、それは軍人になることだった。父親と親しかったトレヴィルを頼ることで入軍を円滑に済ませるつもりだったらしい。固執して軍人になりたがる詳しい理由は語らなかつたが、彼の性格から考えれば私怨から生まれた国への不満に違いない。元々正義感が強い人物だけに、今件は耐え難い出来事だったと言えよう。

何より、生活だけでも手一杯な筈なのに、その一方で地道にビブリオオーテまでの旅費を貯めていたのだ。その時点で覚悟は相当なものだと言わざるを得ない。

二年前の調査報告書を確認する中、漸く目当ての物を見付け出したアトラスは問題の事件項目を探した。頁を素早く捲りながらそれらしい事件を徹底的に確認する。

「これか……！」

そして、アトラスは遂に問題の頁を見付けた。急いで棚から移動して資料を机上に乱暴に置く。椅子に座る間も惜しむほどに文字を

読み始める。

記事は初めて見る内容のものだった。報告書によれば、貴族が語った犯行動機は『底を突く寸前まで陥った金銭状態を開くため村を襲った』と書かれてある。

小さな村だから大きく取り上げられず、アトラスの耳にも今まで届いていなかったのだろうが、問題はそこではない。

襲撃を仕掛けた貴族は農業で生計を立てており、その領地はパンドラがつい先日まで長期に渡って戦争をしていた南国との国境付近にあることが資料から把握できた。

つまりそれは戦争の際に領地が荒らされ、かつ食料支援などの強制によって資金を徐々に失い、それを取り戻すためにこの事件を起こしたことを意味している。集団に加わったという、貴族に雇われていた平民たちは雇い主である貴族の手によって一人残らず死亡したそうだが、彼らも生活が賭けられていた身だ。従わざるを得なかっただろう。

この場合、本来なら『貴族とパンドラのどちらが悪いか』などという疑問は考えるだけ無駄なのだが、今のアトラスはその答えを即座に導き出せるほどに苛立っていた。

既に主犯格である貴族は軍によって身柄を拘束されており、爵位を剥奪され現在投獄中らしいが、それで事が完全に片付いたと言われても納得できるわけがない。

「……」

アトラスは横書きで綴られた文章を睨み付け、溢れ出す私憤から顔を強張らせた。

分かっているつもりだった。既に度を超えている軍拡と差別が、この国にどのような影響を及ぼすのかを。知っていたからこそ、変革の必要性を感じていたわけで、失敗は一度たりとも許されないが故に確実性を追求して悠長に事を進めていた。

——だが、それは間違いだった。

戦力差を気に病むなど愚の骨頂。真の英雄なら、圧倒的劣勢すら

覆す技量を持っている。辣腕と行動力を兼ね備え、誰もが魅了されるカリスマ性を有する存在。救世主の仮面を被ったアトラスには、それだけの才能が必然的に求められているのだ。

そして、それを発揮すべき時期は今を措いて他にはない。

アトラスは試されている。この仮面を被るに相応しい人物かどうか。合格すれば理想に近付き、不合格なら待つのは抗えぬ死だけ。最早これは査定試験というより、ただのデスゲームだ。良識ある人間ならば自発的に参加したりはしないだろう。

だけど、このまま何一つ変えられずに一生を終えるのなら、あの人の理想を叶えられないのなら、平民に希望を与えられないのなら……。

「ルネ、兵員は百人ほどだったな？」

「あ、ああ。――ま、待て、お前まさか……！」

彼女が次の言葉が言うよりも早く、再び口を開いたアトラスが矢継ぎ早に指示を出す。

「すぐにその者たちの所へ案内しろ。作戦会議を行う」

資料を片付けることさえも忘れて部屋を抜け出したアトラスの焦点は、既に別のものに絞られていた。

今すぐにでも滅ぼしてやる……。

燃え滾る野心は黒く汚濁した光を放ち始め、アトラスを突き動かす衝動は善意から逸脱したものへと変貌を遂げつつあった。

救世主誕生（後書き）

最近、筆が速くなり始めて仮初の幸せを感じています。

時代が中世や近世のものを書いているとよく思うのが、調べる物が余りにも多過ぎて時間が足りないのと、揃えるべき資料が山のようであって資金的に集められないということですね。

学生という身である以上、どちらも解決するのは難しいところなので、結論として二度と中世や近世には手を出さないことにしました！（笑）

元々、僕が好んで書くのは現代 or 近未来ファンタジーなので、中世や近世は得意じゃないんですよ、とその時代を書いている時に言ってみる。

この小説が正編に直接的に関与する外伝じゃなければ、絶対に書かなかったかもしれないですね。そして問題の正編は全然筆が進んでない（汗）。

資料不足でおかしな点は多々あると思いますが、これからも温かい目で見守って下さい。

第二支部攻略戦

4

メンバーとの顔合わせはその日の内に行われた。

軍内部での密偵を視野に入れて活動計画を練っていたため、アトラスは顔を隠して同士たちの前に姿を現した。自らの認知度を真摯に受け止めれば、身分を偽っても無駄だということは分かり切っていたからだ。

顔の表面を深紅の仮面ですっぱりと覆い、仮面上部に取り付けた義髪で髪の色をカモフラージュした姿形。紅装束に身を包んだ仮面の男がそこには存在していた。

そこでアトラスは半ば命令的な要望を言い放った。——自らの傘下に加わって欲しい、と。

正体不明の人物が突如として発したその言葉に対する反感は熾烈を極めた。当然といえば当然だろう。個人情報的一切を偽って接触して来た人物の言葉をそう簡単に受け入れられる筈はない。

だが、こちらには共謀者がいた。同士を集めた張本人で、それについてアトラスの得意分野をよく理解している人物。ルネという切り札を、アトラスは隠し持っていたのだ。

アトラスは最初に平等を確立させる交換条件と称して、自らが軍人であることを明かした。次いで、現段階で実質的指導権を握っているルネにだけ正体を明かすことを約束した。

敵の状況を内側から探ると口にした直後の台詞。情報の漏洩を全く恐れず、リスクを省みないその発言にはさすがに驚いたようで、同士たちは一人残らず目を見開いていた。しかし、その交換条件はアトラスに危険性が一切生じない不平等なものであることは承知していた。そして部隊指揮能力に欠けるルネにとって、アトラスの存

在が必要不可欠であったことも……。

そうやって支配権を獲得したアトラスは、組織の第一目標として第二支部の攻略を宣言した――。

敵の重要拠点を攻撃する明言をした翌日。二人は支部の屋上で作戦実行の時を待ち続けた。

二人が時間差で屋上に訪れたのは奇遇だった。決して待ち合わせをしていたわけではない。親近感が一定ラインを越えると、こんな偶然も発生するのかと驚嘆したほどだ。数秒の間、真顔で目を見合わせた時は思わず噴き出しそうにすらなった。

今になって考えてみると、普段から三人で行動する時が多かったため、こうして二人きりで言葉を交わす日は滅多になかった。三人の結束は固くとも、一対一の会話が少ないというのは意外な盲点だ。それをシニカルな表現で語ると、ルネもアトラスと同じ嘲笑的な薄笑いで顔を綻ばせていた。

話は次第に作戦の内容へとシフトしていき、二人の表情から自然と笑みが消えた。とはいっても、作戦内容は会合時に全て話しているため、行うのは確認作業だけだ。

作戦、というところか大々的な印象を受けがちだが、今回の大した内容ではない。まず支部の正門に敵を誘導し、待機させている兵で攻撃。後はルネの率いる兵が背後から奇襲を仕掛ける。それが主な順序だ。

一見すれば単純過ぎる策に思えるが、その一つ一つの手に細工がないわけではない。その中で最も重要になってくるのは、やはりタイミングになるだろう。仮面と紅装束の姿に扮装して合図を送る、その瞬間を見極めなくてはならない。それを可能にするには、まず過程を順調に進めていくのが大前提となる。

作戦の鍵を握るのは指揮官であるアトラス自身。失敗すれば、己だけでなく味方全員の命を失うことになる。敗北は文字通り死に直

結することを意味する。今のアトラスに求められるのは、成功の二文字を刻むだけの力量だ。

まさに死闘。これほどまでに命懸けの状況に陥ったことは今までになかっただろう。今までは敗北に対して深憂したことはなかったし、何よりどんな相手でも必ずと言って良いほど勝利する自信があった。……だが、今回は違う。自らの行動が要となり、一度でもミスを犯せば即座に勝敗が決する。

誘発された緊張感がヒートアップし、心の海を沸騰させる。恐怖と興奮が複雑に絡み合う中、アトラスの瞳に覚悟が灯った。

「どうしても、今やるのか……？」

横に立つルネが確認するかのような疑問を投げかけてきた時には、既に作戦開始時刻は後数分にまで迫っていた。アトラスは迷わず言葉返す。

「幸い、《三銃士の驛馬》は定期報告で本部に召喚され不在だ。その代わりとしてロシュフォール卿が来たようだが、彼は部隊指揮に向いていると聞く。攻め込むなら今しかない」

指揮官でも十分に厄介だろうが、勇猛果敢な暴れ馬がいなくてもまだマシだ。一人で多勢の敵に対抗できる存在は思いも寄らない不祥事を生み出しかねない。その程度のことと計算が狂うなどとは思っていないが、万が一を考慮しておいて損はない筈だ。

加えて、これ以上に時期を窺うのは好ましく思えない。——いや、正確には我慢できないだけかもしれない。シャルルの話を聞いて以来、アトラスは間違いなく事を焦っている。浅慮な行動は控えているつもりだが、傍から見ればそれも違って見えるのだろうか……。

とはいえ、母国を仇視する気持ちを静める術はない。仮にあるとするなら、それはパンドラの悪弊を根絶する以外に方法はないだろう。

「それにしても、まさかそんな物を持ち出してくるとはな……」
言って、ルネはアトラスの手に持っている物を見詰めた。

口の当たる部分に声色変換器を取り付けた仮面。この計画のため

に前々から用意していたものだ。微量の生命力の集合体である肉声を変換器に通すことで性質を変え、本人とは全く違う声を出すことを可能としている。――だが、その声がどうしても人のものから乖離してしまうのが難点だ。

「この仮面は一種のプロパガンダだ。未知の存在を強調し、敵の危機感を煽るには打って付けのアイテムというわけだよ。とはいえ、その効果は敵より味方のほうが先に作用するかたちになってしまったがな」

自嘲的な発言を付け加えながらも、アトラスは仮面の存在に大いに助けられていた。

この仮面一つさえあれば、計画を飛躍的に楽な方向へ導くことができる。敵側に正体がばれる心配も薄れるというわけだ。効果的には一石二鳥以上のものを齎してくれる優れ物と言えるだろう。

「さて……、そろそろ時間だ」

間もなく未来を変える運命の一戦が始まる。敗北は許されない。生き残り、栄光を手にしたければ勝つ他に道はない。

今から行うのは非情で残酷な戦争だ。勝利に執着するからにはどんな汚い手も厭わない。例えどれだけ犠牲を払おうとも、結果を出さずして終わるわけにはいかない。だから、この戦いにおける善悪判別など最早必要ない。もう割り切るしかないんだ。敵味方の逆転、それを脳内で強引に刻み込む。

アトラスは下り階段のある扉へと歩を進め始めた。最中、場に残る女性から発せられた言葉が深く突き刺さる。

「分かっているだろうな。この作戦が始まったら、もう二度と戻れないぞ」

言われるまでもない筈の台詞にも関わらず、アトラスは黙殺を決め込めなかった。足が自発的に止まり、心が彷徨う。

過去の景色が鮮明に呼び起こされていく。そこに映るのは、支部で過ごしてきたこれまでの日々。喜怒哀楽の全てが詰まった、忘れることなき記憶。それが今、アトラスの前に障害として立ちほだか

ろうとしている。

だけど、心構えは既にできている。一国の軍人から、反逆者へと為り変わる決意が。何より、どんな思い出にもその根底にあり続いていたのは『パンドラを変えたい』という本懐だった筈だ。

心を改めて決めたアトラスは再び足を前に踏み出した。振り向くことなく扉を通過すると、暫くして大音量の開閉音が背後で響く。そのままゆっくりと階段を下り、自らの作戦目的を遂行するために移動を始めた。

必ず成功させてみせる。この腐り切った国を浄化し、貴族と平民の垣根を取り除くために……。

——僕は故国に牙を剥く。

作戦を実行するに当たって、アトラスはまず支部長室を訪れた。

部屋に入るなり笑顔で出迎えてきたトレヴィルに一礼してから、予め用意していた書状を「支部に投げ込まれていた」と虚言を吐き、それを手渡してから彼を席に着かせた。すぐに自分も近くの椅子に腰を下ろし、次の行動を起こすタイミングを窺う。

書状の内容は、簡潔に言えば宣戦布告だった。しかも提示した要求は単純にして明快で、第二支部を此方に明け渡すこと。それを自己陶醉した文章で長々と書いたただだ。承諾できない場合は即刻支部を攻撃する、と半ば脅しに等しい注意書きまでしてある。

無論、そんな理不尽な要求が受け入れられるとは毛頭思っていない。それに第二支部は東西南北の中心都市にそれぞれ置かれている軍事基地の中で難攻不落の名声を得ており、その防衛力は本部と比較しても遜色ない。未だ衰えを知らず、自ら最前線で戦うほどの豪傑さで有名なトレヴィルと、現役ばりばりのトップガンである三銃士が守りを固めているのだ。そう易々と陥落する筈がない。

その支部を落とすと宣言するからには絶対の自信があると読み取っても不満はないが、そんな絵空事が起こり得る筈がないというの

が一般的な心境だろう。相手を侮って高を括つても不思議はない。

しかし、状況は何も此方だけが不利とは限らない。相手に畏怖の念を植え付けるトップガンの内二人は敵軍に回り、一人は不在。その上、異常事態発令の出ていない状態での兵力は決して万全とは言えない。多くても精々数百人だ。それなら今の兵員でも十分に太刀打ちできる。不意を突いて攻撃を仕掛ければ支部に混乱を与えられ、勝率は格段に上がる。

一番の問題は、その少ない兵を巧みに動かせる者を排除しなければならぬということ。有能な統率者の存在はそれだけで部隊の士気が上昇する。だだでさえ数で圧倒される危険性があるので、劣勢となる不安要素はなるべく取り除くべきだ。幸い、現状でそれに当てはまる人物は、目前で椅子に腰掛けて書状に目を通してしているトレヴィルのみ。彼さえ上手く処理できれば、勝利を掴むのはそれほど困難でなくなる。

本来なら、この書状を愚劣な内容と判断し気にも留めなければ楽なのだが、生憎アトラスの上司はそこまで魯鈍な人物ではない。支部の軍人は疎かアトラスすらも心酔した第二支部の長は、この事態を軽視できるほど責任感は弱くない。きっと、彼なら迷うことなく真つ向勝負の意志を示す筈だ。

案の定、トレヴィルは予想通りの行動を取った。両手をぶるぶる震わせながら書状を握り締め、それを机上に叩き付ける。そして今度は追いつきと言わんばかりに、丸めた右手を力強く振り下ろして拳骨を食らわせた。静止する間もなく椅子から立ち上がり、怒号を飛ばす。

「無条件降伏だ……。こんなものが認められるものか！ 此奴はメシアにでもなったつもりか！！」

怒鳴り散らすトレヴィルの表情は何時になく険しかった。行動からもその心情が読み取れる。言葉終わりの寸陰の歯軋りに収縮された憤懣は、切歯音によって周囲に撒き散らされ、それを浴びたアトラスは身の毛がよだつほどに戦慄を覚えた。咄嗟に体が椅子から飛

び上がりそうになり狼狽したが、それを悟られないよう絶妙な身の熟しで腰を上げる。

先見していた通り、要求は黙殺された。この場で彼が要求を承服してくれば無駄な悶着は避けられたが、一言一行を隈なく確認した限りそれは不可能に近い。寧ろ、敵意は十二分に持っているてまず間違いないだろう。

躊躇いが残留する心を一足踏み出す動作で振り払い、そのままトレヴィルに接近する。真横の位置まで移動したアトラスは「そうですか」と呟きながら懷に手を伸ばし、そこから取り出した物を彼のこめかみに向け構えた。

「――残念です、トレヴィル少将」

彼の表情に変化が生まれるまでに時間はそうかからなかった。先ほどまで表れていた激昂が驚愕に埋もれていくのが分かる。

咄嗟に目線だけを横に動かし、頭に押し付けられた物を確認したトレヴィルは、内に秘める感情を露にして言った。

「ルムガント……やはりお前が持っていたのか……！」

「おやおや、まるで箱の中身を知っていたかのような口振りですね」とは言ったものの、彼がルムガントのことを既知しているのは当然だと思っていた。

第二支部の旗頭である存在が、隣町の研究所に重要機密が隠されていることを知らない筈がない。總統から並外れた信頼を得ている彼なら、それくらいの仕事を極秘に与えられていても不自然ではないし、性格から推察してアトラスたちに内密にしていたのも合点がいく。

しかし、結局は遅かれ早かれだったのだ。情報は知る人間が多いほど漏れ易い。ムーセウムの研究所といえば、トリニティバレット三銃士が射撃訓練に使用する場所で訪れる回数は比較的多い。そこで管理していたのなら、秘密が最も露見し易いのは他でもないアトラスたちだ。トレヴィルがそれを懸念していなかったとは考え難いが、真面に管理できる施設はあそこ以外にないだろう。

彼にとつての誤算は、秘密が最初に漏れた相手が三銃士の一員だったこと。そこから全ての歯車が狂い始めた。さらに隠匿物が強奪されたことを切っ掛けに冷静さを失い、事件の早期解決を理由にアトラスを頼ってしまったことも失態だ。その結果として、起源宝器^{オーバーパス}はかねてから反抗心を胸中に潜めていた人物へと渡る羽目になったのだから。

トレヴィルはいつだって詰めが甘い。肝心な局面で他者に縋るから、構想に差し障りが生まれる。過度な信頼は決して好ましいとは言えない。所詮、重要な場面で最も信用できるのは自分自身だ。

銃に生命力を注ぎ込み銃弾を生成。その作業は数秒もせずに終わり、装填完了を知らせる赤色の光華が現れた。鮮血が銃の周りを流動するようなこのライトフェクトに目を奪われそうになる気持ちを抑えつつ、銃口の先の標的へ目を向ける。

——僕は実行する、計画を成就させるために。その礎である第二支部を円滑に攻略する一手、それをこの手で果たす。だから……。

「ワシを殺す気が、アトラス」

核心をつく彼の台詞に、アトラスは不意に眉を細めた。眼光鋭く人を射る彼の毅然たる態度に、思わず気圧されてしまう。

敵に回すと恐ろしい人物だということを再認識させられた。危惧していた通り、生かしておくには余りのにも危険過ぎるようだ。ここで消えてもらわなくてはならない。

僅かな恐怖に戦く内心を気取られないように平静を装いながら口を開き、質問からなるべく無縁なことを言い放った。

「兵力の差が勝敗を分かつ絶対条件とは限りません。——擒賊擒王、貴方も知っているでしょう？」

指揮官を捕らえられれば、敵の士気を急激に低下させ弱体化できる。これはその計略の一部だ、そう言ってトレヴィルを必死に誤魔化した。一息置いて、アトラスは言葉を繋げる。

「僕は貴方のように長々と内側から変えていくことはできません」

「だから滅ぼすのか？ 国を変えるために民を巻き込むと」

「変革は犠牲なくして在り得ない。……その証拠に、貴方のやり方を何年信じたところで、この国は変わらなかった!!」

言葉の後半で内に秘める感情が爆発的に燃え上がり、アトラスは鋭い形相で大喝を食らわせた。その表情にはもう泰然自若の片鱗すら残っていない。何十、何百と研磨され続けた不平不満で激越さを増した剣幕に侵されている。

損失を忌避した内部改変、それがトレヴィルの選択した方法だった。使者を定期的に本部に派遣しての書面抗議。加えて、本部で年に数回行われる総会での発言。佐官以上の者が集まるその場で、アトラスは何度も改善案を提出した記憶がある。そして、その度に書類は破り捨てられてきた。昨年には総統と拝謁する機会を得て、トレヴィルと共に意気揚々と出向いたが、求めていた結果は得られず仕舞い――。

結局のところ、この国は総統以外の人間は全て無力なのだ。階級も、爵位も、信頼すらも、殊勲で獲得できた全ての名誉は空疎なものだった。それを知った時、アトラスはこれまで粉骨碎身して積み上げてきた経歴キャリアが脆く崩れ去ったことを悟った。必死に足掻いていた日々が無駄であったことを痛感させられた。

「お前はよく頑張っている。僅か十年で佐官相当にまで昇進し、爵位すら手に入れた人間など希少だ。――後数年。後数年でお前はきっとこの国を変えられる。それまでの辛抱じゃないか。なのに何故だ……、何故それが理解できんだ!!」

切実な表情で訴えるトレヴィルの悲痛な叫びは、普段なら何かしらの感情を湧き上がらせただろうが、今のアトラスにそれが届くことはなかった。

「だけど……僕らがこうして悠長に過ごしている間にも人は死んでいった。シャルルの父親も、孤児院の子たちも……。もう何年も待てない。すぐに変えてみせる。この起源宝器ルムガントで……!」

今更何を期待されても遅い。既に犠牲は生まれているのだ。実害を避けても意味がないことは目に見えている。だとすれば、計画を

促進させるほうが間違いなく理に適っている。一刻も早くパンドラを解体することこそが唯一の近道なのだから。

アトラスの決意は揺るがなかった。何度も思案して出した結論だ、そう簡単に変わる筈もない。計画の足掛かりとして宣言した第二支部の陥落。パンドラの未来のために、トレヴィルにはその身を献身してもらおう。

「目近の力に溺れよつたな……」

「何とでも言うてください。……さて、貴方にはまだ選択の余地があります。このまま僕に殺されるか、人質となつて第二支部攻略を手伝うか。……僕としては、後者であつて欲しいですね」

暫くの沈黙が部屋に流れた。答えを待つ時間が煩わしく感じながらも、心の奥底ではこの沈黙が終わらなければ良いという気持ちが漂い始めていた。

そして、口を開いたトレヴィルの重厚な声が、長い静寂に幕を下ろした。

「……悪いが、お前の要望には応えられない」

その言葉に、不思議と驚きは生まれなかった。

「……そうですね。貴方はそういう人だ」

心の片隅では、最初から分かつていた気がした。回答を聞く以前より、確信に似た何かを本能的に感じていたのかもしれない。

トレヴィルは如何なることがあつても権力には屈服しない。元々、権力で何かを強要することを極端に嫌っていた人だ。それを行使することは勿論、屈することなど絶対に在り得ない。

将官で唯一の平民出身者であり、自分と理想を共にした人物。今、アトラスはその者に銃を向けている。その事実がさらなる葛藤を生むが、燃え盛る使命感でそれを必死に焼き殺す。

——そうだ、怯むな。僕は撃たなければならないんだ。敵を討つことに躊躇するな、その迷いは何れ仲間を殺す。己の身勝手で計画を台無しにするのは御免だ。僕は、もう二度と立ち止まりたくない

……！

アトラスは一度深く瞬きをした後、覚悟を固めた。それに呼応するかのようにルムガントの輝きが増す。閑散とした空間で視線が交錯する中、数多の感情がその間を行き来しているだろうが、互いがそれを認識する術はない。確かめ合う術も、分かり合う術も既に失われた。何より、通常から逸脱した現状況下では相手が何を考えているかなど尚更理解できる筈がない。

しかし、視線から感じ取れるものが何もなかったわけではない。たった一つ――弾丸を避ける意思のなさだけが、向き合う男の双眸から無上に伝わってくる。これまで幾度か訪れた攻撃の機会を無下にし、直立不動のまま行動を起こさない態度からは、まるでアトラスが引き金を引くのを待っているかのようにも見える。それはつまり、彼が既に腹を括っていることを示しているのだろうか……。

全く、自分がこれほどまでに思いを逡巡させていたというのに、この人は……。どれだけ尽瘁したとしても、精神の強靱さではとても適いそうにない。

引き金に乗せた指に力が加わる。その寸前、アトラスは徐に口を開き、人生で最大の恩師に向かって離別の言葉を捧げた。

「――今まで、お世話になりました」

次の瞬間、窓の外で囀る鳥たちが一斉に飛び立ち、その飛翔音と同時に一発の銃声が空しく鳴り響いた……。

慣れた足取りで建物の外に出た時には、既にトレヴィルが撃たれた情報はかなり漏洩していた。本来なら早過ぎる伝達速度だが、アトラスは驚きの表情一つ見せずに近くの茂みに入った。用意していた紅装束に素早く着替え、仮面を片手に時期を窺う。

ルネと同盟を結んでから今日までの短い期間で、アトラスは軍内部でさらに共犯者を探した。元来、第二支部には本部の方針に不満を唱える者が多かったので、必要最小限の数を揃えるのに大した苦労はしなかった。トレヴィルの思想の下に集っていた軍人たちが、

思わぬところで役に立ったのだ。これで無駄な殺傷を削減できるのもそうだが、支部長の人望には感謝するところが大きい。それを失ってしまったと思うと非常に残念でならない。

新たに加わった仲間たちには普段通り支部に勤務してもらった。通常業務を普通に熟す一方で、彼らには予め指定した時刻に合わせて情報を口頭でばらまくことを命じた。それは勿論、情報の循環を促進させるのが目的だ。

しかし、この作戦に問題が全くなかったわけでもない。新人の人員たちは軍内での階級が決して高いと言えず、それ故に口伝えで広がる予定の異常事態は事実性に欠けていた。彼らより上の地位に立つ者を納得させるほどの説得力がなかったのだ。

その解決手段として、彼らが情報を伝える時に必ず登場させるよう指示した人物名がある。ルネだ。支部長との仲を利用し、恰も彼女が第一発見者であることを偽装させた。本人にも同じ役目を与えることにより、信用度は格段に増しただろう。万が一にもそれを疑う者が現れたとしても、現場を確認するべく支部長室に向かった時には、既にアトラスの手によって狂言は真実へと変わった後。――

これはタイミングが成敗の鍵を握る作戦だった。

支部が混乱で慌ただしくなるまでの時間は五分とかからなかった。建物からは軍人の声が飛び交っており、どの声にも平穏さは感じられない。恐らく中では雑然とした状況に一変していることだろう。少なくとも、アトラスが第二支部勤務になって初の一大騒動となっているのは間違いない。

これで第一段階はクリアしたも同然。後は……攻略の障害となるであろう者を餌で誘き寄せただけだ。

木々の間を駆け抜け抜け正門へ。姿を目撃されないよう細心の注意を払う。身を隠しながら門前の人気を窺うと、そこに軍人らしき者の姿は見当たらず、正面ゲートは完全な無人だった。差し詰め、騒ぎの異常さに不審を抱き建物内に様子を見に戻ったのだろうが……、はつきり言って不用心もいいところだ。緊迫感があるのは汲み取れ

るが、自らの役目を忘れて放置しては意味がない。

仮面を装着し、門の真正面——支部側からでも見える位置に屹立。アトラスはその場で暫く思考を巡らせた。

「……メシア、か」

真つ先に思い返されたのは、数分前にトレヴィルが口にした言葉だった。書状の書き手を揶揄するように表現されたそのあだ名は、救世主の代弁者——あるいはそれ自身を意味する。過去にこの名を騙り、時代を先導しようとした者たちは相次いで処刑された。その度に彼らは権力者に反逆者と蔑称され、さらには宗教徒に異端者扱いを受け続けた結果、救世主^{メシア}は神への冒涇として非難を浴びる曰く付きの名となった。

今となつてはその名を自称する者など一人もいなくなつたが、皮肉にもそれはアトラスのもう一つの姿である仮面男にはこの上なく適したものだった。歴史を覆す絶対的な自信の象徴、それに付随するであろう無尽蔵の期待。敵軍の危機感をアジテートするにはこのくらいの不遜さがあつても問題はない。

何より、この名は敬愛した恩師が遺したものなのだ。アトラスが名前の使用に固執しかけているのは、自分にできるせめてもの償いを探しているからなのかもしれない。本物の救世主になることで、心中を漂う罪悪感を少しでも緩和したがつている——。

現実逃避になるのかもしれない。それでも僕は、彼と共に目指した理想を実現させると誓つた。仮に道を違えたのだとしたら、残された罪滅ぼしは望んだ未来を導くことしかない。下手すれば身を滅ぼす危険性すらある重みを背負わなければ、立たされた境地を乗り越える手段が見つけられない……。

腰に取り付けられた黒革のホルスターに収納されたルムガントを抜く。握る手には自然と力が加わつた。銃内部に弾を生成、装束の色より少し明るい光が現れ耿々とした輝きを発する。

込められた銃弾は不満の種子だ。反逆の意思表示として打ち上げれば、それは上空で火花を散らせながら発芽する。若芽はアトラス

たちの行動によって成長し、やがては支部を覆い、都市を覆い、最終的には国全体に根を張ることになるだろう。これがパンドラに送るメッセージ、そして仲間に集合を示す合図となる。

短時間で黙考を済ませ、銃を頭上に真っ直ぐ掲げる。暫しの静寂――。

次の瞬間、トリガーを絞る作業で空気を裂く轟音が鳴り響き、アトラスは開戦の狼煙を上げた。

5

銃声が轟いて数分。支部から雪崩れるように出てきた軍人たちは既に正門前に集結し終えていた。

装備を一見した感想として、彼らの心中のスイッチが既に戦闘モードへと切り替わっていることが把握できた。歩兵を中心に構成された敵軍の武器は主に槍と剣。防具は一切身に着けておらず、盾も所持していない。剣を受け流す用のアイテムとして短剣を腰に携えている者が数名いる程度だ。隊列は槍兵を前に、剣兵を後ろにと単純化されている。

未だ剣の時代が続いているとはいえ、銃器の登場で両手剣と鎧の存在価値が失われて以来、時代は銃に移行しつつある。拳銃型の起^オ源宝器^{ハーバ}の発見により、今や世界は歩兵銃の改良を中止してまで回転式拳銃の開発に精を出しているほどだ。それによって一時的に剣が主流武器の座を維持し続けられているのは皮肉なことだろうが、実直な意見を述べるなら変換器^{ラディウス}がなければ剣の時代はもう終わっていたと言っても過言ではない。

歩兵銃が生まれながらも剣が地位を保ち続けられたのは、変換器による耐久値の底上げが影響している。本来なら鎧さえも撃ち抜く貫通力を有する歩兵銃だが、対処法がないわけでもなかった。変換器を装着した盾を片手に持つだけで、当たり前どころ次第では最大三発の銃弾を防ぐことができる。その防御力を活かして相手との距離

を一気に詰め、次弾装填までの待ち時間を急襲するという戦法が規範化されたのを切っ掛けに、歩兵銃が脚光を浴びることはなくなつた。起源宝器を基盤とせずに製造した武器の典型的な失敗例として挙げられるようになったのだ。

これまでに人の手によつて作られた武器と比べた時の圧倒的な性能差から、一部では《魔剣》や《魔銃》といった神秘的な解釈をする説すら生まれている起源宝器だが、発見から数世紀ほどの歳月が経過した現在でもその本質には一向に至ることができてない。

それに加え、研究の成果として開発された変換器も、実は製造法どころか性能原理すら詳しく公表されていないのだ。最初は戦争の道具として扱われてきた所以だと半ば強引に納得させていたが、《命数を短くする》という使用後の悪影響が国内普及直後に告示された時点で考え方は一変した。

当時は詳細秘匿の疑いまで生まれ情報公開を求める声が相次いだ。効果が得られないまま時間がデモ行為を自然と沈静化させた。

——が、仮にまだ公表されていない秘密があるのだとすれば、更なる不利益が降り懸かる危惧も捨て切れない。元より、安全性が全く保証されていない武器を究明する過程で生まれた産物が生活の糧になっている状況自体が不自然なのかもしれない。けれど、それを推進した張本人であるが故に、賛否が飛び交う脳内を上手く処理する術はずっと見付けられずにいた。

しかし、安全性の不確かさを差し引いたとしても、変換器の性能は十分に傑出していた。瞥見した限りではルムガントが纏う真っ赤な彩光と比べても見劣りしない美しい輝きを生み出す上に、それが武具を取り巻くことで耐久力を上乘せしている。とはいっても、光は効力の範囲と継続発動の状態を示すだけの形式的なものであり、それ自体が耐久上昇効果に直結しているわけではない。

変換器の作動条件は、武具に装備した濃赤の結晶に数秒ほど翳した手を上下左右のどこかにスライドさせることで作動する仕組みになっている。手のひらで変換器に接触し滑らせるまでの間に重要と

なるのはイメージで、生命力を変換器へ送り込むこと——要は所持者と変換器を同調させる想像——を心中に思い描く必要がある。難しく思えるこの作業も意外と造作なく、製作者の数少ない配慮を感じるほどの簡易さだ。慣れれば無意識に行うことも容易になる。

ちなみに、発動後は自発的に解除しない限り、攻防によってダメージが蓄積される、もしくは時間の経過で生命力が徐々に失われていき、その値がゼロに達すると変換器に割れ目が入りやがて損壊する。それ以降は初期の耐久値に戻ることになるので、新たな変換器を装着しなければ銃弾を防ぐ術はない。発動時間は物によって多少の誤差が生まれるようだが、例えばダメージを全く受けない場合でも長くて約三十分前後。当然のことだが、一撃が重い物を食らえばそれだけ時間は短くなる。全変換器に共通して言えることは《使い捨て》であるということぐらいだ。

変換器の有用性が日に日に高まる現在において、戦争時の装備は基本的に鎧なしの片手剣＋円盾が主流となっている。銃の戦場での使用頻度が徐々に低くなったことに起因して、円盾を短剣に変更する者も現れている。今回、敵側には槍兵もいるが、彼らは最前で横隊を組んで前進する突撃部隊なので数は半分に満たない。それに戦いが中盤に差し掛かると白兵戦に突入して槍は使い辛くなるので、腰の剣を抜かざるを得ない。本当ならその反対の手には盾を持つのが一般的なのだが、緊急の状況下で行動を強いられている彼らの中にそれを持つ者は一人もない。

とはいえ、軍人たちにはそんな物はいらないと思わせるほどの気迫があった。各々の心情に多少の差異はあれど、ぎらつく双眼からは刺々しさが滲み出ており、そこから感じ取れる戦闘の意志だけは一様である。

敵部隊の先頭に立つのは、最近になって本部から左遷され、先日支部長室で対面したあの男だ。軍服と同化する漆黒の馬に跨るその姿は、暗黒の魔界から現れ出た使者のような暗い印象を受ける。仮に今が辺りが闇に吞まれた後の時刻だったなら、暗夜に溶け込む姿

の中で認識できるのは服に流れる血のラインだけだろう。

肩まで伸ばした艶やかな銀髪、滑らかな肌、瘦躯な体型など、一瞥しただけでは彼の印象は決して悪くない。だが、顔の一部である人情を感じさせない冷淡な目付きはいつ見ても不気味だ。それを把握しただけで、彼の印象はガラリと変わってしまう。

相手を疎み上がらせるような独特な雰囲気を漂わせるロシュフォールは、手に武具は一切持っていないかった。だが、腰の剣帯には抜き身の剣が吊り下がっている。

全体が細かく波立った刀身を持つその剣の名は確かフランベルク。あの剣で付けられる傷は複雑化し治り難く、最悪の場合は破傷風で命を落とす危険性のある恐ろしい代物だ。殺傷力ではなく、相手に至高の苦痛を与えることに特化した武器。そんな物を所持していれば、使い手の人間性を疑わずにはいられない。

此方の姿を視認したのか、ロシュフォールは素早い動作で周囲に視線を配らせ、騎乗したまま状況を確認し始めた。鋭い双眼が此方を凝視する。両者は暫く静止した状態で睨み合った。

「何者だ？」

数秒の沈黙を裂いたのは、ロシュフォールが放った不審者への問いかけだった。言葉としては少しナンセンスな気がしてならないが、彼がそれを言うことに期待していなかったと言えば嘘になる。

何せ、彼らを含む軍人たちの視線が捉えているのは性別認識すら不能な存在だ。頭から首元までを覆うように伸びた暗黒の偽髪。目を黒く塗り潰され、まるで無表情の顔を模ったかのように愛想のない深紅の仮面。黒衣の上には脹脛まである真っ赤なロングコートを羽織っており、その外回りには丁寧に炎の刺繍まで施してある。そして、右手には無造作に握られた漆黒の拳銃。それらを装備した一際浮き立つ者が正門で立ち止まっていれば、目に留まるのは最早当然だろう。

加えて、既に敵側にも把握できているだろうが、正門付近にいるのは珍妙な格好をした仮面男だけではない。その背後には一メートル

ル半ほどの高さの鋼鉄が横一列に広がっており、目を凝らして見れば等間隔に切れ目が入っているのが分かる。

計十個横並びした四角形の鉄塊は壁盾。^{タワシールド}銃の登場と引き換えに不要品扱いを受けた防具の一つだ。変換器を使用すれば防御力はまさに鉄壁と言えるだろうが、通常状態では銃弾を防げず、大きさに比例した重量さ故に機動性に欠けるためのになり易い。それに白兵戦に突入すればかえって邪魔になり、味方側にも迷惑な存在にしかない。それらの不利益から、現在では無用品の烙印を押され生産ストップにまで陥っている。

今では時代遅れとさえ称される防具を持ち出している光景に、敵は内心でさぞ嘲笑していることだろう。壁盾の裏に兵が隠れているのは言うまでもなくばれているだろうし、盾の数からして兵力的にも劣っているのは明らかだ。

だが、そんなものは関係ない。今回は即席の人員での突発的な戦争のため、人数分の変換器を用意する暇はなかったが、それを考慮した上で考えた作戦だ。苦勞して知恵を練っただけの価値がなければ意味がない。そして、それは実績として得られるべきものだ。

今日、パンドラは大きな転機を迎える。結果次第では国中に混沌の渦を巻き起こし、不安の種を急速に育て、同時に各地に散らばる反逆心を持つ者の心を刺激することができる。作戦の成功は今後の方針を踏まえても不可欠な要素であり、必要な最低限の結果でもある。

だから、何としても勝利を掴む。それがこの盤上で課せられた絶対条件だ。それ以外のルールなど、今となつては無に等しい。

「――私はメシア。パンドラに反旗を翻し、人々を導く救世主だ」臆することなく悠然と、まるで舞台上で定められた役柄を演じるかのように、メシアは堂々とパンドラへの敵意を口にした。正門の向こうから若干のざわめきを感じ取れる。

仮面から発せられた声は、普段から聞き慣れたものとは異なっていた。肉声に変換器を通過する段階で別の性質に変換されているか

らだ。自分で言うのもなんだが、相変わらず聞き心地は良くない。己の口から発せられている筈なのに、出てくる声は他人のものに雑音が混じったような不快音。この声に慣れるにはもう少し時間がかかりそうだ。

「救世主だと……」

群衆の中から聞こえてきた、嘲弄と驚愕が混合したような台詞に対し、メシアは迷わず「そうだ」と言って首肯した。

メシアは再び口を開き、息を吐き出すモーションを行う過程で小さく嘲笑した。とはいっても、その様子は仮面に隠れて敵には見えていない。彼らは突発的に微かな笑い声を耳にただけだ。

一瞬の間が流れる中、メシアは確実に敵を動揺させれるであろう言葉を選び、全ての感情を削ぎ落として淡々と言い放った。

「既に聞き及んでいるだろうが……。君たちの指導者、第二支部の長トレヴィル少将は——私が殺した」

最初に訪れたのは沈黙だった。誰一人として口を開くことなく、味気ない静謐さだけが場に無上に漂った。蒼穹を浮き行く雲が太陽を一時的に覆って日光を遮り、冬入り前ですっかり乾燥した大地に冷たい風が通り抜ける。

流れていた静寂は数秒もしない内に一変した。恐らく、皆が全員メシアの言葉を漸く理解したのだろう。

部隊の雰囲気は次第に騒然とし、兵士は隣にいる仲間と目を見合わせ始めた。漏れてくる話し声に耳を澄ませると、「嘘だろ」「あの支部長が」「どうして」「っと多くの者が否定的な言葉を述べていたが、その中に混ざって「やっぱり」などといった事態の確認ができて納得したような発言をする者もいた。しかし、どんな発言をした者たちも結局は顔面蒼白となって頭を俯け、中には悲嘆から涙を流す者までいた。否定的な言葉を述べた者たちも、その発言をした割には敵の言葉を安易に信じ過ぎている様子が窺える。外側から観察する限り、どうやら情報に関しては最初から知っていた人間が大半を占めているようだった。

情報拡散の効果は靦面だったみたいだが、これほどまで効き目が出ると思部長の人の望の凄さを実感せざるを得ない。仮にあの人を殺さず味方に引き入れることができていたのなら、支部は苦勞せずに陥落できただろう。いや、もしかしたら攻略する必要性自体が失われていたのかもしれない――。

そうやって仮定を次々に並べていった場合、自らの行いに対する罪悪感がハイスピードで膨れ上がり、やがて心を完膚なきまで押し潰すのも時間の問題だろう。

だけど、どんなに泣き言を吐いたところで死者は蘇ったりしない。それは覆らない真実。抗えない現実なのだから。振り返ることは許されない。亡き恩師を思うのならば、少しでも前に進んで理想の未来に近付くことを最優先すべきだ。

黙考するメシアと、悲涙する軍人たちの視線は、唐突に抜剣してフランベルクを地に猛烈な勢いで突き立てたロシュフォールに集中した。言葉は一切口にしなかったが、彼の纏う雰囲気は自然と周りを沈静させていく。場の空気を一瞬で変えたその手腕には、さすがのメシアも驚きを隠せなかった。

ロシュフォールは閉じていた両目をゆっくり開眼し、少しばかりハスキーな低音の声を響かせた。

「……そうか。少将殺害の犯人……そして、情報の発信源は貴様か」脅威的な三白眼が此方をじろりと睨む。反射的に畏怖の念を感じてしまうが、それを表に出さないようどうにか自制心を制御する。

ロシュフォールは突き刺した剣を地面から引っこ抜いた後、メシアが言葉を挟むよりも早くやや早口で続けた。

「兵の姿を隠蔽物で隠し、我々が近付くのを少しでも躊躇わせようという魂胆だろうが………甘いな。そんな小手先の策で勝てるほど実戦は簡単じゃない。――全軍突撃！ 反逆者を処刑しろ――！」

号令と共に振り上げられた剣は真っ直ぐメシアを指し示した。その方向へ突き進ませるように、ロシュフォールは兵を囁けてくる。軍人たちは一斉に変換器を始動させ、周囲の武器に光が灯った。

それは数を凄まじい速度で増やしていき、敵陣を淡い光が包み込んだ。耐久補正を施し終えた敵は我先にと勇ましい雄叫びを天に轟かせ、けたたましい足音で地を揺さぶりながら縦隊で突進してくる。

平然な面構えで物を言っているように見えるロシュフォールだが、彼が功を焦っているのはバレバレだった。場に支部切つてのエースである三銃士が姿を現していないことを好都合とし、自らの指揮の下で功績を得ようとしているのが手に取るように分かる。左遷された者の心中を察すれば、今すぐにでも本部勤務に戻るようになるだけの明確な実績を欲しがるのは合理的な考えだ。少し皮肉を述べるなら、現時点でメシアとロシュフォールが求めているのは同じものということになる。

だが、それもこれも全ては計算内の出来事。しかも、このシチュエーションの実現は意外と簡単だった。三銃士の内、二人の不在は最初から確定している以上、残りの一人が支部にいない日を選べば良いだけの話。ルネに裏表での行動を強要するのは危険なので、作戦後も軍に留まるのはアトラスだけで十分だ。トレヴィルは正門に敵を誘き寄せる時点で処理を終えている予定だったので、旗頭が指揮を務めることはまずあり得ない。それに第二支部は前述の四人が部隊を指揮することで機能しているので、それ以外の適任者は存在しない。そうやって軍内から不適合な人間を淘汰していけば、最終的に残る人物はロシュフォールしかいなくなるという結果になる。

そう。彼は選ばれた人間だ。メシアが第二支部を攻略するに当たって失態を犯す者——全ての責任を押し付けられる役目を。本日偶然にも非番に割り当てられている三銃士随一の指揮官アトラス・フエールの私宅から支部までの距離は馬車を走らせても三十分はかかる。そして、作戦実行から現在に至るまでの経過時間は約十分。どう足掻いても間に合う筈がない。

叱責に値するその事実も、此方にルネという手札がある以上、誰もアトラスを非難できはしない。彼を危険視したルネが本部不在日を見計らって奇襲した、これがメシアの描く理想的な構図。本来な

ら言い訳がましく聞こえるであろうその理由を、本部は間違いなく承認してくれるだろう。それ以上の醜態を晒す役者が目の前に用意されるのだから――。

――その身に刻み込むと良い、ロシユフォール。君も所詮は盤上の駒に過ぎないことを。

群がる敵の集団が目前に迫ろうとする光景を目にしても、メシアは冷静さを失わなかった。背後の兵たちに命令を下す寸前に、昂然とした口振りで言った。

「見せてやろう、貴様たちが捨てたマスケット銃の性能を……！」
言葉終わりに、メシアはゆっくりと右手を上げた。その状態のまま親指と中指を密着させる構えを取り、敵兵が正門を抜ける瞬間を見計らって中指を掌に勢い良く打ち落とす。すると、その動作によってフィンガースナップが生じ、「パチンツ」という破裂音が虚空を裂いた。

直後、背後に待機させていた五十の伏兵が一瞬にして動いた。盾に隠れるように中腰体勢で指示を待っていた全員が一斉に立ち上がったのだ。

彼らの手には、時代争奪の末に戦場から姿を消したマスケット銃が握られている。それらは全て、事前に軍の倉庫から無断で拝借してきた物だ。無論、今日までの期間で全て使用可能にしてある。

三列横隊に並ぶ自兵の内、まず先頭の兵たちが銃を構えた。メシアが体を地に伏せる動作に合わせ、正門に銃口を向けてトリガーを引く。

雷鳴にも似た轟音と共に銃口を抜けた弾丸が敵の意表を見事に突いた。今回は敵が門の幅に収まるように三列縦隊で進軍してきたためめが狭く、全ての弾を敵に的中させるのはそれほど難しい技ではなかった。誰でも撃ち方を学べば最低限は扱うことのできるのが銃の利点である。そういった意味では熟練者が物を言う剣技よりもよっぽど良心的と言えるかもしれない。

倒れた敵に躓いて数名の兵士が転倒した。その間、第二部隊との

入れ替えを瞬時に行い、続けて同じ様に発砲。それを更にもう一回繰り返す。

経過時間、僅か五秒。たったそれだけの間に、敵部隊の約十分の一を屠ることに成功した。

次々と倒れていく味方を前に軍人たちの足が止まった。しかし、すぐさまそれを拒むかのように、敵軍の最後尾にて指揮を執る男が怒号を飛ばす。

「怯むな！ 素人が次弾を装填するまでには時間がかかる。その間隙を逃さず突け！」

つくづく愚かな発言だった。そんな分かり切った対処法を此方がむざむざ許すわけがない。何のために壁盾を用意したと思っている。兵の姿を隠す以外にも、あの障害物にはもう一つだけ有効性がある。確かに三列横隊で順に発砲すれば、三発の銃声の後には少なからず隙が生まれる。だが、それは銃の数が兵数と比例していた場合の話だ。此方の兵の数は五十。それに対して銃の数は……倍の百。つまり、銃声は三回では終わらない。計六回だ。

本当は全ての兵で射撃を行う予定だったのだが……、こんな使い方をすると正直自分でも思っていないかったよ。

前屈体勢で体を伏せたメシアは、後ろで兵が四発目の銃声を響かせたのを確認した。足を再度動かし始めていた敵に、鉛色の弾が容赦なく撃ち込まれる。続いて五発目。そして六発目の音を数え終わった頃には、正門前は凶器の弾丸に倒れた死屍と、そこから流れ出でる夥しい量の赤黒い液体で溢れていた。

敵の数はこれで残り十分の八。まだまだ兵数は勝っていない。とはいえ、敵の足を完全に静止させることには成功していた。体を起こして確認した軍人たちの表情には、先ほどまで湧き立っていた殺意の欠片も感じられない。焦りと恐れに支配されつつある敵情に、更なる絶望を刻み込んでやる。

銃兵は最初から敵の数を減らすためだけの存在に過ぎない。本命は盛大な幕引きを演出するための切り札として、しっかり手札に残

してある。

あれだけ綿密な打ち合わせをしたんだ。時間はきっちり守ってもらうぞ……。

メシアが声を出さずに呟いた直後、大地を揺らす震動が全員の視線を奪った。リズムを全く感じない、非律動的な音。数は複数。支部の東側から聞こえるそれは次第にボリュームを増し、正門に接近してくる。

「な、何だ……？」

奇妙な音にさすがのロシュフォールも困惑を隠せない様子だった。敵愾心を丸出しにしていた双眼を大きく見開き、音の発信源へと顔を傾ける。

急接近する音の正体は馬蹄の音だった。それを証明するかのよう
に、嘶く騎馬の声が煙を呑み切れていない空に鳴り響いた。

外壁の曲がり角から真つ先に飛び出てきたのは女性の軍人だった。若干癖のあるブロンドヘアが風に靡くのを気にもせず猛進する姿は勇ましく、端正な顔貌の人間が手綱を華麗に捌くのは非常に絵になる光景だ。馬の足音に合わせ、腰に下げた細身の剣がリズムカルに揺れる。追随するように現れた騎馬兵集団も皆軍服を纏っており、既に抜剣して襲い掛かる準備を整えている。一見した人数は五十を少しばかり上回っているようだ。

ルネの登場に敵は安堵したように活気付いたが、それはメシアの言葉と彼女の行動によって変容することになった。

「さあ、この戦に王手^{チェック}をかける、ルネ」

言葉を聞くや否や、ルネは小さく頷いた。腰の剣に右手を伸ばし、柄を握って抜き放つ。流れるような動きで反対の手を鎧の中央に埋め込まれた変換器に翳し、柄頭に向けスライドさせる。それにより発生した紅焰の如き光が刀身を覆い尽くした。ルネはそれを下段に構え、体を前転しそうになるほど前のめりになって逆風を切り裂き疾駆する。彼女の背を追う騎馬に乗った軍人たちも拳つて変換器を始動した。

異変に最も早く気付いたのはロシュフォールだった。急迫するルネの視線が見据える先が、メシアではなく自分たちであることに感付いたのだ。

眉をピクリと震わせて息を呑んだロシュフォールは、手綱を操って黒馬を走らせた。味方と味方の隙間を駆け抜け最前列まで飛び出し、肉薄するブロンドヘアの影法師を待ち受ける。素早い手付きで剣を擦り、逆棘の剣にスカーレットの鮮やかな色が追加された。それを中段に構えたと思うと、今度は立ち止まる黒馬の鞍から軽快に飛び跳ねた。空に身を委ねるように跳躍した主人の後を追うように黒馬が前進する。

その予想外の行動に驚いたルネが咄嗟に手綱を引っ張り失速を命じた。馬が強引に速度を落とし、後ろ脚で身を仰け反る。

振り落とされないよう必死に手綱を掴むルネ目掛け、上空からロシュフォールの刃が迫った。馬が前脚を地面に戻すと同時にルネも剣を構え、防御姿勢を取る。

次の瞬間、上空から振り下ろされた剣と下段から振り上げられた剣が勢い良く衝突した。金属同士がぶつかり合う衝撃音が高らかに鳴り響く。二つの剣が軋み、火花が散る。その後ろに構える両者の表情からはどちらも圧倒的な気迫が迸っている。

最中、地に向かって急速に落下するロシュフォールの体を、追隨してきた黒馬が見事に支えた。まるで吸い込まれるように馬に跨ったその光景は、本来なら拍手喝采を浴びてもおかしくないほどに素晴らしかったが、今が戦闘時ということもあって彼を称える声は一つもない。味方同士である筈の二人が、戦場で剣を交えるという異変への困惑が敵軍の士気を大きく下げている。

しかし、そんな周囲の変様には眼もくれず、鏑迫り合いを続ける両者は互いを鋭く睨み付けた。時の流れが止まったと錯覚するかのように静止した二人の内、不意にロシュフォールが厳しい顔付きで訊ねた。

「我々を裏切るの気か？」

その問い掛けにルネは答えない。反逆者の傀儡と成り果てたかのような意思表示の無さに、ロシュフォールの怒りのボルテージが上がる。

「責様……、デルブルー卿を誑かしたのか……!?」

非難の矛先は次の標的としてメシアを選んだ。目線だけを此方に向けたロシュフォールからは、どす黒い殺意が滲み出ている。命を刈り取る死神の視線が生者を射るような禍々しい雰囲気、メシアは無意識に脅威を感じて数歩後ずさった。

……冗談はほどほどにして欲しいな。僕が傀儡師だという着眼点は間違っていないが、生憎彼女は自らの意志で寝返ったのだ。例えばそこに他者の観念が入り混じっていたとしても、決定権を剥奪してない以上、全ての重責は判断を下した当人にある。責任転嫁など見当違いも良いところだ。

心中で応答を終えたメシアは揶揄的な微笑を前置きとして入れ、悠然とした立ち振る舞いで言葉を口にした。

「君たちが私の銃の鳴き声に釣られて素直に正門まで集まってくれたお陰で、彼女らを東門から侵入させるのにはさほど苦を労さなかったよ」

言葉を言い終わった瞬間、何かに気付いたロシュフォールは目を丸くした。反射的に視線をルネの方向へ戻すが――時既に遅し。彼女の後ろから押し寄せていた騎兵は、瞬く間にロシュフォールの横を通過した。迅速果敢に突撃する五十ばかり兵隊の氣勢は凄まじく、既に戦意を大幅に削られていた敵軍との勝負は目に見えていた。

敵軍の数は見る見るうちに減っていった。ある者は馬に撥ねられ、またある者は敵の剣に倒れ、仕舞いには敵味方を間違えてた軍人に斬り付けられた者までいた。正門の向こう側で行われる白兵戦を、メシアと銃兵が手出しせず見守るこの瞬間、戦局は完全に逆転していた。

「クッ……撤退だ！ 支部を放棄して正門から活路を開け!!」
状況が明らかな劣勢に変貌したのを理解したロシュフォールが、

ルネと剣戟を繰り広げ続ける中で叫んだのは、苦し紛れの逃走宣言だった。

だが、それを批判する味方は一人もいなかった。寧ろ待ち望んでいたかのように、軍人たちは進んで正門に向かって疾走した。転がるように遁走するその姿からは、軍人が持つべき矜持すら感じられない。生存欲に取り憑かれた、ただの人間だ。

しかし、だからといって此方に向かつて来られるのも迷惑だ。救世主に縋るならまだしも、それを横切つて逃げ帰るなど、まるで自殺願望でもあるかのようなじゃないか。丁度良い。勝ち鬨をあげる前座として、遁走者たちを奈落の底へと突き落としてやる。

嘗てないくらい狂氣的な笑みで表情を歪めながら、メシアは門下に立つて敵の前路を遮った。右手に握った物をゆつくりと上げ構える。吹き荒ぶ狂風でコートが翻り、斜めに降り注ぐ日差しが仮面の瞳に不気味な光を与える。

漆黒に塗られた金属塊がエネルギー凝縮時の微小音と共に光を放った。淡い赤色の光輝が徐々に濃度を増し、ぴたり五秒で生命力と同色になる。同時に十字のライトエフェクトが瞬時に明滅、銃装填完了の合図^{サイン}が簡易的に示される。

ルムガントを扱う内に分かったことが一つある。この銃は本来の銃の性質である撃てば弾が飛び出て終わりの《射出型》ではなく、生命力がなくなるまで引き金を絞り続けることで銃弾を光線のように放ち続ける《放射型》の性質を持つ異色の武器だ。無論、弾は一発しか装填できず、エネルギー貯蔵量にも限界があるので、永遠に撃ち続けるなどという芸当は不可能だが、これを知っている場合と知らない場合とでは戦闘面での有用性が段違だろう。

発射準備を終えた銃の引き金を絞る瞬間、メシアは射線上からぎりぎり外れた位置で戦闘を続ける指揮官に向け、勝利宣言を込めた言葉を投げかけた。

「君の敗因は、現在の戦い方が染み付き過ぎていたことだ」
引き金に乗る人差し指に力が加わった。耳を劈くような轟音。

直後、銃口の目前に忽然と発生したクリムゾンの円光から、厚さ三十センチ前後の同色の流星が煌めいた。それは紛う方なき銃弾であろうが、継続的に放出される生命力が生み出すのは、銃弾と表現するのは難しいと思うほどに太い一筋の光線だった。

冥府の門より放たれた巨大な光の戟は、正門に群がる有象無象の衆を一瞬で薙ぎ払った。矛戟は勢いを殺さないまま猛進し、尖端が支部の鉄扉に突き刺さる。それにより瞬間的に速度が著しく落ちるが、刃先に連なる柄がその長さを急速に縮めることで速度を再ブーストし、遂には扉を貫通した。進撃を続ける戟はやがて柄と切っ先が完全に同化し、数メートル先で跡形もなく消失。通り道を振り返ると、小さく燃え揺れる生命力の残り火と、胴体が無残に穿たれた黒服の亡骸が散乱していた。

残った敵影はたった一つ。此方のエースと熾烈な戦いを繰り広げていた敵の指揮官、黒衣の上に銀色のシルエットを被ったロシユフオール一人だけだった。

依然として漆黒の騎馬に跨った彼は、状況を見るなり瞬時に行動を起こした。それは自らの命が尽きるまで敵に抗い続ける不屈の闘魂ではなく、保身第一を視野に入れた防衛本能。馬を俊敏に操って現場から立ち去るといふ、何とも情けない逃走行為だった。

東門に駆けるロシユフオールを、剣を強引に押し退けられたルネが追撃しようと馬を動かした。それを阻止するように、メシアは震える声を張り上げた。

「追う必要はない。既に、当初の目標は完遂している……」

荒い呼吸で空気を吐き出し、乾いた息が地面に溶ける。片膝を立てた状態で屈んだ体の重みに耐えながら、どうにか起こそうと試みる。天空より降り注ぐ神の重圧に抗うかのように、メシアは重い腰を上げた。激しく胸を打つ鼓動の柵を左手で押さえ付け、深紅の布を力強く掴む。

どうやら生命力を使い過ぎたらしく、その影響がもう体に現れていた。当然と言えば当然か。ただでさえ巨大な弾丸を隙間なく撃ち

続けたのだ。それに加えて、今日は既に二発分のエネルギーを失っている。今回使用した総量は一日の平均使用量を軽く超えているだろう。生命力の消費量に応じて倦怠感が増幅するので、身体が訴える苦痛は偽物でなく本物であるのは間違いないと言える。

とはいえ、ここで倒れるわけにはいかない。指揮官が戦場で気絶するなど言語道断なのは勿論だが、何より計画は始まったばかりなのだ。ここで皆を不安がらせることだけは忌避しなければならぬ。両肩を使って大きく深呼吸して息を整え、周囲の様子を一瞬したメシアは、皆が待ち望んでいるであろう台詞を高らかに言い放った。

「我々の勝ちだ……！」

何事もなかったかのように言葉を発したメシアの姿に、皆の視線に乘せられていた不安は一斉に解消されたように見えた。左右の味方と顔を見合わせる彼らの瞳に次第と輝きが満ちる。

一人が抑えきれぬ興奮から剣を天に突き上げ喚声を上げると、それは瞬く間に味方全体に広がった。次々と掲げられる剣、湧き上がる数多の雄叫び。時折交じる馬の嘶きと、逆巻く風が奏でる音色が心地良く空間に溶けていく。大地から上空までを支配した熱気は、暫く静まることはなかった。

そんな中、メシアは改めて周辺を見渡した。歓喜して躍り上がる群衆を押し退けて目に留めたのは、破壊された支部と辺り一面に広がる黒衣の屍。それに付属するように転がった剣と槍。それらに装備された変換器からは精気が消え失せた淀んだ光が滲んでいる。

味方から死者は出ていないので、流し広がる暗赤色の液体を発生する骸は全員敵——いや、正確には嘗ての味方のものだ。その中には、一度は死戦を共に戦い抜いてきた者だっているだろう。だけど、反逆者となったメシアの前に嘗ての仲間は一人生らず葬られた。唯一の生存者であるあのフランベルク使いも、無様に逃げ帰った後だ。わざわざ再確認するまでもない。この状況を一見すれば、勝者がどちらなのかは誰の目から見ても瞭然だ。幕を引き終えたこの戦場には、文句の付けようもない勝利が確かに存在した——。

「しかし、これは虐殺だ……」

第二支部攻略戦（後書き）

お久しぶりです。約一ヶ月振りの更新になります。

今回は、一話一万文字という自身で定めたルールを大幅に無視し、二万文字を超えるという結果を導き出しました。加えて、この更新作業中に処理落ちし、最終チェックで書き直したデータが飛ぶという悲惨な出来事を二度ほど経験しました。

本来ならお盆前に投稿を終えている予定だったのですが……、予想以上にキーボードを乱打して文字入力を行った影響か、一週間ほど遅れてしまいました。

さてさて、今回の話で小説内の世界は大きく動きましたが……、次話では更に動かす予定でいます。問題の文字数は多分——というよりほぼ間違いなく収まらないと思われます（笑）。

交錯する思惑（前編）

6

貴族という存在を敵視し始めたのは、やはりあの事件が引き金となっている。

東部中心都市ビブリオーテからさらに東に向かい、山岳地帯を抜けた先に位置する小さな農村。そこがシャルルの生まれ育った故郷だった。周囲を小高い丘に囲まれた田舎ではあるが、緑豊かな空間が仄かに漂わせる木々の匂いと、我が子同然のように接してくれる村人の温かな視線は嫌いじゃなかった。それに加え、自家栽培による豊富な食物は天下一品ときている。

本来なら認知度の低いであろう土地であったが、父やトレヴィルを筆頭とした軍内でも有名な者たちの出身である事実が村を賑わせていた。彼らが軍で功績を挙げた情報が届く度に、村では歓呼の声と芳醇な香りに溢れて連夜のお祭り騒ぎになったと聞く。しかし、戦傷を理由に父が軍を退いてからは、その回数を徐々に減らしていたそうだが。

村人は大人より子供のほうが比較的多かったが、その大半が村外れの奥地に建つ孤児院で暮らしていた、身寄りを失くした少年少女たちだった。アトラスが入軍を理由に村を出た後は、シャルルも資金獲得のために出稼ぎを始めて村を離れ、院に足を運ぶことも徐々に少なくなったが、父と共に何度も訪問して同年輩の子たちと時間を共有した記憶は今でも心に残っている。

——しかし、その悦ばしい思い出は一つの事件を起因として哀切なものへと一転した。

二年前に起きた、貴族による村の襲撃事件。昨日のトレヴィルとの対話では詳細を語らなかったが、彼らの目的は村内の金銭と食物

の強奪だった。国の権力によって費消した物を少しでも回復するための延命処置として、貴族は自らが雇っていた大勢の平民を従え、近隣の集落を手当たり次第に食い尽くす決断を下したのだ。

そして、その一つとして不運にも選ばれてしまったのがシャルルの家郷だ。

凶報に狼狽したあの日。全力疾走で帰郷した際に見た光景は、床に就くと今でも夢見騒がしく思い返すことがある。猛火に焦がされた空間の中で、地に身を張り付けるように倒れた村民。黒焦げになった建物の残骸と、俯せに伏した屍が発する異臭が空気に溶け合い、辺りは昼夜問わず寂寥とした雰囲気醸し出していた。

その地に足を踏み入れた時の記憶は、夢境にまで現れてシャルルを戦慄させた。その度にあの時の悲嘆、苦悶、喪失感が夢中で無限にリピートされ、傷心を遠慮なく抉っていた。それは鋭い刃物で身体を貫かれた、村人たちの体験をジェネレートさせるかのような感覚を得た気分になった。その影響が、目が覚めた際に見渡した一人部屋は妙に虚しく思えてならなかった。

あの日を境に、シャルルの中で貴族の価値観は大きく変化した。深奥から湧き上がる無尽蔵の私怨が敵愾心を燃やし、敵意が膨れ上がることに認識がぶれていく。シャルルの中で、讐敵の枠組みが《事件の犯人》から《国内の貴族》へと変貌を遂げていたのに気付いたのは極最近のことになる。

その考えを改めるといふ思惑もあり、シャルルは軍人になる道を選んだ。だが、貴族に対する復讐心が一向に薄れなかったのも事実だ。混在する二つの意志は心中で真つ向から激突し、シャルルに頭を抱えさせていた。思案に暮れる日々の中、これまで通り必死に働くことで気を紛らわせながら、年月をかけて漸く結論に辿り着くまでに至った。——それは、事件から約二年が経過した頃だった。

二つの意志は一つになり、入軍してこの国を内側から変えるという決意に集約された。相手が平民なら何をして大丈夫などという価値観は絶対に捨てさせなければならない。それを実現するには、

やはり軍内から変えていくのが常套句だろう。その第一歩である入軍という必須条件を満たすため、シャルルは亡き父の旧友であるトレヴィルを頼ろうと第二支部を訪ねたのだ。

しかし、村を攻め落とされた過去に感化され、シャルル自身もまだ貴族に対する偏見を捨てきれずにいた。

実際、路地裏で中年貴族と衝突した時も、呼び起された当時の記憶から必要以上に反論してしまい、激怒した貴族の命令で危うく殺されるところだったのだ。アトラスが駆け付けてくれなければ、間違いなくあの時に命を落としていたであろう。今後は我執に捕らわれず、身を引き締めて行動しようと思いを決意したのもその時である。

一日ごとに小さな段差を一段上る程度の進歩だが、それは昨日の謁見によって一気に数段駆け上った実感を得た気になった。

支部長室でシャルルが事件の概要や今後の方針等の全てを打ち明けたことに対し、トレヴィルはどこか侘しげな表情で暫し沈黙していた。彼方に立つ亡き友の墓標に思いを捧げるように目を瞑った姿からは、戸惑うというよりも、事実と直面したことによる動揺が覆い隠されているように思えてならなかった。

しかしその後、何事もなかったかのような笑顔で、彼はシャルルの意思を快く承認した。しかもすぐに筆を執り、推薦状を進んで書き始めたのを見た時は、彼の強靱な精神力を見せつけられた気がして思わず驚嘆したほどだ。東西南北の統轄支部の長というのは、これほどの豪胆さがなければ勤まらないのかと思うと、シャルルの目指す場所は予想以上に高難易度の道程になるのだろう。

そんな彼に尊敬の念を抱きながら一夜を明かし——今日。シャルルは再び支部に繋がる緩やかな坂道を歩いていた。

晴天に孤立する日輪から照射される光が大地に明るさを与え、寒気が緩む。宙を吹き荒ぶ寒風が今は心地よく体に浸透し、同時に一丁羅のコートが小さく翻る。左右のポケットに手をつ込んだ状態で吐き出した息は白かったが、寒気は意外と感じない。寧ろ、人間が活動するには丁度良い気温だとすら思う。

早くも見慣れてきた、枯れ木でできた尖頭形のアーチを軽快に進み、馬蹄形の門前で許可を得て移動を継続。それから数分ほど歩いたところで、シャルルは漸く第二統轄支部の名を冠する、麗々しい塔型の建物に到着した——のだが。

「おかしい……」

建物に入って周囲の違和感を感じ取った後、シャルルは訝しげに呟いた。

昨日、支部を出る際にトレヴィルと口約束を交わしていたので、今回は東門からでもスムーズに支部内に足を踏み入れられたわけだが……どうも様子がおかしい。建物内で擦れ違う軍人たちは誰もが慌ただしく、表情にも余裕が見られない。視線の端では口頭で何かを伝達している者もいるようだが、最小限のポリウムで会話をしているので聞き耳を立てても音を拾うのは難しいだろう。

再び支部を訪れるまでの数十時間の間に、一体何が起こったというのだろうか。螺旋階段を上りながら視線を配らせる中、無意識的にそんなことを考えてしまう。

嫌な予感がした。交互に歩を進める脚が徐々に運動速度を上昇させ、シャルルの行動を急かす。階段を一段、また一段と踏み締める度に面容が嶮しくなっていくのが分かった。遂には馬鹿真面目に一段ずつ上るのがもどかしくなり、飛び跳ねるように三段飛ばしで軽快に上り始めた——その時だった。

支部の外側から、天空を切り裂く轟然たる爆音が響いた。咄嗟に立ち止まり、真っ白に塗られた壁の向こう側を透視するかのように、発信源である正門方面を振り返った。

銃声——！！？

音の正体を把握した瞬間、直感的に感じた焦燥が行動を急き立て、シャルルは走り始めた。その真意すら分からぬまま、目にも留まらぬ速さで階段を一気に突き進む。研ぎ澄まされていく思考によって意識が徐々に切り離され、固定された視界の中に映る純白の段差すらも認識から外れた。

段を上り終えたところですぐ左に方向転換。勢いを殺さずにほぼ直角に曲がる、という無茶苦茶な動作によって体勢が崩れかかるが、どうにか倒れる寸前で立て直して疾駆する。支部長室に繋がる大扉は、階段側から数えて五番目。己の記憶を頼りに、左右に窓と扉が等間隔に並ぶ殺風景な空間を、我を忘れる思いで駆け抜けた。

一つ、二つと扉の前を通過し、五つ目の扉に辿り着いた瞬間。開け放たれていたその大扉の向こうにダッシュで入り込んだ。瞬時に失速して足を止め、落ち着きのない素振りでも周囲を見渡す。

最初に視界に入ったのは、扉から五メートルほど先にあるガラス窓だった。約一メートル半の高さを持つ両開きのそれは、右側が僅かに開けられている。そこから入り込んだ涼風が、窓の両側に装飾として吊り下げられたカーテンの片方を揺らしている。

その風景には、少しばかりの違和感を覚えた。窓が開いていることに対してではない。その界限——特に窓の手前に設置された長机の近辺に飛び散っている赤黒い何かだ。形は点や線状だったりとまちまちだが、色は全て同じ暗赤色。そして、それから漂ってくる凄まじい悪寒が、身体の末端にまで行き渡る。まるで雷でも駆け巡ったかのように、全身が一瞬震えた。

怪訝な表情を作りながら思わず足を寄せると、室内に無遠慮に侵入していた陽光が視野を真白に染めた。咄嗟に閉眼ながら視線を落とし、地面を目視するため両眼を開いたところで……シャルルは再びそれを目にした。

中心に円を描き、そこから飛沫状に撒き散らされた……赤黒い液体。まだ完全には乾き切っていない。注意深く地面を観察すると、それは円から右方面に向かって線状の跡が続いている。ほぼ等間隔で切れ切れになった、その線の上をなぞるように視線を動かし、残痕の行き先を追う。

線はハメートル先で途切れていた。そして、その数歩先まで視線を進めると、四脚から伸びた一本の柱が支える丸机の丁度真下に、一つの黒影を発見した。

肩から腕と通り、脚にかけて赤いラインを描いた黒色の衣装を着込んだ大柄な体躯。短く切り揃えられた白髪の下表情は、普段にも増して歪んでいた。

狭まった視界を徐々に広げていき、床に横たわる体の全身を再度捉える。その時、真っ先に飛び込んできたのは、最初には眼に情報として入らなかったもの。腹部の辺りから地面を覆うように広がった、暗赤色の液体だった――。

激しい戦慄を味わいながらも、シャルルは見慣れた顔立ちの人物に向け、可能な限り声を振り絞って叫んだ。

「トレヴィル少将！」

我をも忘れる思いで両脚を動かし、彼のもとに駆け寄る。片膝を折って屈み、手を滑り込ませて彼の上体を起こす。心中に渦巻く疑念を押し退け、安否を確認。

直後、低い呻き声が耳に届いた。間違いなくトレヴィルのものだ。反射的に彼の顔に目を向けると、閉じられた両眼が小刻みに震えていた。息遣いは荒いが、少なくとも生存はしている。

続けて、シャルルはトレヴィルの負傷箇所を探すため目を配らせた。すると、脇腹を押さえた左手の平が赤く染まっていることに気づき、脇腹からは未だに出血しているのが分かった。

「誰がこんなことを……」

一瞬、銃弾で撃たれたのかと思ったが、その判断はすぐに不確かなものとなった。彼の大きな手が傷口から離れた時に視認できたのだが、銃創にしては傷があまりにも大き過ぎるのだ。腹部を貫通してできたと思われる直径約十センチほどの傷は、剣や槍といった他の武器でも決して生まれはしない。

まるで獣に食い千切られたかのように抉られた左脇腹、これはどう見ても致命傷だ。内臓の損失具合や出血量から考えても、まだ生きていたという事実が不思議でならない。傷の弧状にところどころ残る鉛丹色の明光が左右に揺れ、狐火の如き存在感を醸し出している謎の光景が心中に疑問を投げかけてくるが、今はそんな些細なこ

とを気にかけている余裕はなかった。

シャルルが軍内にいるであろう医者呼びに行くかどうか思案に暮れていると、トレヴィルの両眼がゆっくり開いた。首を視線が合うように傾け、静かに動いた口から言葉が響く。

「シャルル……これを……」

言って、トレヴィルは握り拳を作っていた右手を差し出した。胸元まで持ってきたところで拳が広げられ、シャルルは彼の右手を食い入るように凝視した。

手の平に乗っていた物は、酸化反応によって一部が錆び付いた、鈍色の鍵だった。ブレード部分は複雑な形状をしており、反対側の頭部には長さ二十センチほどの黒紐が結わえられている。

「地下室の鍵だ。奴と同じ力が……そこにある……」

水を掬うような構えで両手を寄せると、トレヴィルの手が裏返し、鍵はシャルルの手の平に吸い込まれるように落下した。

口は何か言葉を発しようとして動いているのに、それが声になることはなかった。事態に対する脳内処理が追いつかず混乱しているのだろう。何より、高笑いする彼の元氣な姿を目の当たりにしてから、まだ一日しか経っていないのだ。この状況が理解し難いものであることは間違いない。

「ワシは、少し長く生き過ぎたらしい……。過去に未練を残したまま世を去るのは……本望とは言いがたいが……」

トレヴィルの震える唇から発せられる一つ一つの言の葉が、臨死体験中の人間が生涯を振り返るリピート現象のように思えて、シャルルは眉を曇らせた。両眼が次第に水気を帯びてくる。

——そんな死期を悟ったかのような台詞が聞きたいわけじゃない。こんな深い傷を負わせられたなら、その実行犯が一時的にでも傍にいた筈だ。何故その特徴を挙げない……まさか、顔を見てないのか？ いや、そんな筈は……。

脳の半分で冷静な思考を巡らせつつも、片方では違う感情が渦巻いていた。

——俺は……、軍服を着た後でも貴方に指南を受けたかった。父が教えてくれなかったことを、貴方なら教えてくれる気さえしていた。その将来図が、まさかこんなにも早く闇黒で塗り潰されるなど思いもしなかった……。

その心情に打算的な考えがないわけではない。最初から利用する気満々で支部を訪ねてきたのだ。推薦状という特別待遇で士官学校をパスし、逸早く軍人という枠内に収まろうとした……。だが、これが一利一害とも言うのなら、その弊害は余りにも理不尽だ。

そんなシャルルの思考を見透かしたように、トレヴィルは口元に微笑を浮かべて言った。

「とはいえ、時代は若い者に流れている……。老人の意志を継ぐのはお前か、もしくは……。」

言葉終わりに、トレヴィルの視線がシャルルを真つ直ぐ射た。それは優しくもどこか儚い……。陽溜まりにぽつんと咲いた一輪の花を思わせた。眼光は昨日見たものと比べてかなり弱々しい。

しかし次の瞬間、トレヴィルの瞳に一点の光が迸った。鍵を渡した後、行き場を失くして垂れ下がっていた右手が弧を描いて動き、シャルルのコートの襟を掴んだ。そのまま力任せに引き寄せられるそれによって距離が縮まり、トレヴィルの顔が数センチ先にまで迫った。

「……忘れるな。未来は、決して一つではない……。分岐点で行う選択、それが要となる……。誤るな、とは言わん。だが……未来永劫、自らが後悔せずにいられる道を……選べ……。」

いきなり何を、という疑問符が咄嗟に頭を過ったが、それはすぐに解消された。

遺しているのだ。命の灯火が消える前に。これから新たな道を歩むであろうシャルルに向け、最初で最後の教訓を刻もうとしている。闇魔の誘いを拒み続けながら、心血を注いで……。

鋭い視線の矢に乗って、重厚な声が胸を貫く。不思議なことに、その言葉を向けられているのは自分一人ではない気がしていた。彼

の双眼が見詰めているのは間違いなくシャルルだが、その身体を透過し天井さえも通り抜けて、その先に——同じ空の下にいる三人の盟友を見据えているように思えた。だとすれば、その者たちに遺言を届けるのも、シャルルの役目なのかもしれない。

その遺志を汲み取るように、シャルルは深く頷いた。その動作によつて、双眼にそれぞれ溜まつていた涙が目頭を伝つて落下し、トレヴィルの胸元に光の雫を散らせた。

それを見たトレヴィルは、口元を綻ばせて短く笑った。徐々に力の弱まっていた右手がコートを放す。それによつて崩れそうになる体をシャルルが両手で支えた直後、今度はトレヴィルの左手が動いた。それは弓形に動いてシャルルの後頭部を捉え、ゆっくりと上下に撫でた。何度も、何度も。

繰り返される動作の中で見た彼の表情は、我が子を愛でる親のような純愛に満ちた輝きを持っていた。様々な感情が心中を彷徨い、懐かしき過去の記憶が次々と蘇ってくる。

「大丈夫。君ならきつとできる……だから……」

——トレヴィルの言葉は、そこから続くことはなかった。

シャルルの髪を擦っていた手が突如として作業を止め、力を失い垂れ下がった。小さく開いていた両眼が完全に塞がり、表情から徐々に血の気が薄れていく――。

瞬間的に眼を見開いたシャルルの脳裏に、一つの結末が導き出されたのは数秒後だった。嗚咽は意外としなかったが、堪え切れなくなった涙は次々と瞳から溢れ出てきた。それによつて滲んだ視界をどうにかしようと何度も瞬きをしたが、意味は全くなかった。

静かに瞼を閉じて息を引き取った彼の姿は、シャルルの脳裏に浮かぶ、最も親しき人物と重なった。呼び起された記憶に鏤められた星屑が波紋を生み出す。不意に飛び出た低い囁れ声が空気中に虚しく溶け込んだ。

「親父……」

その言葉を零してから、一体どれだけの時間が流れただろう。

悠久にも思える緘黙の時間が終わりを告げた時、シャルルは音も立てずに立ち上がった。地面に仰向け状態で眠った男に僅かな間だけ黙祷を捧げ、部屋を抜ける。

心中に蟠る、数多の感情を抱えながら、シャルルは脇目も振らずに通路を進み階段を下った。目指す場所はたった一つ。その目的は、幾度となく繰り返される、悲劇の連鎖を断ち切るために――。

交錯する思惑（前編）（後書き）

今回はペースの遅さから、一話を二分割することになりました。

そして、話が思ったより長くなりそうだったので、後編は結構端折ってます。前編もそれなりに端折ってますが……。

前編はシャルル視点オンリーということで、登場人物は二人だけでしたが、その内の一人は残念ながら退場というかたちになりました。それには色々と理由があったりするのですが、ここで読者を泣かせようと思ったなら、もう少し彼のエピソードを事前に用意しておくべきでしたね。……まあ、この話で泣かせるつもりは最初からなかったんですが。

この物語は、二人の視点から進めていくのもあり、それ以外の人間の描写が疎かになりがちです。僕が書くと、どうしても引き立て役みたいになっちゃいますよね……。

ですが、今回退場した彼は後々に活躍するタイプです。それがどんなかたちでかはご想像にお任せしますが、彼は今よりも過去のほうが活きる、とだけ言っておきます。

ではでは、次は後編を載せる時に、また何かしら語っていかうかなと思います。

交錯する思惑（中編）

支部攻略後の余韻に浸る仲間たちに指示を出し、隊を二分してからかれこれ十分が経過した。

メシアは残った二十名の兵士と共に次の作業に移り、支部に蓄えられた武具を片っ端から掻き集めていく。盗人の真似事などとても褒められたものではないが、今はそんな人道を押し通している場合ではない。それが結果を得るために必要な悪行ならば犯す。過程など最早どうでもいい。

どれだけ悪人と罵られようと、パンドラが崩壊した暁には、その汚名は英雄という名声に塗り替わる。それ以前に……既に人として最大の罪咎を背負っている以上、それを上回る悪行など存在しない。今現在において、此方の部隊に圧倒的に不足しているのは、頭数は勿論だが兵装もその一つだ。マスケット銃を使った戦術は二度と通用しないだろうから、それに変わる武器——つまり現時代的主流武器である剣、そして変換器があれば大きな力となる。

それらを山積みにした馬車を部下に任せ、メシアは自らが破壊した支部を見詰めた。

この場所で二年ほどの時を過ごした身としては、少しばかり名残惜しさを感じる。だが、支部に留まれば此方の所在を馬鹿正直に教えるようなもの。幾ら愛着ある場所だとしても、一時の感傷に流され全てを台無しにするわけにはいかない。

メシアが哀愁漂う建造物を前に緘黙していると、不図して横に並んだルネが聞き慣れたフレーズを口にした。

「人世は屈辱と苦悩に満ちている。絶望の淵に真理あり。集約されし意志が暗雲を漂わせる時、呼び覚まされた誓約の下に、覚者は集う。待ち受ける戦乱の先に、最良の未来を見据えて……」

「……神書の第一章《決起の時》か」

長々しい言葉を耳にした後、メシアは無意識的に呟いた。

「……よく覚えているな」

「同じ台詞を連日のように聞かされれば、嫌でも覚えるさ」

感心するルネに、苦笑を交えながら答える。それを聞いた後でも、ルネがどこか嬉しそうな表情をしているように見えたのは……おそらく気のせいだろう。

全五章構成の神書の内容を一言一句間違えず暗記しているルネを変人扱いしていた頃もあったが、一章分の内容を要約したものを、他者の影響とはいえ五つとも覚えている自分も十分に異常域に至っているような気がした。

一章は、戦乱の世に不満を覚えた一人の人物が莫逆の友たちと約束を交わし、乱世を終わらせるために天下統一を目指す内容。奇しくも、今の自分と面白いぐらいにマッチしたものとなっている。

神書は後々の展開に色々と問題があるので同じ道を進む気はないが、記された助言ぐらいいは聞き入れても良いのかもしれない。

珍しく神書に対して有難味を感じていた——その時だった。

「大変です！」

破壊した支部の鉄扉の向こうから突如として聞こえてきた大声に、二人は即座に反応した。見ると、味方に寝返った軍人が一人、右手を反対の腕で押さえながら走ってきている。

着用する軍服には至る所に裂け目があり、押さえ付けた左腕から零れたと思われる赤黒い液体が服に流れている。深手は負っていないようだが、一体何が……敵は既にいない筈だが……。

近寄ってきた軍人に何があったのか尋ねると、軍人は息を落ち着かせながら早口で言った。

「支部内に残っていたと思われる敵が一名、包囲網を突破して単独で突っ込んできます！」

その言葉は、先ほどのメシアの思考を覆すものだった。予想外の事実思わず驚愕する。

まだ軍人が残っていたのか——いや、全ての軍人はあの時の緊急召集で正門前に集められていた。その命令を無視してまで支部に留まる理由はない筈だ。

疑問に思っただけ追及してみると、予想していた通りその人物は軍服を着用していなかったらしい。

嫌な予感がした。多勢に無勢な状況下にも関わらず、それを切り抜けてくる者。軍人以外でそれが可能な人物など、メシアが知る限りでの該当者はたった一人しかいない——。

「見付けた……！」

尖った声が突如としてメシアの耳に届き、ぴくりと震えた体が反射的に右手のルムガントを構える。

声の主は、先ほどの軍人と同様に鉄扉から姿を現した。媚茶色のシルエツトがまず眼に入り、次いで見慣れた面貌の情報が双眼を通じて脳内に送り込まれてくる。

前髪を右眼にかかるように分けられた茶髪。引き攣った眼は獣のような鋭さを持ち、そこから流れ出でる雰囲気からは鋼鉄の弾丸のような冷たさを感じた。身に纏うオーバーコートが風に煽られて不気味に揺れる。そして、右手に無造作に握り締められた、黒光りする金属塊——。

全身黒一色というのが奇異な印象を受けるが、基本的なフォルムは、メシアの持つルムガントに酷似している。銃把は緩やかな弧を描き、その先に取り付けられたトリガーガードは楕円形だが、形状は長方形に近い。回転式弾倉の部分にも金属が平たく張られているため、銃弾の装填箇所は不明。銃身はハインチ弱で長細く、それが縦に三つ連なっているのが最大の特徴だ。

「その武器……どうやら、箱は一つじゃなかったようだな」

親友よりも第二の起源宝器の思わぬ登場に対して動揺し、ルムガントの銃口が僅かにターゲットから外れた。

まさか第二支部でも箱を管理していたとは……一杯食わされまして、少将。

シャルルの登場に関しては、軍人から話を聞いた時点で大体の予想はできていた。だが、パンドラに二つ目の起源宝器が存在するな
ど知りも考えもしなかった。

「シャルル・イーグルス、君は禿鷲にでもなるつもりかね？」

怒りを微かに帯びた合成音が大地に浸透する。仮面の裏で下唇を強く噛み締める。

誰が想像しただろう、こんな非現実的な出来事が起こり得ることを。未知数の力を持つ起源宝器が同じ国に二つ存在し、雌雄を決するが如くぶつかり合う。しかもそれを手にするのは、つい先日約十年振りの再会を果たした長年来の親友同士。

この邂逅は、運命だとも言うのだろうか。国を裏切る決意をした時点である程度の覚悟はできていたが……この世の神様は残酷な展開を用意してくれる。

できることなら、現時点で彼と闘争することだけは忌避したいところだが……、どうやら相手にその気は全くないらしい。

「……お前か。お前が……トレヴィル少将を……！」

溢れる言葉と共に額の中央にカ一杯シワを寄せながら、シャルルは拳を握り締めた。猛獣のような鋭い眼差しが、メシアではなく右手のルムガントを真っ直ぐ睨み付けてくる。両眼から禍々しい気を迸らせる人物が、自身の友人であるという事実を思わず忘れそうになる。

発言からして、トレヴィルの最後を看取った真の第一発見者はシャルルなのだろう。過程は不明だが、少将に起源宝器を託され、正義感から犯人捜しを始めたのは確定的だ。

だが、少将殺害犯を捜し当てた今、おそらくシャルルを突き動かす衝動は最早善意ではない。父の友人を目の前で失ったことに対する悲憤。そこから転じた単純なる恨み。純粹に研ぎ澄まされた――

――殺意。

「殺す……！！！」

親友の鋭利な言葉と視線がメシアを射たのを口火に、望まれぬ戦いの火蓋が切られた。

先に動いたのはシャルルだった。手早く銃を水平に構えたかと思うと、黒曜石に類似した色を持つ金属がオールドローズの淡い光を帯びた。銃弾を生成したのだ。

シャルルが装填を完了した銃のトリガーを躊躇なく絞る寸前、メシアは銃口から直線に伸びる射線上から体を外した。小さな銃声と一緒に三つの銃口が火を吹き、殺意の凝縮体が宙を駆け抜ける。

撃ち出された弾丸は大気を貫き、背後の正門の横に聳え立つ壁を小さな円形に削り取った。

「なっ……」

その光景を視認した時、メシアは驚駭から声を漏らした。

壁にできた弾痕が、直列に九個も並んでいるのだ。サイズは拳銃弾よりも一回り小さいが、数が明らかに多い。しかし、弾痕を作ったのは間違いなくあの起源宝器。ということは、行程は解らないにしても、原理的には三つの銃口から九発の弾丸が射出されていることになる。

ルムガントのコンセプトが《一撃必殺》とするなら、あの起源宝器は《多撃必倒》。物量で敵を圧倒するタイプということか。なかなか厄介な代物だ。

メシアが素早く思考を巡らせている最中、順風と共にルネが真横を駆け抜けた。咄嗟に名を叫ぶと、彼女は剣の変換器を作動させながら「解っている」とだけ答え、シャルルに突進した。

中段に構えたルネの剣が閃き、横一文字に薙ぎ払われた。手加減しているとはいえ、そのスピードはメシアから見ても速い。ただの一般人なら回避は疎か防御すら儘ならないだろう。

しかし、シャルルの反応速度は驚異的なものだった。

頸部を狙った一撃を、発砲を終えたばかりの起源宝器で正確に弾いたのだ。二人が初対面時に軽く手合せしていた場に立ち会っていたので、彼の實力には大方の見当が付いていた。しかしそれでも、

その異常とも取れる反射神経はメシアとルネに一瞬の驚嘆を抱かせただろう。

「デルブルー卿!?」

そんな二人の内心を知る術もなく、シャルルは視界に忽然と姿を現したルネに驚きの声を漏らした。一瞬両眼を丸くし表情を変化させたが、それはすぐに真剣な面構えに一変する。

「投降して下さい。今ならまだ間に合います」

「黙れ、私はもう軍には戻らない」

「どうしてですか!? 貴方のような人が何故軍を……!」

「会ったばかりの民間人に何が分かる!? 軍上層部の実情も知らない人間に、私たちの苦悩が理解できるものか!」

討論を繰り広げながらも、ルネの攻撃がやむことはなかった。しかし、シャルルの凄まじい反応力によってその剣撃は幾度となく防がれ、未だ掠り傷すら負わせられていない。

——シャルル、今の君には僕らの気持ち首肯できないだろう。軍の裏事情を知らない者に納得できるほど、僕らの不満の源は世間に知れ渡っていない。

今は分かり合えない。瞼を閉じ心中でそう呟いた後、メシアは流し目で味方を一瞥しながら、凜呼たる態度で指示を出す。

「予定を早める。各員、撤退を開始。合流ポイントまで逃れる」

剣や変換器は全て馬車に乗せて運ばせた。見落としがないかを確認するために支部内に分散していた部隊は武器を持つてはいたが、その兵士たちは戦死はしていなくとも、シャルルの手によって戦闘不能状態に陥っている可能性が高い。

従って、現段階で武器を持つのはメシアとルネのみ。それ以外の者が戦線にいても盾ぐらいにしかない。ならば、残された兵を温存するためにもここは引くしかない。

そろそろ控えるべき使用量を思慮しながらも、生命維持を含む全ての活動に必要な精力を銃に注ぎ込む。高まる倦怠感と同時に、ルムガントが眩い赤に発光。装填完了の合図を期に、接近戦を続ける

二人の片方に照準を定める。

「ルネ、下がれ！」

もう片方の人間に退避を命じると、ルネが剣を勢いよく振り払いシャルルを後方に飛ばした。その隙に射線上を逃れ、準備完了のアイコンタクトが送られてくる。トリガーにかかる指に力が加わる。

——悪いが勝負は保留させてもらう。今回だけは、状況が状況だけに手が出せない。とはいえ、戦場ではもう二度と顔を合わせたくはないがな……。

すぐさま崩れた体勢を立て直そうとしているシャルルに向け、メシアは離別の言葉を言い放った。

「禿鷲、君とはこれでお別れだ」

直後、天地鳴動の爆音が轟き、放たれた銃弾がシャルルの足元の大地を貫いて砂塵を巻き上げた。勃然と発生した砂色の霧が戦場にベールをかける。その向こうから幾度も飛んでくる喚き声を無視し、メシアはルネと共に戦場から一目散に遁走した。

交錯する思惑（中編）（後書き）

次は後編で！　　と言った時期が懐かしく思えます。お久しぶりです。

本当は後編と一緒に纏めて載せるつもりだったのですが、文字数的にもきりが良かったので中編というかたちで先にあげることになりました。一ヶ月に一回更新つというのも少し遅い気がしますしね（汗）

近況としては、秋休みが終わって学校が始まったので、比較的忙しい毎日が戻ってきました。なので、今回の中編掲載はこれから忙しくなつて後編の掲載が遅れた場合の保険も兼ねていると思つてもらつても構わないです。実際そうですから（笑）

後編は本当に今から書き始める段階なので、どんなに早くても十日はかかると考えてます。どこで終わりにするかを明確に決めていないので、そこら辺も考えておかないと……。

十話完結という前提を立てて書くとは端折らないといけない場面が多くなるのですが、……何だかんだで意外と端折ってないんですよ。いや、今回は結構端折りましたけど。展開的に仕方ないことではありますが、ヒロインの登場を幾度となく渋ってきたのは否めませんし。

四話で登場させます！　とブログで公言してから結構経ちますが……ご覧の通り未だに出てきてません。……本当に登場するのかな、と思つているのはきつと作者も同じ。

交錯する思惑（後編）

7

無味乾燥な砂原の地に視線を落としながら、シャルルは行き場を失っていた感情を吐き捨てた。

晴れ晴れとしていた青空は次第に赤みを帯び、沈み始めた太陽が景色を橙に覆っている。昼間と比べると気温も若干低下したらしく、薄手の衣服では少し肌寒い。一度寒風が吹き抜けると、コートの襟に首を埋めながらぶるぶる震えてしまう。

体を丸めながらポケットに手をつ込み、落ち着きのない足取りで支部の正門を潜る。視界の両隅に広がる惨憺たる光景を直視する気にはなれず、胸中に突き刺さる心痛さを噛み締めるように瞼を閉じた。すると、夕焼けに染められたサンドベージュの地面から血腥い異臭が鼻を突いた。

悲惨な現場を離れても、頭に入った情報が当時の状況を形象化して表現する作業が全自動で行われ、心中の蟠りが消え去ることはなかった。それでもどうにか脳をフル回転させて処理を実行しながら、シャルルは荒野の坂道を下り始めた。

支部長の逝去、第二支部の陥落、デルブルー卿の反逆——たった数時間足らずで起こった出来事は余りにも多過ぎる。三つ目に至っては、その兆候が前々からあったのかもしれないが、それを知り得ないシャルルにとっては衝撃的な事件だった。

加えて、敵の戦力は侮れない。デルブルー卿がいるのもそうだが、最も注意すべきはあの仮面の人物……。性別はおそらく男性だろうが、肉声とはまた違った印象を受けた上に、ピエロマスクに不気味さを付け足したかのような血色の仮面が発する圧倒的存在感。トレヴィル少将殺害の犯人と思わしき人物だけに油断はできない。

しかし、自分の一挙一動によつては、この前途多難な状況下でも希望を見出せていた。いや、もしかすれば結果すらも変えられていたかもしれない……。無限に枝分かれするもう一つの結末が、シャルルに後悔の念を植え付けていた。

トレヴィル少将に鍵を託された後、開錠した地下室の中で発見した起源宝器^{オーバー}。この武器をもっと上手に扱えていれば、少将殺害の犯人をむざむざと逃がすこともなかった。

あの時は湧き上がる殺意が理性を侵食していたので、正直なところ自分がどのようにして起源宝器を扱ったのかは覚えていない。合理的な使い方は解っているのだが、肝心の実体験部分が断片的過ぎて、今では銃弾を生成することすら儘ならない状態だ。どうやら無我夢中で事に当たったのが災いしたらしい。

支部が高台に建造されているため、爪先上がりの坂路からでも街並みを一眸することができる。そこから見下ろした景色は普段と変わりなく見えたが、きつと現地では大混乱に陥っているのは間違いない。本来なら、失われた自分の行く末を心配すべきなのだろうが、不思議とそちらのほうに気懸かりでならなかった……。

そんな思考を巡らせる中、進行方向から馬蹄音が響いてきたのは、緩やかな傾斜面を半分ほど下った頃だった。

後尾に四角い黒箱を引き連れた馬が猛スピードで肉薄し、数メートル手前で停止した。間髪を容れずにぎいっという開閉音が鳴り、箱に取り付けられた片開き戸が開く。中から現れた真つ黒な人影が慌ただしく身を乗り出し、平常時よりも早口で声を発した。

「どうやら君は無事だったようだな、シャルル」
「アトラス……」

言葉終わりに安堵の息を吐いた友の姿は、現状況下でもどこか落ち着いて見えた。いや、彼の性格からして、必死に平静さを保とうとしているのかもしれない。軍人が持つ一種の矜持とも取れなくもない。

普段なら気にも留めない些細なことだ。しかし、その淡泊さは今

のシャルルには何故か途轍もなく癪に障った。現実を非現実に入れ替えることを脳内で意図も容易くできてしまう彼のことが、少し羨ましかったのかもしれない。

気付いた時には、アトラスとの距離は数十センチまで縮んでいた。力任せに胸倉を掴んで引き寄せる。予想外であろうその行動に動揺の色すら見せないアトラスの無動作振りには、シャルルの心内から湧き上がる謎の憤慨をさらに刺激した。ぎりっという歯の軋む音を立て、身体の奥底から怒号を飛ばす。

「お前……何処で油を売っていた!？」

軍服を掴んだのとは反対の手が瞬間的に握り締められ、アトラスの頬に猛スピードで吸い込まれそうになる。その過程でどうにか取り戻した理性を駆使したので、その場の勢いに任せて親友を殴打するという最悪の事態に発展することは免れたのだが……。

右ストレートが捉えようとしていた相手の形相を再び目にした時、シャルルは思わず愕然とした。

「……済まない」

顔を力なく後ろに反った彼の表情は沈鬱に満ちていた。輝きのない双眼を中心とした、全ての衝動を削ぎ落としたような表情からは、砂漠のオアシスが乾き切ったような印象を受ける。放った言葉からは精気が感じ取れない。

沈痛さが押し隠されているのは明確だった。開口一番の言葉からしてもそうだ。シャルルの無事を確認すると同時に、まるで無事を確認できなかった人物がいたような言い様……。それはつまり、彼が支部での惨劇を既知しているということになる。

それに東門の門衛と軽く挨拶を交わした時、確かアトラスが今日とは非番であると聞かされた。咄嗟にそのことを思い返したシャルルは、手の力を弱めてアトラスを解放した。

「……いや、俺のほうこそ……悪かった」

自分だけではないのだ、己の無力さを痛感したのは。アトラスもまた、支部不在という休暇が災いし、情報の取得に遅れが生じた。

その結果、現場に到着するよりも早く決着が付いてしまったのだ。支部の惨状が心に焼き付いているシャルルには、その辛さが痛いほど理解できる。

それから暫くの沈黙が流れた。何か言おうと必死に言葉を探し、それを見付けて声に出すまでには五分ほど時間を要した。

「……これからどうする？」

我ながら他愛のない問い掛けだった。重要なことではあるのだが、もう少し思慮分別を利かせた台詞がなかったのかと詰問したい気分だ。……まあ、なかったからこういう結果になっているわけだが。

「ムーセウムに行こう。あそこなら支部の人間も少なからずいる筈だ」

隣に立つアトラスが即座に答えた直後、その背後から聞き慣れない声が投げかけられてきた。

「——その必要はない」

氷塊が割れるような悪寒が過った。ぴくつと身を震わせ、体を捻り背後を見遣る。すると、先ほどまでいなかった筈の人影が複数個眼に入った。

数は十。服装は統一化されており、全員暗黒色の衣服を着用している。両腕に真っ赤な十字のライン、左胸にパンドラの国章が縫い付けられているところからして、着ている服は軍服に間違いない。

その内の一人——先ほどの声の主は、支部で一度見かけたことがある。確かロシュフォールという名の伯爵だ。手入れの行き届いた白銀の長い髪と独特な雰囲気特徴的だったのでよく覚えている。

ロシュフォールはシャルルをじろりと一瞥した後、何事もなかったかのように淡々と言った。低音域の声が空気に溶ける。

「ムーセウムは既に焼野原だ。住民たちは無事に逃げ延びているが、駐在地としてはもう使えない」

「そんなっ……………」

その言葉に一驚したのはシャルルだけではなかった。横に視線を向けると、数十秒前までは生ける屍のような状態だったアトラスも、

その憔悴した表情には驚きの色が付け加えられている。驚天動地の大事件となった第二支部陥落を知った時も、このような表情をしていたのだろうか。

困惑する二人を尻目に、ロシュフォールは言葉を続ける。

「それだけ、あのメシアと名乗った仮面の傀儡師の才覚は優れているということだろう。……しかし、今現在においてそれは看過しても構わない。反乱軍の追跡よりも優先すべき事象が生まれたのだから……」

あの仮面男の名前が思わぬところで耳に入り、表情が険しくなる。だが、次の瞬間にロシュフォールが取った行動に慄き、細めていた両眼は一瞬で見開かれた。

言葉終わりにロシュフォールが抜剣するという行動の後、追従するように軍人たちが腰の剣を抜き放ったのだ。彼らはそのまま素早い動きで四方を囲み、シャルルたちの退路を徹底的に絶つ包囲網を完成させた。

緊迫した状況下で、予想外の出来事に二人が反射的に横目で視線を合わせた瞬間、ロシュフォールが峻厳な態度を取り不正を取り締まるような口調で言った。

「その右手に握った物を黙って此方に差し出せ」

氷のように冷たい刃が突き刺さり、二人の思考を瞬間的に中止させた。その影響か、台詞の対象が誰を指しているのかを把握するまでに僅かな時間が流れた。

要するに、彼はこう言っているのだ。シャルルが持つ起源宝器を渡せ、と。

それを悟った時、シャルルは猛烈な反抗心を抱いた。トレヴィルから託されたこの武器を、誰であれ他者に手渡すなどという行為は絶対にしたくなかった。強大な力を有したことによる独占欲も多少なりにあるのかもしれない。

「何の真似ですか、これは……！」

突然の無礼極まりない行為を訴えるようにアトラスが吠えた。精

気の薄れている瞳の奥に微かな火が灯っているのが解る。感情を媒介に生み出された、反逆の焰が。彼にとっても、今回のロシュフォールの言動は納得のできるものではないようだ。

だが、ロシュフォールの威厳たる態度は変わらなかった。太陽と月が交代を終え、辺り一帯が闇に覆われていく中、トレヴィルの音域にも似た、しかしそれでいてどこか重圧的な声が響く。

「フェール卿。民間人に起源宝器を譲渡したのは君かね？　だとすれば、これは重大な軍紀違反だ。その武器は危険なのだ、民間人の所持など認められる筈がない。……捕縛しろ」

反抗は許されなかった。人数的には明らかに劣勢。幾ら起源宝器を持っているからといって、大義名分もない状態で下手に手を出せばアトラスにまで危害が及ぶ。実力的に言えば正面を切って対立しても問題ないかもしれないが、アトラスが万全の状態でないのは一目瞭然。それよりも、反逆の代償によって彼が地位を失う恐れが懸念された。

例え自身が多大なリスクを背負ったとしても、それだけは何としても阻止しなくてはならない。彼が十年もの歳月を費やして築き上げてきたものを、こんな些細なことで崩落させるわけにはいかない。起源宝器を渡しさえすれば、それが回避できる。シャルルの脳裏にはその一心しかなく、独占欲など既に失われていた。

結局、逆らえば命すら奪いかねない物言いを前に、二人は抗う術を見出せず従う他に道はなかった。

制止しようとするアトラスを振り切り、シャルルは不可視な光明の道を進むように足を踏み出す。言われるがまま起源宝器を差し出すと、ロシュフォールがそれを少しばかり乱暴な手付きで奪い取った。それを懷に仕舞うまでの間に次の指示が出され、二人はアトラスが乗ってきた馬車の黒箱に放り込まれた。続いて監視役として乗り込んできたロシュフォールの命により、黒染めのキャリッジは本部に進路を向けた。

馬車の中から見た空には、まるでシャルルの心を映し出したよう

に暗澹とした雲が漂っていた。

長旅の末、城塞都市の中心地に到着したのは、移動を開始してから三度目の日没を迎えた頃だった。

アトラスが停止した馬車から降りると、雲上より注がれる残照が辺りを仄かな紫に彩っていた。円心に近付くほど人氣が薄れていく都市構造からして、周辺を彷徨く人数は驚くほどに少ない。過去に慣れ親しんだこの閑散とした雰囲気も今では僅かな新鮮味を感じ、殷賑を極めていた第二支部とはまた違った異質さを感じる。

視界の正面には、層を積み重ねた円柱型の建物が聳え立っている。国軍本部だ。頭頂に取り付けられた、交差する二本の剣の接点にフルール・ド・リスを添えた国旗が翻る様だけはいつ見ても壮麗に見える。その上の屋上から見下ろす街並みは幻想的で、燦爛たる世界が広がっている。

数多の軍人志願者が勤務を熱望する聖地。それでいて、何年経っても払拭されぬ不正成分の根幹を築き上げた、諸悪の根源。本部の実状を知悉している身としては、ここが志願者たちの思うほど好評を博する理想郷でないことがよく解る。今のアトラスにとつては、過大評価を与えていた過去の自分を譴責したくなるほどの腐敗さだ。約二年振り目にする……というわけではないが、パンドラ最大級の要塞を前に複雑な心境を抱かずにはいらなかった。私怨の猛火と沈鬱の氷雪が心中を二分し、それにより感情が周期的に変化していく。回復した疲労感が復帰してきそうな鬱屈した気分が全身を膜で覆っていく。

——全く、嫌なかたちで帰ってきたものだ……。

アトラスでもメシアでもない、第三者の思惑によって強制的に帰還させられたお蔭で、脳内で組み立てていた計画には大幅な修正が要される。それに加えて処理すべき厄介事が増えたので、暫くの間

心奥は憂悶のオンパレードだろう。

先導するロシュフォールを大人げなく追い抜き先頭に進み出て、アトラスは大仰極まる孤城の巨大な鉄扉を真つ先に通り抜けた。

眼界にまず飛び込んできたのは、青天白日に眺める雪景色にも似た、煌びやかな朱色にライトアップされた雪白の空間だった。床や内壁に留まらず、左右の奥隅に聳立する螺旋階段等の設置物までも純白に染め上げた広場は、初めて訪れた者には少し奇怪な印象を受けるかもしれない。その中を徘徊する無数の黒影が目に入れば尚更だ。

振り向くと、同行者で唯一の初訪問者であるシャルルが、一人口をぽかーんと開けながら頭を右往左往させていた。やはり田舎育ちには刺激的な場所なのだろう。彼ほどではないが、アトラスもこの空間に初めて足を踏み入れた時は大いに驚いたものだ。とはいえ、呆然と視線を彷徨わせる彼の姿を見ると、あの時表情を変えずにいられただけでも一得だったのかもしれない。

過去と現在を織り交ぜながら思考を巡らせ、私話や笑声が飛び交う空間を閉眼して歩く。すると、前方から聞き慣れた高声が耳朶に触れた。

「アトラス！」

反射的に開眼して正面を見据えると、此方に接近してくる一人の姿を捉えた。

真つ直ぐに伸びた長髪。豪勢とは懸け離れた薄手のワンピース。年齢はシャルルと同じ筈だが、外見的特徴は二年前と比べても変わらず幼気さが残っている。あどけない少女のような容姿が、天に吊り下がるシャンデリアより降り注ぐ落日の如き光を浴びて妖艶に輝いている。

第二支部勤務になってからも何度か本部を訪れていたが、その際彼女にはあまり顔を見せに行けなかった。——いや、行かなかっただけなのかもしれない。約束こそしていないにせよ、会う機会は幾らでもあったのだから。

久闊を詫びるべきかどうか一瞬だけ逡巡したものの、被り慣れた仮面が自動的に装着され、無造作な笑みが口元に浮かんだ。

「……久方振りですね、シェリー」

理想的な役作りというのは、我ながら疎ましくも思う。意識を撥ね除けて仮面が自発的にオンオフの切り替えをし始めたのはもう何年前の話になるだろう。歳月を重ねて成長した仮面は、徐々に所有者の下を離れようとしている。まるで小鳥が親元を離れ巣立っていくかのように――。

そんなアトラスの胸中を知る由も無く、眼前の少女は走り難そうな靴で地を蹴って近付いてくる。最初に表れていた驚愕が安堵に染め変えられ、心なしか嬉しそうだ。背中で揺れる金髪が残像を描きながら煌めき、それは女神が夜空に星々を鏤めているようにも思えた。

シェリーは数十センチまで肉薄しても減速することなく、そのまま身を委ねるように軽く跳躍した。大きく広げられた両手がアトラスの視界に展開される。

咄嗟に腕を小さく開いて捕球体勢ならぬ捕人体勢を取り、そのすぐ後に飛び込んできた少女の体を抱き留めた。小柄な体躯が腕の中に収まる。瞬間的に腹部の辺りに仄かな柔らかさが感じられたが、それを追窮してしまつたらきつと平常心を保てなくなる。謎は謎のままのほうがいい時だつてある。ここは小さな疑問など等閑視して次に進むのがベストだろう――。

「無事だったのね、良かった……」

胸の付近で囁いたシェリーが体から遠ざかつたかと思うと、今度は真面目な――それにしてはどこか欣然としたものを感じる――表情でアトラスの上半身をぺたぺたと触り始めた。どうやら負傷箇所がないかを調べているようだが……これではまるで身体検査だ。僕は容疑者か何かか、と思わず心中で愚痴を零してしまう。

「怪我などしていませんから、人の体を藪から棒に叩かないでください」

「もう、心配した身にもなつてよ。わたしの熱い抱擁を受けたからって自分だけ満悦に浸ってるようじゃダメだからね」

「なっ……」

彼女の言葉に呼応するかのように、先ほどの謎の感触が脳裏に蘇ってきた。そして勝手に謎を解き明かしていく脳の処理活動に動揺し、内心慌てつつも作業を強制的に中断させる。その過程で両眼が閉じ、羞恥心から顔を俯ける。

「ねえ、何か顔赤くない？」

そこを透かさず突いてくる言動は実に狡猾と言えるだろうが、最初からこうなることを想定できるほど彼女はそこまで計算型ではない。それ故に、毎度のことながら目を瞑らざるを得ないのが難点となっている。

《護衛役と姫君》という最初の関係性が問題だったのかもしれない。あの時から、この人は非常に扱い辛かった。普段は他者を嘲弄する側に属する人間なだけに、こうして弄られる側に一転すると複雑な気持ちになる。

「……気のせいです」

咳払いを挿みながらそう言いつつも、脊髓反射の如く発動した危機回避能力が彼女と視線を合わせないように顔を背けさせた。本当に紅潮していたら弁解の余地がないので、この判断は間違っていないだろう。

通常なら例え軍人であろうと事務的な会話で留まるのだが、どういう縁か彼女とはこうして親しげに対話することができている。身分の差から考えても、皇女や姫君などといった仰々しい呼び方をせねばならない。いや、それが普通なのだ。

護衛役に就任した当初はアトラスもそう呼んでいたが、それを良しとしなかった彼女に『次からはキチンと名前で呼ぶように』と説教されて以来、名前で呼ぶことを習慣化させられたのである。数年の内に呼び間違える度に訂正されれば、それは嫌でも覚えるものだ。『姫君、それにフェール卿。私は先を急ぎますので、ここで失礼し

ます。……行こうか」

それからもシェリーと立ち話を続けていると、思わぬ人物から横槍が飛んできた。どうやら何気ない会話は予想以上に時間を浪費していたらしい。

ロシユフォールは言葉の末尾で横に立つシャルルに声をかけ、悠々たる面持ちで本部の上階を目指して歩いていった。その真後ろを追行する、白でも黒でもない色を纏った佻しげな後ろ姿に二人分の視線が浴びせられる。

周囲の空気が急に張り詰めたものに変貌した気がした。

本来なら止めるべきなのかもしれない。親友のことを思うのならば……。だが、軍人が私情を持ち出すなどナンセンス極まりない行い。加えて、下手に口論して問題を大きくするわけにもいかない。その代償として此方にデメリットが降り懸かる羽目になれば、計画にも滞りが生まれてしまう。

計画に支障を来さず、シャルルの身柄も救出する最良策。まだ手札が完全に失われたわけではない。シャルルを救うチャンスは必ず存在する。そして、勝負時は今ではない。

「あの人……、わたしと同じ年ぐらいに見えたけど、一般人よね。軍服も着ていないし。……何かあったの？」

何も知らない少女が、胸中に浮上してきた疑問を素直に投げかけてきた。その表情には不吉の兆候を感じ取ったかのような不安が滲み出ている。

対象人物が誰なのかは考えるまでもなく解った。唐突に重量感を増した口が自発的に閉じ、言葉が暗黒の彼方に淀んでいく。下唇を強く噛み、苦難の闇に惑う心境の中で思考を夢中で働かせ、脳内に積み上げられた言葉の辞書から適切なものを懸命に探し求めた。

十数秒の時を経てどうにか口を開き、声にならない声のポリウムを必死に上げて言葉を発する。

「彼は……僕の友人です。そして、近日中に開廷される軍法裁判にかけられます……」

自分でも驚くほどに乾いた声が、重々しく大気に溶けていった。

交錯する思惑（後編）（後書き）

三分割した四話もこれで漸く終了となります。そして、ヒロインが最後の最後で登場するという結果を導き出しました。もっと早く出せてれば良かったな、と思っっているのはここだけの話。

次の話では、遂にこの小説が裁判物に！——なることはないです、はい。あってもそれっぽいや雰囲気を出す程度でしょう。まだ書いてないので何とも言えませんが。

何と言っても知識量不足が否めないなので、情報をもとに想像の域でしかものを書くことができないんですよね。いや、まあそれが普通かもしれませんが、体験できるものはなるべく体験しておきたいな、という願望もあるわけです。……したくないものも幾らかありますが。

とりあえず、次話も何分割かして掲載しようと思っているのでよろしく願います。

軍法裁判は、文字通り《軍の定めた法律によって行われる裁判》だ。

その対象は軍人だけに留まらず、国民全員が対象者となる。司法権を軍部が掌握しているため、本来裁判所が下す判決も軍が執り行う。会議施設を最高裁判所として代用するような国だ、最早言わずもならだろう。言い換えるなら、軍法はパンドラの国法そのものなのだ。

法廷となる会場は、異国の円形闘技場を真似て作ったもので、裁判以外には会議で頻繁に使用する。中央の空間を無数の座席で取り囲むようにできており、弓形の高低差を利用して裁判時に被疑者と軍人の上下関係の確立を図っている。

加えて、その構造には理由がもう一つだけある。それは出席者を平民と貴族に二分するためだ。

佐官以上が招集対象となる会議や裁判では、貴族と平民が向かい合う形で席に座る。今回もそれに例外はなく、爵位を持つアトラスは貴族席に着いた。眼前に映る光景は実に悲痛なもので、平民側が圧倒的に少ない状態になっている。

中でも問題なのが、意思決定を図る際に多数決を採用していることだ。人数差がある以上、大統領の息が掛かる貴族勢に多数決での勝利はまずない。

とはいえ、それは国内制度の改正案に関する会議を行った場合の話だ。今回は裁判。しかも罪人として咎められるのは民間人だ。総統にとっては雑事に過ぎないであろう案件だけに、下工作を施していない可能性が高い。ならば、此方にもまだ勝機はある。そう思っ

ていたのだが――。

「君は民間人でありながら軍最重要機密を無断で奪取、しかもそれを反乱者との戦闘に使用した。……間違いないな？」

「……はい」

今回の裁判の進行スピードは通常と比べて異常に早かった。

当初こそ激しい舌戦が繰り広げられそうになったが、進行役が一方的な物言いで話を進めていくので、現状では既に反論のしようがなくなっている。しかもその進行役というのが、馬車内でシャルルに散々安心感を与えるような言葉を連発していたロシュフォールとくれば、最早この裁判自体に周到性を感じざるを得ない。

最初から仕組まれていた。重要機密を知ってしまった民間人を野放しにするほど、軍は甘くない。ロシュフォールが馬車の中で口走っていた《公平な裁判》など、シャルルの不安を打ち消すための虚言に過ぎなかったのだ。奴ら貴族――もしかすれば平民側も含めた出席者たち――にとつては、シャルルを罪人に仕立て上げさえすれば満足なのかもしれない。それで面倒事が一つ楽に片付くのなら……。特に貴族側はそういう人間たちだ。

同じ貴族席に座る者たちの中で不満を抱いていたのは、おそらくアトラスだけだろう。徐々に劣勢に陥る友を前にすれば、表情が歪んでいくのは自然の摂理と言っても過言ではない。それが自分の望んでいた展開でなければ尚更だ。

――不味い。このまま裁判が進めば、シャルルが法によって殺されてしまう。

配布された手元の資料に目を落しながら、アトラスは己の不甲斐なさに煩悶した。思わず握り締めた資料ごと右手を打ち付けそうなり、拳により一層の力を加えるだけに留める。毒突きそうになった口は咄嗟に唇を噛んで押さえ付けた。

何か打つ手はないのか。こういう時のために、この数日もの間策を練り続けたのではないのか。それとも、自分が考え出してきたものは、単純な罠に嵌った程度で消えてしまうような、脆い手札でし

かなかったとでも言うのか。だとすれば、自分はただの能無しではないか……。

遂に自らを叱責し始めたアトラスの脳裏に、もう一つの姿である仮面男の思考が不意に入り込み、冷淡さが染み付いた声が木霊した。

——だが、彼は敵の切り札になり得るかもしれぬ存在だ。生かしておくにはあまりにも危険過ぎる。このまま何もせず見過ごせば、それが勝手に死んでくれる好機だ。沈黙を貫くほうが、自分にとって有益であることは解り切っていることだろう——。

そうだ、頭では疾うの昔に理解している。自分が本来取るべき行動が。合理的に判断するなら、今の状況のまま進んでくれたほうが都合が良いのだ。そんなことは解っている。最良の選択肢は既に見えている筈なのに……何だ、この苦痛は。何故、こんなにも心が締め付けられるような気分になる……！？

混在する心情が複雑に入り乱れる中、周囲から友に向け注がれる無慈悲な視線に我慢の限界を感じたアトラスは、その重い腰を上げ行動を起こした。

「異議を唱えます」

誰もが事態に目を瞑り黙認する中でただ一人、アトラスは徹底抗戦の構えを取った。

「アトラス……」

藁にも縋るように弱々しくなった友の小さな声が耳に届いた。

——何をやっているんだ、僕は。この判断は今後を考えればケアレスミスでは済まされない、実にナンセンスなものだと知りながら……。

体は自発的に動いた。まるで本能に突き動かされるように。だとすれば、過程はどうであれ、それが自身の出した結論ということになる。ならば、今は己の判断を信じ、最後まで貫き通すのも悪くない。眼下で立ち尽くしている、あの青年が嘗てそうであったように……。

友人が死ぬのを黙って見過ごせるわけがない。そんなものは友情

とは言わない。優先順位を間違っているのは否めないが、この選択に不思議と後悔は感じていない。馬車の中で聞いた遺言が少なからず関係しているのかもしれない。

枝分かれする未来の中で、この選択こそが自分の最も後悔しない道。彼方に思い描く故人に告げるように、アトラスは静かに瞼を閉じた。

そして再び両眼を開いた時、瞳の奥に確かな覚悟が瞬いた気がした。

「書類には『箱は地下室に隠されていた』と記載されています。そして、彼はその部屋の鍵を所持しており、それは亡きトレヴィル支部長が託した物であると」

配布された紙の束を手を持ち上げ、一番上の物の一箇所を指差す。そこには言葉通りの文字が確かに書かれている。とはいえ、それは罪人候補者扱いを受けているシャルルの主張がそのまま書いてるだけなので、信憑性は薄いと思われるかもしれない。

その思惑通り、ロシュフォールは双眼を鋭く細め、腰に携えた剣の如く刺々しい声を発した。

「君は罪人の話を信じるというのか？」

シャルルを揶揄するかのようない振りに、アトラスは眉を顰めた。不快感から生じた一つの感情が心底から急速に込み上げてくる。

——ふざけるな。信じる・信じないの問題じゃない。僕はただ、友人が罪もないのに犯罪者扱いされるのを看過できないだけだ。

相手の対応に憤慨を覚え、普段は平穏を保っている心の海がマグマのように沸騰する。噴火前の火山の如く燃え滾る感情が含まれたのか、声に出した言葉は自分でも少し威圧的に思えた。

「彼を処分したい気持ちは分かります。ですが、必ずしもそうしなければならぬわけではありません」

泰然とした振る舞いで口火を切ったアトラスは、続け様に場の雰囲気さらに騒然とさせる言葉を言い放つ。

「今回の裁判の判断材料は、彼が我々にとって有益かそうでないか

の問題ですよね？——でしたら話は簡単だ。彼と決闘をすれば良いじゃないですか、三銃士のリーダーであるこの僕が」

その実践躬行を宣言する言行に、周囲の連中が挙って目を丸くしたのが手に取るように解った。それに構うことなく、アトラスは言葉が続ける。

「僕より実力が遥かに劣っていれば殺します。それで満足でしょう？」

場の空気と一緒に時間までもが凍り付いた気がした。会場内の誰もが言葉を失い、見渡した景色には啞然とした表情が同じように並んでいる。

手札から出した一枚の解決策。実力行使とは我ながら愚策だが、手段としては手っ取り早い上に、二人の性に合っている。貧民窟で育った身としては、自らを苦しめる法ではなく、己の信じる拳をぶつけ合うかたちで片を付けていた。例えば中心都市での暮らしが続いていようと、染み付いた性根はそう簡単には変わらない。

問題は、この案が承認されるかどうかだ。多数決で決定する以上多くの賛同を得なくては実行には移せない。アトラスに採決を払い除けるだけの権力があれば話は別なのだが……。とはいえ、仮に承認されなかった場合は更なる言葉を積み上げるだけだ。

——さあ、この止まった歯車共はどう動く……。

アトラスが周囲に目を配らせる中、進行役の男の口元が僅かに綻びた。一瞬の微かな笑声が大気に混じる。

「……良いだろう。決闘を許可する」

驚愕的な発言に、会場が響めき始めた。アトラスでさえ、その対応には驚きの色を隠せなかったほどだ。

爵位を持っているとはいえ、ロシユフォールの軍内地位は大尉。決闘を許可できるだけの権限はない。それどころか、裁判の進行役を務めていること自体が不思議に思えるほどだ。それを承知の上で発言したのだとしたら、困った道化師か、もしくはただの魯鈍な人物か……。

アトラスの抱く疑問を代弁するかのように、貴族席から立ち上がった一人の軍人が、怒り狂った声を撒き散らす。

「戯言も程々にしたまえ、ロシュフォール卿！ 幾ら伯爵とはいえ、単独での判決は理に反するぞ！」

アトラスは机に両手を付いたまま、次の言葉を待ち侘びた。目付きが自然と鋭くなる。

あの貴族の言う通りだ。狂言にしては明らかに度が過ぎている。仮にロシュフォールに何の策もないのだとしたら、裁判後に厳重注意、最悪の場合は爵位剥奪の処罰を受ける可能性だってある。そこまでして彼にシャルルを助ける義理などない筈だ。

——何を企んでいるかは知らないが……どう出るつもりだ、ロシュフォール。

緊迫した状況の中、ゆつくりと開かれたロシュフォールの口から、更なる驚愕が会場に注ぎ込まれる。

「これは私の意思ではない。決闘に関しては、マーヴィス公爵より事前許可が下りている。その証明として、こうして書面も預かっているのだな」

ロシュフォールの口からこの場にいない者の名が不意に飛び出たが、その名を聞いた途端の周囲の反応は先ほどの決闘許可発言を上回る轟然さを含んでいた。書面を提示するロシュフォールに、食い入るような視線が集まる。

ピアーエリア

マーヴィス公爵は首都の貴族地域を治める頭株であり、軍部では《パンドラの頭脳》として名を轟かす有名な軍人だ。亡きトレヴィイルとは友好的な関係を築いていたらしく、その縁もあってかアトラスも護衛役で本部にいた頃に何度か話をしたことがある。

前々からどこか自分に似たものを感じるとは思っていたが……、まさか此方の思考を予想した上でそれを巧みに誘導してくるとは……してやられたな。だとすれば、これがロシュフォールの言った《公平な裁判》の真意ということか。味な事をしてくれる。

本部では実質的ナンバー2の実績を誇る人物だけに、その発言力

も大きい。普段は疎ましく思う、例外を生み出す特権も、こういう時には有難味を感じてしまうのが玉に瑕だ。

マーヴィスには後で何を請求されるか解ったものではないが、この助力は正直有難い。こういう変わり種がいるから、貴族を一括りに悪だと言えないのだ。

たった一枚の書面を提示されただけで、周囲の怒声は静まり返った。先ほど声を荒げていた貴族も、釈然としない表情を見せつつも黙って席に腰を下ろしている。

多数決は一人の人間の思惑によって強行採決された。思わぬ加勢にアトラスは穏やかな一笑を向け、席を離れて深紅の絨毯が敷かれた段差を下りていく。目指す場所は中央の円形空間、そこで待つ友のもとだ。

その途中で不意に交差した視線に、アトラスは無声の言葉に乗せる。

——君を死なせはしない。選択肢が殺害以外にないのだとすれば、僕が新たな道を開拓してみせる。君となら、例え敵対関係の状況下でも、きつと解り合える筈だから……。

確信にも似た意志を抱えながら、アトラスは乾坤一擲の大博打のギャンブル舞台へ足を進めた。その手に握る剣は、無二の親友を救うために――
|。

意志と使命（前編）（後書き）

約一週間振りの更新……になりますかね、お久しぶりです。

今回の話も、おそらく三分割することになるかと思います。展開的にそのほうが良さ気なので。

前回登場したヒロインが早くも蚊帳の外に置かれてしまいました。後半で一応出てくる予定なので安心してください。作者的には、もう一人の女性キャラが疎外されてる気がしてならないですけどね……仕方ない、彼女はヒロインじゃないんだ、許してくれ……（汗）次の更新では、二人の初めての本格対決ですね。胸も筆も踊ります。できるだけ早く更新したいものです。

意志と使命（中編）

「悪いな。今の僕にはこれくらいの助け船しか……」

「十分だ」

簡易的に話を済ませ、二人は距離を取って所定位置に付いた。シャルルが手渡された真剣をどこか複雑な表情で見詰める中、仲介役を買って出たロシユフォールが手短かに説明する。

「この硬貨が地面に落ちた瞬間を決闘開始の合図とする」

親指と人差し指で掴まれた銀色の貨幣をそれぞれ目で確認し、二人はほぼ同時に頷いた。

公明正大に事を行うため、アトラスは自身の剣から変換器を取り出し、軍服のポケットに押し込んだ。相手の武器に同じ物が装着されていない状況下で、此方だけアタッチメントを使用するわけにもいかない。決闘が公平でなければ意味をなさない以上、この赤い結晶の出番は無に等しい。

アトラスがその作業を行っている間、シャルルは胸中に巢食う感情を捨て去るように、凝視していた剣を斜めに振った。空気を斬り裂く微小音が、闘技の場に虚しさを残しながら溶け込んでいく。それが一種の決意表明にでもなったのか、此方に視線を向けた男の双眼が狩り直前の大鷲のように鋭くぎらついている。どうやら腹を決めたらしい。

相手から放出される覚悟を感じ取ったアトラスは、事前確認をするように淡々と言った。

「解っているとは思うが容赦はしない。すれば僕の首が飛んでしまうからな」

少しばかり諧謔的な物言いをしたつもりだったが、それに引つ付くようにして生まれた微笑は豪く乾いたものだった。

下手に加減をして万が一にでもそれが見破られれば、今度はアトラスが裁判にかけられる。そうなれば、目に見えた出来レースを行

った罰として斬首されるのがオチだ。この決闘は、言わばハイリスクハイリターン。成功すればどちらも生き残り、失敗すればどちらか——最悪の場合は共倒れになる。

小さな光明に付随する、大きな不安。微笑の乾きはそこに所以するのかもしれない。——とはいえ、この状況は自らの意思で選んだ道だ。冥土に落ちた後で後悔しないためにも、今は全力で事に当たるのみ。

アトラスは自然な動作で半身体勢になりながら剣を胸元に引き寄せ、垂直に構えた。対するシャルルは剣を中段に構え、右足を一歩前に出して不格好な半身の姿勢を取っている。周囲の視線や喧騒は感覚からゆっくり遮断されていき、眼前の相手に意識を集中させる。

次の瞬間、ロシユフォールの手に収まっていた銀貨が親指で打ち上げられ、銀の円盤が空中で閃いた。落下予測時間を割り出すと同時に体内時計によるカウントダウンが始まる。重力に従って硬貨は見る見る内に落下していき、やがて決闘開始を示す鐘の音として地面に接し、甲高い金属音を響かせた。

それを合図に、アトラスは素早く地面を蹴った。猛然たる勢いで約五メートルの距離を駆け抜ける。対して、相手はその場から一歩も動こうとせず、既に受け身の構えに入っている。

——先攻を譲るとは、相変わらず献身的だな。それだけ己の反応力に絶対の自信があると見える。攻撃を巧みに躲し、その直後に生まれる一瞬の隙を突く。それが君の戦法というわけか。

ならば試してみると良い。この突きが躲せるかどうか……。完全に勝負心に火が付いたアトラスは、挑発的な薄ら笑いを浮かべながら剣を力強く握った。攻撃可能範囲に到達したのを確認し、流星の如きスピードで右手を突き出す。鋭い闘気を帯びた刃が大気を裂き、相手に吸い込まれるように加速していく。

その剣尖がシャルルの頭部を捉える寸前、アトラスは数日前と同じ驚異的な光景を目にした。

まるで斥力で遠退いていくかのように、剣の照準がぶれたのだ。

それが相手の剣が超高速で迫る刃を正確にパリイしたことによるものだ。と気付いた時には、既に体を捻じって一回転したシャルルが反撃の構えを取っていた。

凄まじい危機感を抱きはしたが、相手の攻撃動作が刺撃ではなく斬撃だったのが唯一の救いだった。回転運動によって勢いに乗ったシャルルの剣がさらに速度を上げ、横一直線の光を描いた。アトラスは咄嗟に回避を諦め、宙に流れた剣の向きを手首で強引に変え、体を左に半回転させる。

重たい衝撃が全身を駆け巡ると同時に、打ち合った二つの剣が高らかな衝突音を響かせた。湧き上がった観衆の声が聴覚を刺激し、その騒然とした雰囲気のアトラスにも伝染する。

電光石火の如き剣速と、標的を外さない的確な刺突。それらを売りとしているアトラスにとっては、これほどまでに見事に防がれ、しかも一度の反撃を許してしまったとなると、悔しさを感じずにはいられなかった。相変わらず常人の域を超越した、桁外れな反応速度だ。――面白い。

次第に燃え広がる勝負への執着が、己のリミッターを取り払った気がした。戦争時には決して感じたことのない、闘争心を爆発的に膨らませたような高揚感が全身を満たしていく。

「今のは危なかったぞ。本気で仕留める気だったろ？」

犬歯を剥き出しにして楽し気な口調で言う友の姿に、アトラスは思わず苦笑した。渾身の力が籠った突きを平然と防御してのけた者の発言とはとても思えない。

「馬鹿正直に八百長をするわけにはいかないからな。それに、手は抜かないと言った筈だ」

「おいおい、余興にしては過ぎた冗談だぜ。どこまで観客ギャラーを沸かすつもりだ？」

「さあ……僕が満足するまでかな」

とはいえ、どうやら彼も高鳴る鼓動を抑えられないようだ。表情には愉悦の文字がそのまま書かれていても不思議でないくらい光

に満ちている。裁判中とは真逆と言っても良い。好敵手との対戦に嬉しさを隠しきれないとは……つくづく下らないところばかり似ているようだ。

言葉終わりに剣を瞬時に振り払うと、シャルルは後方に飛び退いて距離を取った。

自らの世界に入り切ったアトラスの視界には、最早眼前の好敵手以外は全て障害物にしか見えない。先ほどまで必死で巡らせていた思考も、今となっては勝負の些細な口実にさえ思えてきた。

「腸が煮えくり返りそうな台詞だな。絶対に吠え面をかかせてやる……！」

シャルルの荒っぽい言葉が大気に溶ける。一抹の戦慄。睨み合う二人が一時的に沈黙すると、今度はそれが観客たちに伝染した。唾を飲み込む音さえ聞こえそうな静寂が流れた。

不敵な笑みを交え、二人は同時に地面を蹴った。喜色を露わにした相手の表情を見る限り、この決闘が命懸けのものであることなど完全に忘れ去られている。とはいえ、それはアトラスも同じだ。純粹な勝利への執着。最早二人が剣を交える理由は、それだけで十分だった。

上段から猛襲する鈍色の剣を受け流し、僅かな間隙を逃さず刺突を繰り出す。シャルルは間一髪の間で距離を迫り来る剣の横っ腹を叩き、軌道をずらした。どうやら偶然ではないらしい。彼の双眼には、間違はなく剣の軌道が見えている。それを理解してからは、気付けば考えよりも先に体が動き、攻撃と回避、時には防御という一定化された行動を何度も繰り返した。

激しい剣戟が繰り広げられる中、アトラスはこれまでの相手の動きを分析し始めた。

剣術を満足に習っていないとはいえ、シャルルは剣が大振りですぐ調過ぎる。真剣さは伝わってくるが、先を読まず我武者羅に行動しているのが丸分かりだ。それでも彼がアトラスと対等に渡り合えているのは、計り知れないポテンシャルもそうだろうが、やはりあの

驚異的な超速反応力が物を言っているのだろう。

未だ偶発的な擦過傷も負っていないが、長期戦を仕掛けて勝てる自信はない。両者の体力を客観的に比べれば、此方が圧倒的に不利なことは何年も前から解り切っている。ならば……残された勝利への手段は一つしかない。

シャルルの剣が視界の左側から迫った瞬間、アトラスは意を決して勝負に出た。姿勢を崩さぬまま突きของ構えを取り、突進を続ける。真横に切り払われた鉄の塊を剣で受け止め、アトラスは相手の懷に飛び込んだ。刀身を滑らせながら加速した剣を、そのまま突き出す。友の身を案じてか、剣の軌道は頭部ではなく左肩に伸びた。擦過音の消滅に代わり、一点の光が瞬間的に明滅した。

——これで試合終了だ……！
チェックメイト

勝利を確信したアトラスの剣の尖端が左肩を突き刺そうとした——その瞬間、アトラスは一瞬の痛みを感じると同時に二度目の驚愕を味わった。

切っ先がまたしても軌道を外れ、左肩の上の空を裂いたのだ。あり得ない光景に眼を丸くしつつも、反射的に痛みの走った右腕に視線を向ける。すると、丁度肘の真下にシャルルの広げられた左手が構えていた。どうやら平手打ちで強引に軌道を変えたいらしい。

反射的に飛び出た力技だろうが、アトラスの意表を突くだけの効果はあった。敵ながら見事な対応力だとすら思う。

予想外の攻撃を受けた時点で、勝負の行く末は見えていた。続け様に剣撃を受けたアトラスの剣が吹き飛ばされ、宙で虚しい音を立てながら数回転し、地面に勢い良く突き刺さった。結末を悟って咄嗟に顔を俯けると、口元が自然と綻びたのが解った。

そして勝敗が決して数十分後に裁判は閉廷し、シャルルは晴れて無罪放免の身となった。

意志と使命（中編）（後書き）

自らの更新ペースの早さに僅かな驚きを抱きつつ、同時に睡眠不足を嘆いている今日この頃……。どうも、数日振りです（きつこの言葉はそう何度も使わない——いや、使えない）

今週が授業のない週なので、執筆に割く時間が多めに取れて、普段以上に作業が捗ります。そして、その分寝てません。一日の睡眠時間が六時間を下回ったのは高校生の時以来です。

おそらく、次の更新で《意志と使命》の話が終わります。少しばかり端折ったのもあってか、この調子だと今までで最少の文字数になりそうです。なので、少しばかり遊びを入れて文字数を増やそうと思います。いや、正直に言えばただ遊びたいだけかもしれませんけどね。

真面目な話ばかり書いてると、少しばかり息抜きをしたくなるものです。……今回ので十分息抜きしていると言われればそうなのですが……もうちょっと……がつつりとね……。

とはいっても、何だかんだで半分は真面目な話になりそうです（汗）

エテルニタス。それは《永遠の都》の異名を持つ首都の名だ。

首都には同心円状に三つの地域が存在し、それは外側から《平民^{コモン}地域^{エリア}》、《貴族地域^{ピアエリア}》、《軍部地域^{ミリタリーエリア}》と呼ばれている。この地域分けは国が施したわけではなく、軍部地域の設立を発端として、引き続いて貴族たちが自らの地域を築いてしまった結果、残った平民が自動的に中央から最も離れた地域に追い遣られている。ピラミッド型階級の典型例は国の中心に堂々と存在するというわけだ。

裁判が終了して数時間。薄暮の迫る空に垂れ込める雲が残照を帯び、傲慢の権化とも思える貴族街に僅かな光を注いでいる。装飾華美な屋敷群や入念に舗装された街路、特に周辺を煌びやかな格好で歩き回る貴族たちはいっ見ても不気味な印象を受けてしまう。

先ほど平民絡みで一悶着を起こした貴族も同様に派手な服装で身を飾っていたが、余分な金銭があるならスラム街に分け与えてもらいたいぐらいだ。

アトラスは貴族地域を南に向かって歩き、邸宅街では小さ目な屋敷を訪れた。ルネと待ち合わせをした場所だ。

この屋敷はトレヴィルと三銃士で資金を少しずつ出し合って購入したものであり、本部を訪れた際に寝泊まり場として活用していた。今となっては密会場所になりつつあるが。

スレートグレーの屋根が特徴的な屋敷を前に哀愁を帯びた懐かしさに酔い痴れながら、アトラスは両開きの扉を開いて中に踏み入った。周囲を見渡してブロンドヘアの人影を探す。

暫く屋敷内を軽く彷徨いて人探しを続行したものの、ルネの姿は見当たらなかった。名を呼んでも応答がない。てっきりお気に入り

の揺り椅子に腰掛けて神書でも朗読していると思っただけに、少し意外だった。瑣末な疑問が頭を過り、無意識的に首を傾げる。

部屋の柱時計の示す時刻が確かなら、普段の彼女なら疾うに到着している頃の筈。時間に煩い人物が遅刻とは、珍しいこともあるものだ。

到着時にこつてり絞り上げられる口実ができた、と考えると口元が自然と緩んだ。我ながら加虐を快楽に結び付けているこの方程式はどこから来たのかとすら思う。程度が軽いのがせめてもの救いといったところか。

そんな碌でもないことに脳味噌を行使する中、不意に背後から扉の開閉音が静かに鳴り響いた。玄関口とは真逆の方向からだ。となると、やはり彼女は屋敷内にいたのか。もう少し念入りに探しておくべきだった。瞬間的に多様な思考を処理しながら、アトラスは振り返った。

「何だルネ、いたのなら返事ぐらい——」

そして視線の先に目的の人物を捉えた瞬間、アトラスは我が眼を疑いたくなるほどの衝撃を味わった。

まず最初に、煌めく金髪の上に無造作に覆い被さる純白のタオルが眼に入り、その後目線が頭部と爪先を何回も往復した。頬は火照って妖艶さが滲み出ており、僅かながらに蒸気が漂っている。滑らかな白肌、優美な曲線を描く素足と細くしなやかな両腕。胸部に左右一つずつある膨らみは予想よりも量感があるように見える——。

不必要な情報が次々と脳内に侵入してきていることに気付き、思わず脳髓が内部爆発してパンクしそうな気がした。情報を遮断しながら必死に自制心を働かせる。波形に揺れ動く心が安定化するまでに二秒ほどの時間が流れた。

——落ち着け。ここで冷静さを失ったら負けだ。この場合の勝敗において大事なのはポーカーフェイス。目視によって把握できる範囲で少しでも引け目を見せてしまったらアウトだ。

行動自体に悪意はない。だが、弁解するのにも不利な要素が多過

ぎる。残された手の内でこの窮地を脱するには、やはり悪知恵を働かせてでもブラフをかけるしか逃げ道はないだろう。

アトラスは心とは真逆とも言っても良い、人間特有のコミュニケーションツールである感情を顔に全く灯さず、冷淡な口調で言った。「――随分と洒落たご登場だな」

言葉終わりに、視界の全面を忽然と現れた真白の布が覆った。突然の出来事に対応が間に合わず、入り込んだ白に正面の女性が消えていく。

水気を含んだ白布から放たれる馨しい香りが鼻を刺激する。その時点で漸く彼女が湯浴みを終えた直後だということを把握した。

「き、貴様……！　それが人の裸を平然と見た者の台詞か！？　それとも何か、私に計らう礼節は持ち合わせていないとも言つのか！？」

例えば目の前が見えなくなろうとも、早口言葉のような怒声が飛んでくようにも、アトラスは動じなかった。下手に動揺を露わにすることは敗北に直結し兼ねない。虚無の心を以て事に当たる、現状ではそれが重要視される。

戦地で情けを遮断するための心構えがこんなところで役立つとは……無慈悲な世の中もたまには享楽に耽る機会を与えてくれるようだ。

既に罪悪感の欠片も感じなくなったアトラスは、顔の布切れを引き剥がし、痛快な気分を笑みに変換しながら口を開いた。

「……生憎だが、伯爵位にもなるとそういった耐性は自然と身に付く。それに見合うだけの経験を積んでいるからな」

「なっ……」

言葉を拡大解釈したと思われるルネの反応は想像以上だった。僅かな時間で複数の表情がローテーションし、火照った顔がさらに真っ赤に染まった。開いたままの口からは言葉が一向に出てこない。普段は人に不信的で警戒心の塊のような人物である彼女も、こういう時には素直に言葉を鵜呑みにするのが面白おかしい。

「フツ、冗談だ。それより早く服を着たらどうだ、風邪を引くぞ」
手に持った白布をルネに渡し、アトラスは手近の揺り椅子に腰を下ろした。莞爾として笑う口元を維持したまま、瞳を閉じて考える。戦場での駆け引きで頭を悩めるよりも、こういった駆け引きのほうが無難で良いのかもしれない。溢れ返る不安を一時的にでも忘れることができるのだから。

悠久の息抜きを与えられることはないだろうが、戦場に赴くのが日常化された兵士にも休息は必要であろう。いつか訪れるかも知れぬ危機を常に警戒する身なら尚更だ。

——だからこそ、せめて戦場にはいない時だけは、君の言う無益な愉悦を味わうのも悪くないよ。

護衛役をしていた時の記憶から一つの言葉が呼び覚まされ、不図して脳裏に響いた。

「——それで、結果的にシャルルを生かしてしまったというわけか」
どこか刺々しい物言いで裁判の感想を聞いた頃には、ルネは袖口が広がったホワイトブラウスの上に黒のベストを重ね、白黒のオーバースカートを穿いていた。そういえば、彼女が軍服以外の衣服を着ている姿は初めて見る。何だか凄く新鮮だ。

彼女の服装を一瞥しながら、アトラスは苦笑を挿みつつ言った。
「つくづく愚鈍な行いさ。殺すべき相手が親友、たったそれだけのことが心を大きく揺さぶった。殺したくない、だけど殺さなくてはならない。そんな意志と使命の狭間で苦悩し、最終的には自分に不利だと解りつつ彼を助けてしまった。これは過失なんてレベルでは済まされないだろうな……」

国軍との正面衝突を控えている立場からすれば、今回の行動は決して褒められたものではない。友に情が移ったことで、兵員に損害がでなければ良いが……。

——人世は屈辱と苦悩に満ちている、か。まさにその通りだ。

神書の冒頭を咄嗟に思い返して感慨に近いものを痛感した直後、その言葉を教えてくれたルネが苦い口調で示唆してくる。

「奴はまだまだ強くなる可能性を秘めている。お前のその行いが、後に後悔を生み出すことにならなければいいがな」

「そうだな……」

おそらく、決闘を見越して許可書まで渡していたマーヴィスは、決着さえも予想して既に次の手を打っている。無罪と共に三銃士同等の実力を持つと認知された友の行く末は考えるまでもない。与えられる殊遇はきつとシャルルも望んだものとなる。

だが、それは親友との避けられぬ衝突が生まれることを意味する。そして決闘が再び訪れるのなら、その時はアトラスが反逆者の仮面を被っている時に他ならない。

——万が一その時が来た場合、僕はシャルルを殺さなくてはならない。

でも、心のどこかでは今も信じているのかもしれない。彼となら、きつと解り合うことができる、と。何故なら、衝突が習慣化していた筈の二人は次第に心を通わせ、時が経つにつれ知人から友人へと変わっていったのだから。

そうだ。だから今回もきつと……………。

裁判後に様々な手続きを済ませ、国軍本部の外に出た時には、上空は気鬱な黄昏色に染まっていた。

決闘が終結し裁判所を抜けてすぐ、シャルルはロシュフォールに呼び止められた。次いで彼の口から飛び出た言葉は勝利への祝辞ではなく、推薦による軍正式採用という名目の特別待遇だと知った時は驚かずにはいらなかった。

訳も解らないまま別室に案内された後は、契約事項を含めた長つたらしい話を延々と聞かされ続けた。小難しい話が苦手な身として

は、あの時間は苦痛以外の何物でもなかった気さえする。

シャルルを推挙した人物の名は、アドルフ・マーヴィス公爵。裁判が決闘に変わる前に名が出てきた貴族だ。ロシュフォールの話によると、決闘の結果次第では即座に准士官として軍籍に身を置かせるよう言われていたらしい。先の展開を予想して行動するところといい、アトラス並に頭が切れる人物のようだ。

とはいえ、特別処置の尾鰭に付随してきた提案は、シャルルにとって都合の良いものに違いなかった。思いも寄らない道を提示されたが、それを受け入れるだけで軍人になるという目的が予定通り達成されるのだ。断る理由は見当たらなかった。

書類手続きを終え、話はまた翌日——そう言われて解放されたが、正直明日まですることがない。アトラスは数日前のシャルル同様に尋問を受けた後、用事があると言って出掛けてしまったので、シャルルは少し早めに指定された宿に向かうことにした。

土地勘の全くない都市を軍部から貴族地域に踏み入りてく歩く歩いてみると、周りの視線が妙に気になった。気取られないよう横目で慎重に辺りを確認してみると、擦れ違った者全員がシャルルに物珍しそうな眼を向けているわけではなかった。同じ服装をした二人組が放つ怨念染みた眼光、それが不可解な視線の正体だった。

軍服とはやや異なる制服——おそらく士官学校のものに間違いないだろう。軍人志願者が集う学び舎の生徒。特別待遇を拒否して正規のルートを通っていれば、シャルルもその一員になる筈だった。

咄嗟の判断で耳を澄ませてみると、視界の隅に立つ二人の学生がひそひそと話す声が聞こえた。

「聞いたか……アイツだよ、例の」

「ああ……確か、マーヴィス公爵の推薦で入軍したって奴だろ。良いやなー、士官学校にも通わず軍人になれてさ」

罵声の対象が自分であることはすぐに理解できたが、シャルルはそれを聞き流して歩き続けた。情報の広まりが予想より早いのが少し気になったが、軍人候補生と揉め事を起こすのは好ましくない。

……出世の道をつつ走るアトラスも、同じような罵詈雑言を何年も浴び続けてきたのだろうか。

「その内、爵位にまで手を出すんじゃないのか？ ……まあ仮にそうだったら、士官学校に悪名を刻み込んでいった、アトラス・フェールの二番煎じだな」

次第に大きくなる声量と不愉快な笑声、そして聞き慣れた名前がシャルルの足を止めさせた。猛スピードで膨れ上がった感情が毛細血管の一つを引き千切るような感覚を与え、それを凝縮した威圧的な視線が二人組の男を射た。数秒もしない内に目が合い、相手が僅かな戦きを見せる。

シャルル自身を標的とした悪態ならまだ我慢できた。だが、その延長で友人を揶揄することだけは見過ごせなかった。見も知りもしない他人との間に明確な軋轢が生じた気がした。

拳を強く握り締め、相手に食って掛かろうと足を一步踏み出した瞬間、背後から聞き覚えのある快活な——それでいてどこか落ち着きのある——高声が飛来した。

「陰口は感心しないな、未来の軍人候補生さん」

予期せぬ闖入に驚きながら反射的に振り返ると、高圧的な態度を取ろうとしていたシャルルの目線の先で、金色の長髪が緩やかに靡いた――。

意志と使命（後編）（後書き）

近頃、更新スピードが一定化しつつあります。お久しぶりです。今回の更新で《意志と使命》は終わりになります。それなりに遊んで文字数を増やしましたが、意外とすんなり終わりました。

前々回の更新時にヒロインが後半に出てくる……ようなことを言ったと思いますが……見ての通り、ほぼ登場しませんでした。チラリズムもいいところです。影が映った程度です。申し訳ない。本来ならきちんと登場する予定だったんですが……僅かに進路変更して一言登場になりました。……でも大丈夫、次回は間違いなく登場します。

暫く戦闘のない場面が続きますが、シリアスマツしぐらというのも個人的に詰まらないので、色々と挿んでいく予定です。まあ、伏線が割と多いので、ちゃんと回収しきれるかが少し不安ですが……何とかなるだろう。うん、信じてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9754u/>

PHILIA Another ～災厄ノ箱～

2011年10月31日05時16分発行